福岡県の近世窯業関係遺跡

福岡県文化財調査報告書　第 284 集

2024

福岡県教育委員会

序

安土桃山時代末期、文禄・慶長の役に伴い、朝鮮半島から九州に渡来した多くの陶工たちによって、九州各地で国焼が興りました。この陶工たちによる新たな焼物技術の導入は、我が国の陶磁器の歴史にも大きな影響を与えました。

現在の福岡県域においては、筑前では黒田氏が高取焼を、豊前では細川氏が上野焼を興します。これらの窯は江戸時代初頭の茶人大名である小堀遠州が指導した遠州七窯としても有名です。筑後では、江戸時代初頭に田中氏の下で蒲池焼が興り、その後、久留米藩・柳河藩の下で、藩窯のみでなく、様々な民窯で焼物が焼かれました。

明治時代の廃藩置県により、多くの藩窯は廃窯に追い込まれますが、民窯として継続する窯もありました。特に小石原焼は、大正時代に柳宗悦、バーナード・リーチらによる民藝運動で高く称賛されたことで有名です。

福岡県教育委員会では、江戸時代以降に焼物が焼かれた場所を、近世窯業関係遺跡として捉え、現状を把握するために、令和２年度から緊急分布調査を開始し、４年にわたる調査を終えて、ここに報告書を刊行する運びとなりました。

焼物は現在の私たちの生活に欠かせない日用品であり、我が国における茶の湯文化の発展に大きく寄与してきました。その焼物を生産した窯跡について、今後、文化財として保存・活用していくなど、適切な保護の推進を図っていくことで、本県の特色ある焼物の歴史を後世に残していくことができます。

近世窯業関係遺跡の調査や報告書の作成において、地元自治体を始め多くの方々に御支援・御助力いただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

令和６年３月３１日

福岡県教育委員会

教育長　吉 田　法 稔

例　言

1．本書は、令和２～５年度に国庫補助を受けて福岡県教育委員会が実施した福岡県内の窯業関係遺跡に関する調査報告書である。

2．調査にあたっては福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会を設置し、その指導のもとに現地調査や資料作成等を行った。

3．本書における「窯業関係遺跡」は、焼物＝窯業に関わる構造物や痕跡並びにそれらが埋蔵されている場所を指している。主として近世を対象とするが、近代に続き操業された窯で遺跡となっているものも含めた。

4．本書においては、窯跡等が近世の江戸時代を中心とすることもあり、原則として内容について言及する際には旧国や藩ごとに示した。現在の福岡県域は明治９年（1876）８月 21 日に確立したが、江戸期には、筑前に福岡藩・秋月藩のほか対馬府中藩領、中津藩領、幕府御料があり、筑後には久留米藩･柳河藩や下手渡藩（三池藩）、豊前には小倉藩･小倉新田藩･豊津藩･中津藩の一部などがあった。

5．調査は、当該地区の市町村の協力のもとに実施した。また掲載した出土遺物は九州歴史資料館及び各市町村に保管されており、遺物実測図に所蔵先を明記した。

6．Ⅲ -2 の重点調査の報告に使用した地図は、国土地理院発行 1/25,000 地形図を編集・加工したものである。

7．本調査・報告に係る参考文献は、巻末にまとめて掲載した。

8．本書に掲載した発掘調査の遺構写真・遺構実測図は、参考文献に掲げる報告書等から再録したものである。ただし、上畑窯跡実測図は新たに岡垣町教育委員会から提供を受けた。現況写真は、明示したもの以外は事務局で撮影したものである。

9．本書は、Ⅰ・Ⅱは伊﨑俊秋・岸本圭・坂本真一、Ⅲは岸本、坂本、遠藤啓介が執筆した。Ⅳの１・２は坂本、３は酒井芳司、４は岸本、Ⅴは坂本が担当し、編集は坂本が行った。

目　次

Ⅰ　はじめに…… 1
1. 調査に至る経過 …… 1
2. 調査の経過 …… 2
3. 調査の組織 …… 6

Ⅱ　福岡県の近世窯業遺跡に関する調査…… 7
1. 福岡県の近世窯業の概要 …… 7
2. 福岡県の近世陶磁の把握 …… 8
3. 福岡県の埋蔵文化財と近世窯業遺跡の調査 …… 10
4. 近世窯業遺跡の史跡指定等 …… 13
5. 皿山の地名 …… 15

Ⅲ　福岡県近世窯業関係遺跡調査…… 17
1. 第一次調査（悉皆調査）…… 17
2. 第二次調査（重点調査）…… 17
3. 各遺跡の詳細 …… 18

表１　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡…… 20 ～ 45

表２　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　関係遺跡…… 46・47

Ⅳ　総括…… 139
1. 調査成果 …… 139
2. 福岡県における近世の窯跡と窯道具について …… 141
3. 文献史料調査の成果と課題 …… 150

表３　歴史史料調査…… 152 ～ 163

4. 窯跡の保存と活用 …… 164

Ⅴ　おわりに …… 167

○福岡県の窯業関係事象年表…… 168
○参考文献…… 172

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経過

埋蔵文化財の保護にあたっては、その把握と周知が重要であり、このことは文化財保護法第 95 条に規定されている。埋蔵文化財は土地に埋蔵されているという性格上、把握にあたっては試掘・確認調査等の成果を反映させ、より精度を高めていく必要がある。福岡県教育委員会では、これまで昭和 51 ～ 55 年度（1976 ～ 1980）に『福岡県遺跡等分布地図』16 冊を刊行し、県内の埋蔵文化財包蔵地の周知化を行った。それ以降、各自治体が主体となり、更なる分布調査や試掘・確認調査の積み重ねにより、埋蔵文化財包蔵地地図の精度を高めてきた。

埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲については国による考え方が示されている。文化庁に設置された「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会」（平成 6 年（1994）10 月設置）は、平成 10 年（1998）6 月に「埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取扱いについて」の報告を行った。これは文化庁記念物課（現文化財第二課）埋蔵文化財部門が所管するもので、この中で、埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲は「全国に共通する原則としては、当面、次のとおりとするのが適切と考えられる」とした。

①おおむね中世までに属する遺跡は、原則として対象とすること。

②近世に属する遺跡については、地域において必要なものを対象とすることができること。

③近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができること。

この報告は同年 9 月 29 日付で「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」として各都道府県教育委員会教育長宛てに通知・周知された。この「平成 10 年通知」をもって、条件付きながら近世の遺跡は「地域において必要なものを対象とすることができること」となり、さらには近現代の遺跡についても調査対象とすることができるようになった。また、埋蔵文化財保護対策等九州地区協議会でも、「九州地区埋蔵文化財発掘調査基準」を定め、埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲については文化庁の考えと軌を一にしている。

そして、文化庁記念物課が監修した『発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編―』（2010 年 5 月）において、「埋蔵文化財は、‥‥文字や記録のない先史時代はもとより、古代や中・近世さらには近・現代においても、文献史料だけからでは知ることのできない歴史や文化を明らかにする手がかりとなるものである」（p2）とされた。さらには同書第Ⅲ章第 1 節「2 埋蔵文化財包蔵地の範囲」において、「近世以降の遺跡の扱い」は「各地方公共団体では、今日的な観点から、埋蔵文化財として扱う範囲について再検討し、適切な保護措置をとることが求められる」(p51) としている。

埋蔵文化財の周知化は、各自治体の取組を主体とする一方、「地域において必要なもの」や「地域において特に重要なもの」という視点は、市町村域を越え、県内を俯瞰した評価が必要となる。そこで福岡県教育委員会では、遺跡の性格に応じた県内遺跡の詳細分布調査を進めてきた。平成 24 ～ 28 年度（2012 ～ 2016）『福岡県の中近世城館跡』（Ⅰ）～（Ⅳ）、平成 29 ～令和元年度（2017 ～ 2019）『福岡県の戦争遺跡』の調査及び報告書の刊行がこれに該当する。

近世窯業関係遺跡については、昭和 30 年（1955）に福智町釜ノ口窯跡、昭和 54 年（1979）直方市内ヶ磯窯跡を始めとし、早い段階から発掘調査が行われており、地域において必要なものとして扱われてきた。特に、北九州市菜園場窯跡、東峰村釜床 1 号窯跡、一本杉 2 号窯跡は発掘調査の結果、重要な価値

が見出され、県指定史跡（菜園場窯跡は移設保存したため県指定有形文化財（考古資料））として保護されている。福岡県内には近世初期から現在まで高取焼、上野焼を始めとした窯が操業しているが、その全容を把握するまでには至っていなかったため『福岡県の近世窯業関係遺跡』として調査することとした。当初は令和２年度（2020）から４年度（2022）の３ヵ年事業としたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大による緊急事態宣言発出等により現地調査や委員会開催ができず、調査期間を令和５年度（2023）まで延長することとした。

２．調査の経過

a. 福岡県近世窯業関係遺跡調査基本方針

まず、窯業遺跡を調査するにあたり、その基本方針を定め、福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会に諮った上で、その方針に則って実施していくこととした。基本方針は次のとおり定めた。

福岡県近世窯業関係遺跡調査基本方針

１　必要性と目的

福岡県内では、高取焼、上野焼を始め、近世以降多くの陶磁器が生産されている。また、近年では、小石原焼が重要無形文化財に指定され、技術の保持者として福島善三氏が認定されるなど、県内の窯業に対する関心が高まっている。

現在、このような窯業を始めとした、近世以降の生産遺跡は、各自治体にとって重要と考えられるもののみが記録保存調査の対象となっている。これらの遺跡は、県内における位置付けが十分になされていないものが多いことから、歴史上又は学術上重要なものがあるにもかかわらず、近年の開発により把握されないままに消滅したものもあると考えられる。

このため、福岡県教育委員会において、県内の近世以降の窯業関係の生産遺跡について悉皆調査を行い、現状の把握及び評価を行うことで、適切な保護の推進に資するものとする。また、それらの調査を通し、地域の歴史を掘り起こすことで、新たな地域の魅力の創出にも繋がると考えられる。

２　対象・範囲

調査の対象は、江戸時代に営まれた陶磁器等の窯跡とする。その他、陶磁器に関連する生産関連遺跡（陶土・粘土等の原料採掘遺跡、工房跡など）も対象とする。

３　組織・体制

(1) 調査は、文化財保護課と九州歴史資料館が連携して実施する。文化財保護課は事務手続と事業の統括を、九州歴史資料館は調査をそれぞれ主たる任務とする。

(2) 調査の対象、方針やスケジュール、遺跡の評価に関して、学識経験者から指導･助言を受けるため「福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会設置要項」を定める。

４　スケジュール

令和２年度：既存情報の把握、整理

令和３年度：一次調査（悉皆調査：基礎的な情報収集と整理）

　　二次調査（重点調査：重要遺跡の詳細調査）

令和４年度：二次調査（重点調査：継続調査）

令和５年度：二次調査（重点調査：補足調査）
調査内容に基づく成果報告書の作成

５　調査結果の取扱い

・調査の成果は調査報告書として刊行し、県内の文化財関係機関や図書館に送付して幅広く閲覧に供する。
・地域にとって必要なものについては、文化財保護法第 95 条に基づき、「埋蔵文化財包蔵地」に決定して保護の対象とし、周知の徹底を図る。
・重要な遺跡については、国、県又は市町村による史跡指定や登録による保護を推進する。

b. 第一次調査（悉皆調査）と調査指導委員会

令和２年度は事務局で協議を行い、「福岡県近世窯業関係遺跡調査基本方針」を定め、九州歴史資料館において、諸文献等を参照して基礎となる一覧表を作成した。この一覧表は、県内に所在する近世～近代（明治時代）の窯跡について書籍・県・市町村誌類や関係論文から情報を収集し、遺跡・関係遺構などを取り上げたものである。その内訳は、各旧国における陶磁器窯跡地名表（調査表１）に、筑前 50 件余、筑後 30 件余、豊前 20 件余を掲載した。窯業関係施設等の地名表（調査表２）は、参考事例として５件程載せたのみであった。それに参考文献一覧表を加えた。

この調査表１・２について、令和２年９月 24 日付２教文第 1639 号で「近世窯業関係遺跡に係る既存情報の整理について」の文書を県内 60 の自治体に送付し、11 月末を締切として加除修正を依頼した。各窯跡については、県内を筑前・筑後・豊前の旧国名毎に分け、筑前 50 件、筑後 31 件、豊前 22 件の合計 103 件を確認した。また近世窯業関係遺跡に関わる、陶土の採取地や陶磁生産の作業場所、販売・管理をする施設、神社・記念碑・墓地などを対象とした関係遺跡としては、筑前 16 件、筑後５件、豊前４件の合計 25 件を確認した。

その成果をもとに、令和３年１月 19 日に第１回の福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会（以下、委員会という）を開催する運びとなったが、新型コロナウイルス感染症感染拡大による非常事態宣言が発せられたこともあり、オンラインによる会議開催となった。委員長に大橋康二委員を選出し、福岡県近世窯業関係遺跡調査基本方針のもと調査を進めていくことやスケジュール等についての説明を行い、意見をいただいた。

令和３年度第２回委員会は東峰村で開催し、釜床１号（県指定）・２号窯跡、一本杉１号・２号（県指定）窯跡を視察した。委員会では新型コロナウイルス感染症感染拡大による緊急事態宣言発出により、重点調査が遅れているため、スケジュールを１年延長（令和５年度まで）することと重点調査のリスト内容

第3回近世窯業関係遺跡調査指導委員会

第5回近世窯業関係遺跡調査指導委員会

について了承を得た。また陶片だけではなく、窯道具の実態を調べる必要について、意見をいただいた。

令和４年度は委員会を２回開催した。第３回委員会は福智町で開催し、直方市永満寺宅間窯跡、福智町皿山本窯跡、釜ノ口窯跡、岩屋高麗窯跡を視察した。委員会では現地調査で位置が特定できない窯跡については、古地図等を確認するように指摘を受けた。また窯跡の時期については、文献等の記録と異なる場合があるので確認が必要との指摘を受けた。第４回委員会はみやま市で開催し、筑後市赤坂焼窯跡、みやま市二川焼窯跡を視察した。委員会ではできるだけ現地の窯の有無を確認するよう指摘を受け、令和５年度刊行の調査成果報告書についても指摘を受けた。

令和５年度は第５回委員会を須恵町で開催し、須恵町立歴史民俗資料館及び須恵町立美術センター久我記念館所蔵の須恵焼資料を実見した。委員会では報告書の内容について協議した。

委員会一覧

名　称	日　時	場　所
第１回　福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会	令和３（2021）年１月 19 日	福岡県庁４階会議室（オンライン）
第２回　福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会	令和３（2021）年 12 月３日	東峰村小石原庁舎第１会議室
第３回　福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会	令和４（2022）年５月 17 日	福智町中央公民館２階研修室
第４回　福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会	令和４（2022）年 12 月 27 日	みやま市まいピア高田第１会議室
第５回　福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会	令和５（2023）年 11 月 10 日	須恵町アザレアホール会議室

c. 第二次調査（重点調査）

第一次調査を基に、福岡という地域の特質を示す遺跡と遺構の残りが極めて良く、保存して価値を伝えるのに適した遺跡という２つの選定基準に基づき、特に重点的に調査をしなければならない場所を 24 件選定した。その内訳は高取焼関係９件、上野焼関係３件、地域窯として筑前４件、筑後５件、豊前４件である。すでに発掘調査で遺跡の内容が明らかな遺跡については、重点調査から除外している。

重点調査では、遺跡の位置の特定・現状の把握・写真撮影等の記録の作成を行い、調査に当たっては原則として当該市町村の文化財担当者とともに現地確認を行った。重点調査は、第２回委員会時に調査候補リストを上げるために、４月の東峰村の小石原焼関係から着手した。まず県指定史跡である小石原窯跡群の釜床１号窯跡と一本杉２号窯跡の現況の確認と窯跡に関連する天照太神宮から始めた。同年８月には、上野焼のある福智町の皿山本窯跡、釜ノ口窯跡、岩屋高麗窯跡の現況確認を行った。同年 12 月には東峰村で第２回委員会を開催し、そこで調査候補リスト 25 件について、委員会で了承を得て、１月には朝倉市浄満寺窯跡、野鳥窯跡、２月には香春町田香焼窯跡の調査を行った。令和４年度はさらに重点調査を進め、特に筑後地域で筑後市２件、八女市５件、みやま市１件、豊前地域でみやこ町２件、上毛町１件の調査を行った。これら地方窯以外にも小石原焼関連で東峰村７件も調査を行った。令和５年度は報告書を作成する過程で、委員会時に指摘された瓦窯の調査として東峰村の奥畑瓦窯跡、嘉麻市から新たに情報提供のあった野口窯跡と事務局で必要と判断した福岡市の野間焼窯跡と関連遺構、大牟田市の黒崎焼窯跡、須恵町の役所畑新窯跡と昨年度確認できなかったみやこ町の乙子焼窯跡を追加調査した。

d. 調査経過一覧

令和３～５年度の３年間の調査経過について、前述したことも含めて列記する。

令和３年度

日時	市町村名	調　査　地	備　考
4月13日	朝倉郡東峰村	釜床１号窯跡　天照太神宮　小石原伝統産業館	窯跡と関連遺跡の確認 小石原焼の展示視察
4月23日	朝倉郡東峰村	一本杉窯跡　十文字窯跡	十文字窯跡のみ窯跡未確認
8月5日	田川郡福智町	釜ノ口窯跡　皿山本窯跡　岩屋高麗窯跡	岩屋高麗窯跡のみ窯跡未確認
12月3日	朝倉郡東峰村	釜床１号窯跡　天照太神宮　一本杉窯跡 陶神（石碑）など	第２回委員会時の視察
1月28日	朝倉市	浄満寺窯跡　野鳥窯跡	野鳥窯跡のみ窯跡未確認だが、遺物は採集
2月25日	田川郡香春町	田香焼窯跡　陶工の墓　香春町歴史資料館	窯跡と関連遺跡の確認

令和４年度

日時	市町村名	調　査　地	備　考
4月8日	筑後市	赤坂焼窯跡　赤坂神社　坂東寺焼窯跡	坂東寺焼窯跡のみ未確認だが、石碑を確認
4月22日	朝倉郡東峰村	釜床２号窯跡　中野上の原窯跡 火口谷１号窯跡	釜床２号窯跡の場所と高取八山夫妻の墓を確認
4月27日	八女市	星野十籠焼窯跡　鹿子生焼窯跡　池の本焼窯跡	星野十籠窯跡の場所と鹿子生焼窯跡の消滅を確認 池の本焼窯跡のみ未確認
5月17日	田川郡福智町	釜ノ口窯跡　皿山本窯跡　永満寺宅間窯跡 岩屋高麗窯跡	第３回委員会時の視察
5月27日	朝倉郡東峰村	池の谷窯跡　大明神窯跡 旧上組・旧下組窯跡	大明神窯跡と旧上組・旧下組窯跡は未確認
6月9日	京都郡みやこ町	乙子焼窯跡　錦原皿山窯跡	窯跡未確認
6月15日	八女市	本星野焼窯跡　釈形焼窯跡 （再調査）池の本焼窯跡	窯跡の確認
7月1日	朝倉郡東峰村	（再調査）大明神窯跡　旧上組・旧下組窯跡	大明神窯跡のみ未確認
12月4日	みやま市	二川焼窯跡［富重窯・角窯］	窯跡の確認
12月14日	嘉麻市	黒田窯跡	窯跡の確認
12月27日	みやま市	二川焼窯跡［富重窯・角窯］	第４回委員会時の視察
2月14日	朝倉郡東峰村	金敷様裏窯跡	３号窯跡のみ確認し、１・２号窯跡は未確認
2月20日	築上郡上毛町	唐原焼窯跡	窯跡の確認
3月17日	みやま市	（再調査）二川焼窯跡［角窯］	窯跡の確認

令和５年度

日時	市町村名	調　査　地	備　考
4月12日	朝倉郡東峰村	奥畑瓦窯跡	窯跡の確認
4月21日	嘉麻市	黒田窯跡　野口窯跡	野口窯跡のみ窯跡未確認だが、遺物は採集
5月2日	福岡市 糟屋郡須恵町	野間焼窯跡　山王神社　陶工の墓 役所畑新窯跡	窯跡と関連遺跡の確認
6月14日	京都郡みやこ町	乙子焼窯跡	窯跡の確認
8月17日	大牟田市	黒崎焼窯跡	窯跡の確認
11月10日	糟屋郡須恵町	須恵焼窯跡［福岡藩御用窯跡］ 役所畑新窯跡	第５回委員会時の視察
11月29日	八女市	男ノ子焼窯跡	窯跡の確認

３．調査の組織

福岡県窯業関係遺跡調査指導委員会では委員を３人に委嘱した。また、４か年の窯業遺跡に関する調査において、市町村の文化財担当者のみならず、関係諸機関、土地所有者など実に多くの方々に御協力・御支援をいただいた。関係者を含めて下記に列記し、深く感謝いたします。

○福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会

委員長：大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問）

委　員：辻田淳一郎（九州大学大学院人文科学研究院准教授）

宮地英敏（九州大学附属図書館記録資料館准教授）

〔事務局〕

	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度
[福岡県教育委員会]				
教育長	城戸秀明	吉田法稔	吉田法稔	吉田法稔
副教育長	木原　茂	寺崎雅巳	上田哲子	上田哲子
教育監	寺崎雅巳	合屋伸一	深瀬信也	山本博康
教育総務部長	上田哲子	上田哲子	松永一雄	松永一雄
文化財保護課長	綾部耕士	明永好弘	明永好弘	比山裕隆
同　参事			田上　稔	
同　参事兼課長技術補佐	田上　稔	田上　稔		杉原敏之
同　課長技術補佐			杉原敏之（企画埋蔵文化財係長兼務）	
同　企画・埋蔵文化財係長	杉原敏之	杉原敏之		大庭孝夫
同　企画・埋蔵文化財係	宮地聡一郎	宮地聡一郎	大庭孝夫	岡田　諭
	大庭孝夫	大庭孝夫	城門義廣	城門義廣
	城門義廣	城門義廣	出見優人	出見優人
[九州歴史資料館]				
館長	吉田法稔	城戸秀明	城戸秀明	城戸秀明
副館長	安永千里	安永千里	吉村靖徳（埋文室長兼務）	吉村靖徳
学芸調査室学芸研究班		酒井芳司	酒井芳司	酒井芳司
		遠藤啓介	遠藤啓介	遠藤啓介
文化財調査室長	吉村靖徳			
埋蔵文化財調査室長		吉村靖徳		吉田東明
文化財調査室室長補佐	伊﨑俊秋			
同　文化財調査班長	森井啓次	森井啓次	森井啓次	進村真之
同　文化財調査班		小川泰樹	小川泰樹	岸本　圭
	坂本真一	坂本真一	坂本真一	坂本真一

現地調査その他でお世話になった方々（敬称略：順不同）
中島圭（朝倉市教育委員会）、嶋田光一（飯塚市教育委員会）、大津諒太（うきは市教育委員会）、中村渉・宮本博喜・前﨑智行（大牟田市）、朝原泰介（岡垣町教育委員会）、尾方禎莉・舌間悟（嘉麻市教育委員会）、野村憲一・是石嵩伸（香春町教育委員会）、福永将大（九州大学総合研究博物館）、水原道範・小澤太郎（久留米市）、矢野和昭（上毛町教育委員会）、山下啓之（須恵町教育委員会）、日高正幸（元東峰村教育委員会）、内野嗣昭（東峰村教育委員会）、太田富隆、高取焼宗家、高取八仙、柳瀬眞一、田村悟（直方市教育委員会）、佐々木四十臣・佐藤好英（福岡県文化財保護指導委員）田上勇一郎（福岡市）、井上勇也・小池史哲（福智町教育委員会）、木村達美・中尾克則（みやこ町教育委員会）、猿渡真弓・瓜生建（みやま市教育委員会）、角弘惠、伊﨑俊秋（八女市岩戸山歴史文化交流館）、壇佳克・江頭俊介（八女市教育委員会）、谷川雅啓、平岡邦幸

Ⅱ　福岡県の近世窯業遺跡に関する調査

１．福岡県の近世窯業の概要

福岡県は明治９年 (1876) に筑前国・筑後国・豊前国６郡をもって成立した。この三国には、それぞれ藩によって経営された、あるいは藩への献上品を焼いた窯がある。筑前福岡藩の高取焼、豊前小倉藩の上野焼、筑後久留米藩の坂東寺焼等、筑後柳河藩の蒲池焼が該当する。以下に旧国単位で近世窯業を概観する。

日本の近世窯業の発端は、文禄・慶長の役によってもたらされた陶工の技術にある。本県では筑前の高取焼と豊前の上野焼がそれに該当し、文献上で高取焼が八山、上野焼が尊楷の手によるものとされる。高取焼については、永満寺宅間窯に始まり、内ヶ磯窯で本格的な操業が行われる。八山が帰国を願い出たことにより、藩主から蟄居を命ぜられ山田窯に移るが、その後、許しを得て白旗山窯で生産を行う。後に、窯を小石原鼓の釜床窯に移し、更には現在の福岡市へ移し大鋸谷窯、東皿山窯で幕末の廃藩置県まで操業を続ける。これら高取焼は陶器を焼くものであったが、白旗山窯では試験的に磁器焼成がなされている。なお、永満寺宅間窯に近い黎明期のものとして上畑窯・千石窯が挙げられるが、操業期間は短期間の可能性が高い。

筑前秋月藩では 18 世紀以降に城下の浄満寺窯・野鳥窯で陶器生産が行われた。

筑前の民窯としては、高取家の中から小石原地区で主に日用品を焼く系譜が成立し、この延長に現在の小石原焼がある。一番古く位置付けられるのが一本杉窯であり、その後、中野上の原窯、火口谷窯、金敷様裏窯へと続く。大分県日田市の小鹿田焼もまた 18 世紀初頭に小石原から技術が伝えられたものである。中野上の原窯では肥前陶工を招き、磁器生産に着手するが、材料の問題で生産は続かなかった。その後の筑前における磁器生産は、須恵焼窯で宝暦年間に本格的な窯が築かれ、以後藩窯と民窯を繰り返し変遷しながら、かなりの生産量を誇ったとみられる。

筑前の福岡地区にも 18 世紀以降に高取焼の流れを汲む西皿山窯のほか、能古焼や野間焼等の民窯が営まれた。また、遠賀川上流域の嘉穂地域にも黒田焼等の民窯が複数営まれた。

豊前上野焼が本格的に焼かれた最初の窯は釜ノ口窯である。開窯年代は明らかでないが、細川氏が小倉城に入城した慶長８年（1603）以降とされる。釜ノ口窯は細川氏の肥後転封により閉窯したとされ、その後は皿山本窯に移り、小笠原氏の下、幕末の廃藩置県までの長期に渡り操業された。小倉藩のお楽

しみ窯として小倉城下に菜園場窯が営まれた。上野焼の陶工は田香焼等の多くの民窯に移った記録が残されている。

豊前豊津地域にも乙子焼窯・錦原皿山窯等がみられるが、藩の奨励策に基づくものと考えられる。

筑後国では田中吉政が入国後、蒲池焼を開かせたと伝えられる。元和６年（1620）の田中家改易後、柳河藩は立花宗茂が復帰、久留米藩には有馬豊氏が転封される。久留米藩は坂東寺焼を開窯した。久留米藩のお楽しみ窯としては、柳原焼と東野亭焼がある。18 世紀前半には朝妻窯で磁器が本格的に焼かれるようになった。19 世紀になると陶器生産は赤坂焼が中心となったようである。

筑後の特色として、茶の生産との関係で茶壺が多く焼かれた点が挙げられる。寛永９年（1632）や正保４年（1647）の記録に「黒木の焼き物」とあり、釈形焼の可能性がある。矢部川を境として北は久留米藩、南は柳河藩に分かれるが、八女地域の山中では本星野焼・星野焼・男ノ子焼等、茶の貯蔵器を中心に陶器生産が継続された。

また筑後地域では、肥前陶工により始められた二川焼、磁器・陶器の両者を焼いた一の瀬焼・黒崎焼等、民窯も多く営まれた。

県内の近世窯業は廃藩置県により藩の支援が失われた段階で、廃窯に追い込まれたものが多い。しかし、休止期間をおかず再興された地区も少なくない。特に大正～昭和期に展開した柳宗悦らによる民藝運動によって小石原焼や二川焼が注目されるようになり、多くの人々の関心を得ることとなったことは有名である。小石原焼と上野焼は、前者は昭和 50 年（1975）、後者は昭和 58 年（1983）に経済産業大臣による伝統的工芸品の指定を受け、福岡県を代表する焼物と位置付けられている。

２．福岡県の近世陶磁の把握

福岡県内の焼物や窯跡についてどのように把握されていたか、数多くある文献の中で『陶器講座』所収「日本諸国窯一覧」・『原色陶器大辞典』・『福岡県百科事典』及び『近世窯業遺跡データ集成』の４件について見ると、かなり多くの事例のあることがわかる。なかには麁原を鹿原と間違えているものや、誤植・誤認のいずれとも不明の焼物名・窯名も見られ、現時点で確認できないものも幾つかある。しかしながら、今回の悉皆調査の調査表は、これらを参考にして作成した（市町村名は当時のまま記載）。

「日本諸国窯一覧」（『陶器講座』第７巻）（横河民輔；1935 年 12 月：雄山閣）

筑前：石崎焼（筑前）、内ヶ磯窯（筑前内ヶ磯）、糟尾焼（筑前）、小石原焼（筑前小石原）、鹿原焼（筑前鹿原）、白旗山焼（筑前合屋）、須恵焼（筑前須恵）、宗七焼（筑前博多）、高取焼（筑前高取）、中野焼（筑前）、西皿山焼（筑前西新町）、野間焼（筑前野間）、博多瓦町窯（筑前博多）、東山窯（筑前）

筑後：赤石焼（筑後）、朝妻焼（筑後朝妻）、蔵敷焼（筑後）、久留米焼（筑後）、二川焼（筑後渡瀬）、星野焼（筑後久留米）、水田焼（筑後）、柳川焼（筑後柳川）、柳原焼（筑後久留米）

豊前：上野焼（豊前上野）、鳩軒焼（豊前）、常山焼（豊前）、太郎助焼（豊前）、田香焼（豊前）、水町焼（豊前）

『原色陶器大辞典』（加藤藤九郎編；1972 年 10 月：淡交社）

筑前：内ヶ磯窯・永満寺窯（直方市）、折尾窯（北九州市）、小石原焼［中野焼］・鼓村窯（小石原村）、鷺谷焼・麁原窯・宗七焼［博多焼］・茶屋の山窯・西新町窯・西皿山窯・残島高取・野間焼・博多人形・東皿山・（福岡市）、白旗山窯（飯塚市）、須恵焼（須恵町）、高取焼、遠州高取、遠州七

窯、古高取、高取腰簑、高取大海、高取松風・高取耳付、高取面茶碗、博多文琳、五十嵐次左衛門・新九郎・高取善十郎・八蔵［八山］（高取焼陶工）、岡平蔵（博多人形陶工）、新藤安平（須恵焼）

筑後：青木窯・朝妻焼・久留米焼・十三部焼・野中窯・日渡窯・柳原焼（久留米市）、赤坂窯・野町窯・坂東寺焼・水田窯（筑後市）、朝田窯（浮羽町）、今村窯・長岡窯［鹿子生焼］・釈形焼（黒木町）、蒲池焼 [柳川焼]（柳川市）、黒崎焼（大牟田市）、姥ヶ懐窯・二川焼（高田町）、星野焼（星野村）、家長彦三郎（柳川焼陶工）、中尾米吉（二川焼陶工）

豊前：上野焼（赤池町）、香春窯（香春町）、（鳩軒）、小倉焼・水町焼（北九州市）、太郎介焼・田香焼（大任町）、豊前焼、上野喜蔵・十時甫快・十時甫紹・十時孫左衛門・渡久左衛門（上野焼陶工）

上記のほかに、小林賢一郎・黒田政憲、牟田久次・立花実山（南方録）といった福岡県の出身者もしくは所縁のある人などもみられる。

『福岡県百科事典』（1982 年 11 月：西日本新聞社）

筑前：内ヶ磯窯跡（直方市）、小石原焼（朝倉郡小石原村）、須恵焼（糟屋郡須恵町）、千石焼（鞍手郡宮田町）、宗七焼（福岡市博多区）、高取焼、津屋崎人形（宗像郡津屋崎町）、博多人形（福岡市博多）、野間焼（福岡市南区）。なお、高取焼についてはその解説の中で上畑窯跡（遠賀郡岡垣町）、永満寺宅間窯跡（直方市）、内ヶ磯窯跡（直方市）、山田窯跡（山田市）、白旗山窯跡（飯塚市）、小石原鼓窯跡・小石原中野窯跡（朝倉郡小石原村）、大鋸谷窯跡（早良郡田嶋村）、麁原窯跡（早良郡麁原村）に触れられている。

筑後：赤坂人形（筑後市）、赤坂焼（筑後市赤坂）、朝田焼（浮羽郡浮羽町）、朝妻焼（久留米市）、一ノ瀬焼（浮羽郡浮羽町）、蒲池焼（柳川市）、坂東寺焼（筑後市）、二川焼（三池郡高田町）、星野焼（八女郡星野村）、水田焼（筑後市）、柳原焼（久留米市）

豊前：上野焼（田川郡赤池町）、豊前焼

これ以外にも、上野喜蔵や高取八蔵・小島与一・中ノ子タミなどの個人及び窯道具・陶土・登窯といった用語についても取り上げられている。

『近世窯業遺跡データ集成』[福岡県]（1997 年 3 月：国立歴史民俗博物館研究報告 第 73 集）

（福岡県の地名表は副島邦弘が作成）

筑前：能古窯・西皿山窯・東皿山窯・今川高取窯・大鋸谷窯・宗七窯・野間窯・友泉亭窯（福岡市）、須恵窯（須恵町）、上畑窯（岡垣町）、犬鳴窯・朝谷窯（若宮町）、千石窯（宮田町）、白旗山窯（飯塚市）、内ヶ磯窯・永満寺宅間窯（直方市）、山田窯（山田市）、浄満寺窯・野鳥窯（甘木市）、小石原中野窯・鼓窯（小石原村）

筑後：柳原窯・朝妻窯・東野亭窯（久留米市）、田川窯（三潴町）、坂東寺窯・赤坂（三原）窯・水田窯・野町窯（筑後市）、蒲池（柳河）窯（柳川市）、男ノ子窯（立花町）、黒崎窯（大牟田市）、二川窯（高田町）、今村窯・鹿子生窯・釈形窯（黒木町）、星野（十籠）窯（星野村）、朝田（一の瀬）窯（浮羽町）

豊前：菜園場窯（北九州市）、釜ノ口窯・皿山本窯（赤池町）、岩谷高麗窯（方城町）、田香窯（香春町）、田香窯（大任町）

なお、『角川日本地名大辞典　40 福岡県』（1988 年 3 月：角川書店）には、皿山の地名として福岡市南区があり、ほかに皿山公園（須恵町）・皿山町（北九州市小倉北区）が示され、また各地の地域産業

として次のようなことが掲載されている。

筑前：福岡市早良区の「御国焼と高取焼」に大鋸谷・麁原東皿山窯・西皿山窯
　　直方市の「芸能と文化」の項に高取焼の窯跡
　　小石原村の「小石原焼の生産」
　　須恵町の「皿山焼」
筑後：筑後市の「水田焼・坂東寺焼・赤坂焼」
　　星野村の「茶・金山・星野焼」
豊前：赤池町の「細川氏と上野焼」
　　大任町の「田香焼」

３．福岡県の埋蔵文化財と近世窯業遺跡の調査

a. 埋蔵文化財の把握

福岡県では、昭和 51 ～ 55 年度（1976 年 4 月～ 1981 年 3 月）に『福岡県遺跡等分布地図』16 冊を刊行した。それは北九州市・福岡市の両政令市を除く地域について、当時の福岡県教育庁の 16 か所の教育出張所の管轄範囲ごとに取りまとめたものであり、この時にリストアップされた遺跡数は、一部に天然記念物や社寺等を含む 17,169 か所であった。

遺跡の把握は埋蔵文化財の保護の基本であり、各地方自治体の根幹である市町村が主体となって、その後も鋭意遺跡の把握に努めており、当然のことながら遺跡数は増加傾向にある。これらの遺跡数は、その大半が中世までの遺跡であり、近世、近代の遺跡は少ないものの、最近は少しずつ増加している。

現時点で福岡県の近世、近代の窯業関係遺跡として遺跡地図に掲載されている箇所（周知の埋蔵文化財包蔵地）は下記のとおりである。

筑前

市町村名	窯跡名	包蔵地名及び番号
直方市	永満寺宅間窯跡	県番号 050117「高取焼窯跡（宅間窯）」 市番号 94「永満寺宅間窯跡」
直方市	内ヶ磯窯跡	県番号 050118「高取焼窯跡（内ヶ磯窯跡）」 市番号 55「内ヶ磯窯跡」
遠賀郡岡垣町	上畑窯跡	県番号 390163「上畑窯跡」 町番号 390163「上畑窯跡」
宮若市	千石窯跡	県番号 410348「千石窯跡」
宮若市	犬鳴窯跡	県番号 440255「犬鳴窯跡」
飯塚市	白旗山窯跡	県番号 070335「高取焼白旗窯跡」 市番号 414「白旗山窯跡」丘陵先端に３基
飯塚市	高取八山墓跡	市番号 431「高取八山墓跡」［消滅］
嘉麻市	山田窯跡	県番号 090013「古高取山田窯跡」 市番号 2078「古高取山田窯跡」 ※昭和 10（1935）年に一部、発掘。現在、ボタ山の下に埋没
嘉麻市	猪之鼻窯跡	市番号 2076「猪之鼻窯跡」
嘉麻市	大庭夫婦の墓	県番号 090014「大庭源太夫、夫婦の墓」

嘉麻市	黒田窯跡	市番号 2036
嘉麻市	野口窯跡	市番号 2169
糟屋郡須恵町	福岡藩磁器御用窯跡	町番号 290154
糟屋郡須恵町	役所畑新窯跡	町番号 290161
朝倉郡東峰村	皿山古窯跡	県番号 550015「皿山古窯跡」
朝倉郡東峰村	奥畑瓦古窯跡	県番号 550015「皿山古窯跡」　村番号 15「奥畑瓦古窯跡」
朝倉郡東峰村	一本杉古窯跡	1 号県番号 550061　村番号 44 2 号県番号 550062　村番号 45
朝倉郡東峰村	十文字古窯跡	県番号 550058　村番号 46
朝倉郡東峰村	金敷様裏古窯跡	1 号県番号 550058　村番号 54　2 号県番号 550059　村番号 55 3 号県番号 550060　村番号 56
朝倉郡東峰村	旧下組古窯跡	県番号 550055　村番号 59〔昭和 32 年頃まで操業した共同窯〕
朝倉郡東峰村	大明神古窯跡	県番号 550056 村番号 68〔19 世紀代と推定される窯〕
朝倉郡東峰村	池ノ谷古窯跡	村番号 72
朝倉郡東峰村	旧上組古窯跡	県番号 550057　村番号 73
朝倉郡東峰村	火口谷古窯跡	1 号県番号 550053　村番号 77 2 号県番号 550054　村番号 78
朝倉郡東峰村	中野上の原古窯跡	県番号 550052　村番号 80
朝倉郡東峰村	釜床古窯跡	1 号県番号 550050　村番号 95 2 号県番号 550051　村番号 96
朝倉郡東峰村	採土場跡	村番号 42 ※陶土を採掘時に出た石などを円墳状に盛ったもので 8 か所ほどある
朝倉郡東峰村	陶神	村番号 76 ※祭日は 10 月 10 日。自然石で高さ 133㎝、幅 60㎝、厚さ 46㎝。小石原工芸館跡地にあり
朝倉郡東峰村	火の神様	村番号 84〔石祠に祀られる〕
福岡市	今川高取窯跡	市番号 2146　解除

筑後

市町村名	窯跡名	包蔵地名及び番号
久留米市	朝妻焼窯跡	県番号 030253「朝妻焼窯跡」
うきは市	一ノ瀬焼窯跡	県番号 620024「一ノ瀬焼古窯跡」　市番号 076 「隈上・朝田原遺跡群」の中に「一ノ瀬窯跡」あり
八女市	男ノ子焼窯跡	県番号 720146「男ノ子焼窯跡」
柳川市	蒲池焼窯跡	県番号 080082「蒲池焼窯跡」
みやま市	姥ヶ懐窯跡	県番号 800001「姥ヶ懐窯跡」　市番号 0172「姥ヶ懐窯跡」 ※窯は現存せず
みやま市	二川焼窯跡	県番号 800005 ～ 800008「二川焼窯跡」 市番号 0148 ①～④「二川焼窯跡」〔①②は消滅、③④は現存〕
大牟田市	黒崎焼窯跡	市番号 452「黒崎窯跡」

豊前

市町村名	窯跡名	包蔵地名及び番号
田川郡福智町	上野皿山窯跡	県番号 890014「上野皿山窯跡」
田川郡福智町	釜ノ口窯跡	県番号 890015「釜の口窯跡」
田川郡福智町	岩屋高麗窯跡	県番号 840002「岩屋高麗窯跡」
田川郡香春町	田香焼窯跡	町番号 225「田香焼窯跡」
京都郡みやこ町	乙子焼窯跡	町番号 910226「乙子焼窯跡」
京都郡みやこ町	錦原皿山窯跡	県番号追加 920140「石走り南遺跡」 町番号 920112「石走り南遺跡」 ※帝釈天山麓に所在。近世の操業免許の記録あり。遺物出土
北九州市	菜園場窯跡 〔愛宕遺跡〕	市番号 2023「愛宕遺跡」

b. 埋蔵文化財としての近世窯跡の調査

近世の窯跡等の遺跡として、これまでに埋蔵文化財としての調査対象となった事例は下記のとおりである。なお、明治・大正・昭和 20 年までの戦前期のみならず、文化財保護法が施行された昭和 25 年以降においても資料採集などの目的で個人的に調査された事例や発掘は無数にあったと思われるが、それらに関しては十分な把握はできていない。

筑前

窯跡名	所在地	調査期間	調査主体
内ヶ磯窯跡	直方市	〈第 1 次〉1979 年 9 月 17 日～ 12 月 6 日 〈第 2 次〉1980 年 9 月 10 日～ 11 月 20 日 〈第 3 次〉1981 年 5 月 19 日～ 6 月 23 日 〈第 4 次〉1995 年 8 月 24 日～ 10 月 30 日 〈第 5 次〉1997 年 2 月～ 3 月 31 日 〈第 6 次〉1997 年 5 月 6 日～ 10 月 18 日 〈第 7 次〉1998 年 5 月 12 日～ 1999 年 3 月 19 日 〈第 8 次〉1999 年 6 月 18 日～ 2000 年 3 月 13 日	直方市教育委員会 福岡県教育委員会
永満寺宅間窯跡	直方市	1982 年 11 月 15 日～ 12 月 11 日	直方市教育委員会
犬鳴窯跡	宮若市	〔1 号窯〕〈第 1 次〉1986 年 9 月 30 日～ 11 月 15 日 〈第 2 次〉1987 年 4 月 14 日～ 5 月 19 日 〔2 号窯〕1987 年 5 月～ 7 月	福岡県教育委員会
中野上の原窯跡	朝倉郡東峰村	〈第 1 次〉1987 年 6 月 15 日～ 7 月 18 日 〈第 2 次〉1989 年 9 月 22 日～ 12 月 12 日	小石原村教育委員会
白旗山窯跡	飯塚市	〔1 号窯〕1987 年 8 月 1 日～ 9 月 2 日 1990 年 1 月 10 日～ 3 月 22 日 〔2 号窯〕1988 年 8 月 1 日～ 9 月 9 日 1990 年 1 月 10 日～ 3 月 22 日 〔3 号窯〕1988 年 8 月 1 日～ 9 月 9 日	飯塚市教育委員会
火口谷窯跡	朝倉郡東峰村	〔1 号窯〕〈試掘〉1988 年 9 月 5 日～ 10 月 1 日 〈第 1 次〉1993 年 8 月 2 日～ 12 月 21 日 〔2 号窯〕1995 年 9 月 20 日～ 11 月 30 日	小石原村教育委員会
能古焼窯跡	福岡市西区	1988 年 10 月 24 日～ 12 月 2 日	九州大学

釜床１号窯跡	朝倉郡東峰村	〈試掘〉1990 年 12 月 14 日～ 1991 年 2 月 2 日 〈第 1 次〉1991 年 9 月 1 日～ 10 月 14 日	小石原村教育委員会
金敷様裏３号窯跡	朝倉郡東峰村	1992 年 10 月 20 日～ 11 月 27 日	小石原村教育委員会
一本杉窯跡	朝倉郡東峰村	［1 号窯］1992 年 10 月 20 日～ 11 月 27 日 ［2 号窯］1994 年 9 月 6 日～ 12 月 19 日	小石原村教育委員会
上畑窯跡	遠賀郡岡垣町	1994 年 1 月 8 日～ 2 月 5 日	岡垣町教育委員会
千石窯跡	宮若市	1994 年 11 月 24 日～ 12 月 28 日	宮田町教育委員会
西皿山窯跡	福岡市早良区	2005 年 2 月 17 日～ 2005 年 5 月 17 日	福岡市教育委員会
須恵焼窯 ［福岡藩磁器御用窯跡］	糟屋郡須恵町	〈第 1 次〉2006 年 12 月 1 日～ 2007 年 3 月 30 日 〈第 2 次〉2007 年 12 月 4 日～ 2008 年 3 月 31 日 〈第 3 次〉2008 年 4 月 22 日～ 2009 年 3 月 31 日 〈第 4 次〉2009 年 7 月 1 日～ 2010 年 3 月 31 日	須恵町教育委員会

筑後

窯跡名	所在地	調査期間	調査主体
朝妻焼窯跡	久留米市	〈第 1 次〉1992 年 1 月下旬～ 3 月 〈第 2 次〉2015 年 2 月 12 日～ 3 月 31 日	久留米市教育委員会
東野亭焼窯	久留米市	1998 年 10 月 14 日～ 12 月 28 日	久留米市教育委員会

豊前

窯跡名	所在地	調査期間	調査主体
釜ノ口窯跡	田川郡福智町	1955 年 5 月 6 日～ 5 月 15 日	日本陶磁協会
菜園場窯跡	北九州市小倉北区	1982 年 12 月 9 日～ 1983 年 9 月 30 日	北九州市教育文化事業団

４．近世窯業遺跡の史跡指定等

a. 福岡県内の事例

福岡県においてこれまでに、近世の窯跡等の遺跡として史跡等に指定されている事例は次のとおりである。

（福岡県）市町村指定史跡

窯跡名	所在地	指定日
唐原焼窯跡	築上郡上毛町	昭和 49 年（1974）11 月 25 日
田香焼窯跡	田川郡大任町	昭和 51 年（1976）10 月 1 日
永満寺宅間窯跡	直方市	昭和 63 年（1988）3 月 15 日
能古焼古窯跡	福岡市	平成 2 年（1990）3 月 29 日

福岡県指定史跡

窯　跡　名	所在地	指定日
福岡藩磁器御用窯跡	糟屋郡須恵町	昭和 55 年（1980）3 月 1 日
小石原窯跡群 釜床１号窯跡 一本杉２号窯跡	朝倉郡東峰村	平成 8 年（1996）5 月 31 日

福岡県指定有形文化財（考古資料）

窯跡名	所在地	指定日
菜園場窯跡 附 出土遺物	北九州市	昭和 62 年（1987）5 月 9 日

b. 全国の事例

文化庁国指定文化財等データベースに拠ると、安土桃山時代末期から江戸時代に及ぶ窯跡等の国指定史跡の事例は次のとおりである。

窯跡名	所在地	指定日
肥前陶器窯跡	佐賀県唐津市・武雄市・多久市	昭和 15 年（1940）2 月 10 日 / 追加 平成 17 年（2005）7 月 14 日
備前陶器窯跡 伊部南大窯跡 伊部西大窯跡 伊部北大窯跡 医王山窯跡	岡山県備前市	昭和 34 年（1959）5 月 13 日 / 追加 平成 21 年（2009）2 月 12 日
元屋敷陶器窯跡	岐阜県土岐市	昭和 42 年（1967）12 月 11 日
瀬戸窯跡 小長曽陶器窯跡 瓶子陶器窯跡	愛知県瀬戸市	昭和 46 年（1971）7 月 13 日 / 追加 平成 27 年（2015）10 月 7 日
九谷磁器窯跡	石川県加賀市	昭和 54 年（1979）10 月 23 日 / 追加 平成 17 年（2005）3 月 2 日 / 追加 平成 18 年（2006）7 月 28 日
肥前磁器窯跡 天狗谷窯跡 山辺田窯跡 原明窯跡 百間窯跡 泉山磁石場跡 不動山窯跡	佐賀県西松浦郡有田町 武雄市・嬉野市	昭和 55 年（1980）3 月 24 日 / 追加 昭和 56 年（1981）2 月 25 日
柿右衛門窯跡	佐賀県西松浦郡有田町	平成元年（1989）9 月 22 日
肥前波佐見陶磁器窯跡	長崎県東彼杵郡波佐見町	平成 12 年（2000）9 月 6 日
大川内鍋島窯跡	佐賀県伊万里市	平成 15 年（2003）9 月 16 日

５．皿山の地名

福岡県においては焼物が作られていた所を皿山と称する事例が多数存在する。

皿山の地名については、「『皿山』という言い方は肥前有田系統の窯で使われる」（須恵町 2003・大橋 2010）とされている。福岡県内（筑前・筑後・豊前）の皿山地名が全て肥前の影響下に生じたものか否かは俄かに判断できないが、窯や焼物がある所の多くが、下記に示すように皿山と称されていたことは間違いないといえる。

江戸期の事例として、明和４年（1767）11 月の『近国焼物大概帳』には「筑前領焼物山三ヶ所」として、須恵皿山・西町皿山・山口皿山が示されているという（須恵町 2003）。

また、寛政８年（1796）９月の『近国焼物山大概書上帳』（肥後天草の庄屋・上田家に伝わる文書）で、「柳川領皿山之分」として黒崎皿山・星野皿山、「筑前領皿山之分」として須恵皿山・西町皿山、「豊前領皿山之分」として天野皿山・藤原皿山・添田皿山・今藤皿山・漆尾皿山・清水皿山・小石原皿山が挙げられている。なお、豊前の天野は上野、藤原は道（堂）原［どうばる］、今藤の今任とともに田香焼、漆尾は漆生で、上黒田の漆生を指すか。漆生と小石原は筑前だが、豊前の項に記されている。

【福岡県の皿山地名】

現時点で以下の場所が把握される。

所在地	窯名
福岡市南区皿山１～４丁目	野間焼窯
福岡市早良区西新５丁目	東皿山窯
福岡市早良区高取１～２丁目　西皿山	西皿山窯
糟屋郡須恵町上須恵　皿山	須恵焼窯
朝倉郡東峰村大字小石原字中野　皿山	小石原焼
宮若市大字宮田　千石皿山（宮田町 1995）	千石窯
宮若市山口　皿山（若宮町誌 2005）	浅ヶ谷窯
宮若市犬鳴　皿山（若宮町誌 2005）	犬鳴窯
飯塚市野間の高宮西側の小谷の通称（中山 1915.6）	白旗山窯
久留米市合川町隈山　皿山（水原 1992）	朝妻焼窯
久留米市城南町十三部　皿山	柳原焼窯？
八女郡広川町大字広川　皿山　（佐々木 2006）	川瀬焼窯
八女市萩尾字池ノ窪　皿山　（佐々木 2006）	釈形焼窯？
八女市黒木町鹿子生谷　皿山　（浅野 1935）	鹿子生焼窯
大牟田市岬　黒崎皿山	黒崎焼窯
北九州市小倉北区皿山町	小倉清水焼窯？
北九州市小倉北区木町皿山	高保窯

田川郡福智町上野　皿山	上野焼
田川郡大任町今任原　皿山	今任田香焼窯
田川郡香春町高野　→　昔、皿山と言っていた	高野田香焼窯
築上郡上毛町上唐原　皿山	唐原焼窯
嘉麻市上黒田　漆生皿山	黒田窯
嘉麻市上山田　皿山	猪之鼻窯跡
田川郡添田町　添田皿山	不明
京都郡みやこ町豊津　錦原皿山	錦原皿山窯

※その他に、「甕焼山」「巣焼平」などの地名がある。

「甕焼山」は釈形焼窯跡の原料の白土を採集した山を指す。また、「甕焼殿」の墓などもある。

「巣焼平」については、八女市星野村の地名にあり、「巣焼」は「素焼」の転化した地名である。

男ノ子焼窯跡の推定地では「窯所」、周辺には「甕（瓶）焼・亀（窯）床・白岩・砥石場・崩竈（くえがま）・二竈（ふたかま）」などの小字名がある。

Ⅲ　福岡県近世窯業関係遺跡調査

１．第一次調査（悉皆調査）

まず事務局において、県内の近世窯業遺跡に関する基礎的な情報を集めるために、p8 に先に記した文献以外にも巻末に掲載した参考文献より調査表を作成した。

調査表１は名称、読み、市町村名、所在地、現況（調査表記載時の現在の状況を記載する。例：現地保存、荒地・宅地・畑地など）、旧藩名（福岡藩・秋月藩・久留米藩・柳河藩・三池藩・小倉藩・豊津藩・中津藩など）、経営（藩によるものを藩窯、それ以外を民窯）、調査歴（発掘調査などが行われた年月日）、焼物名、製品（窯跡の出土遺物や表採遺物の器種名）、窯の状況（調査時や表面観察による窯本体の状況）、規模・傾斜角度（窯の計測値）、推定年代（出土遺物等による窯のおおよその操業年代）、備考（窯の特色や史料等による時代背景、窯に関する事柄等を記載する）、参考文献の 15 項目に設定した。地域は筑前、筑後、豊前の旧国に大別し、対象時代は江戸時代～明治４年（1871）の廃藩置県までを基本とするが、広く情報を集めるために昭和 20 年頃まで広げた。そのため、近世窯跡の表の後に、参考として明治時代～昭和時代にかけての窯業関係情報を記載している。

調査表２では、近世窯業遺跡に関わるもので、遺構などが現存又は地域の伝承により、現在もその場所が特定できるものを対象とした。以下、５つの種別について情報を収集した。

1　陶土の採取地・磁石場など原料の採集地や集積地
2　陶磁生産に関わる作業場所や砕石場・水碓小屋など、陶磁生産に関わる施設等
3　問屋跡・代官所・番所などの陶磁生産・販売・製陶管理などに係る施設
4　古陶磁生産に関連する神社・記念碑・墓地（墓碑）など
5　その他、上記以外の陶磁生産に関連する遺構・施設など

さらに表には、名称、読み、所在地、現況、種別、推定年代、備考の７項目に分け、ここでも調査表１と同様に旧国の３地域ごとに掲載した。

作成した調査表１と２は、県内 60 市町村に令和２年９月 24 日付「近世窯業関係遺跡に係る既存情報の整理について」で照会し、令和２年 11 月 30 日付を締切として各物件の情報の確認を依頼した。照会で得られた情報を反映させ、令和３年１月 19 日開催の第１回福岡県近世窯業関係遺跡調査指導委員会では「福岡県近世窯業関係遺跡調査表１(窯跡)、調査表２（関係遺構)」として、窯跡 103 件、関連遺跡 25 件を掲示した。

その後、報告書刊行に向けて最後の内容確認及び追補訂正について、令和５年９月 13 日付で各市町村へ再度照会を行い、各物件の情報の確認をお願いした。それらの情報を事務局で再整理し、窯跡 106 件、関係遺跡で 56 件を把握した。

２．第二次調査（重点調査）

第二次調査（重点調査）にあたり、(1) 福岡という地域の特質を示す遺跡、(2) 遺構の残りが極めて良く保存して価値を伝えるのに適した遺跡という二つの基準の下、調査指導委員会に諮り、対象とすべき窯跡 25 件を設定した。設定する上で、基本的に調査報告書が刊行されたものや所在不明なものについては除外した。調査では遺跡の位置の特定と現状の把握を行い、写真撮影等の記録作成を行った。

福岡県を代表する焼き物の窯跡として、高取焼の釜床１号窯跡、上野焼の釜ノ口窯跡、皿山本窯跡、岩屋高麗窯跡を調査した。

次に旧三国での地方窯として、筑前では小石原焼関連で一本杉窯跡、大明神窯跡、池の谷窯跡、金敷様裏窯跡、十文字窯跡、野間焼関連で福岡市南区にある野間焼窯跡、焼物名は不明であるが嘉麻市にある黒田窯跡を調査した。

筑後では釈形焼窯跡、鹿子生焼窯跡、池の本焼窯跡、文献史料に詳細に記述のあった筑後市の赤坂焼窯跡、みやま市の二川焼窯跡、焼物名は不明であるが朝倉市にある浄満寺窯跡、野鳥窯跡も対象とした。なお、重点調査時に新たな情報を得た八女市本星野焼窯跡、星野十籠焼窯跡も追加調査した。

豊前では、調査報告書に遺物のみ掲載されたみやこ町乙子焼窯跡と上毛町の唐原焼窯跡、香春町教育委員会から情報のあった香春町田香焼窯跡を対象とした。

また、調査指導委員会において陶器・磁器窯跡以外の窯跡を調査対象とする必要があるとの指摘を受け、筑前で東峰村奥畑瓦窯跡、豊前でみやこ町の錦原皿山窯跡の瓦窯跡も追加した。

なお、報告書作成途中で嘉麻市野口窯跡、大牟田市黒崎焼窯跡、八女市男ノ子焼窯跡についての新しい情報を得たので、追加調査として令和５年度に調査を行った。最終的には 28 件を調査した。

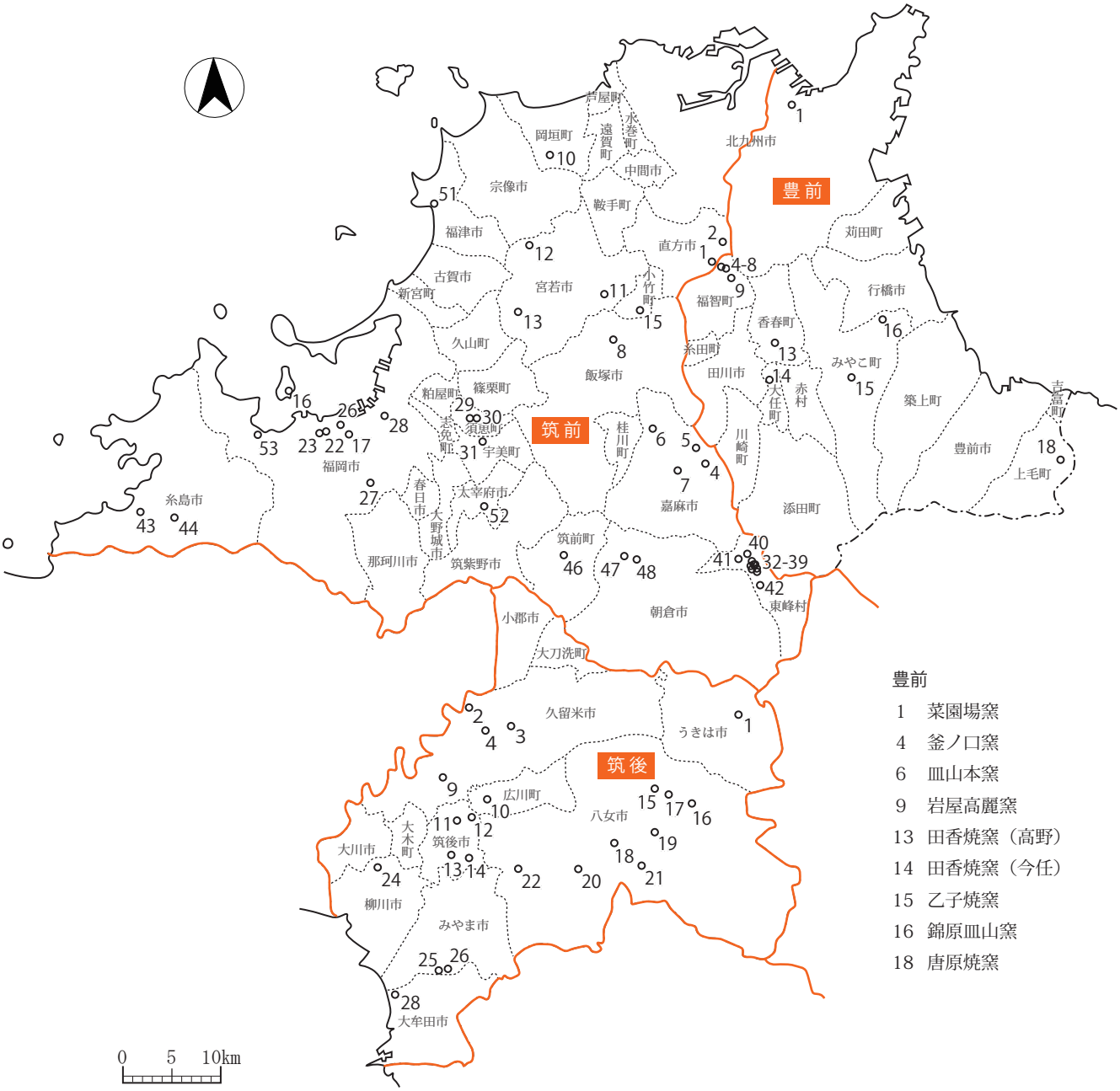
3.　各遺跡の詳細

第二次調査（重点調査）の対象とした窯跡については、調査表と別に p48 以降に掲載した。各窯跡については所在地、経営（藩又は民間）、焼物名、年代、現況、備考を列記し、当該窯跡の概要を記載した。また、位置図（国土地理院発行１/25,000 地形図）、現況の写真、窯跡実測図、今回調査時に採集した遺物又は市町村所蔵の未報告資料の実測図（１/ ３又は１/ ４）を掲載した。実測図中の「陶」は陶器、「磁」は磁器であることを指す。それ以外のものは窯道具である。各窯跡の名称の横に付した番号は調査表１の番号に一致する。

なお、第二次調査（重点調査）の対象以外にも、発掘調査による調査報告書が刊行されている窯跡について、数頁程に要約し掲載した。

第2回近世窯業関係遺跡調査指導委員会

第3回近世窯業関係遺跡調査指導委員会



豊前

1 菜園場窯
4 釜ノ口窯
6 皿山本窯
9 岩屋高麗窯
13 田香焼窯（高野）
14 田香焼窯（今任）
15 乙子焼窯
16 錦原皿山窯
18 唐原焼窯

筑前

1 永満寺宅間窯
2 内ヶ磯窯
4 山田窯
5 猪之鼻窯
6 黒田窯
7 野口窯
8 白旗山窯
10 上畑窯
11 千石窯
12 浅ヶ谷窯
13 犬鳴窯
15 勝野峰畑窯
16 能古焼窯
17 大鋸谷窯
22 東皿山窯
23 西皿山窯
26 今川高取窯
29 須恵焼窯
30 役所畑新窯
31 宇美障子岳窯
32 中野上の原窯
33 火口谷窯
34 大明神窯
35 旧下組窯
36 旧上組窯
37 池の谷窯
38 金敷様裏窯
39 一本杉窯
40 十文字窯
41 奥畑瓦窯
42 釜床窯
43 鎌研窯
44 雷山窯
46 三並ヒエデ窯
47 浄満寺窯
48 野鳥窯
51 津屋崎人形

筑後

1 一の瀬窯
2 柳原焼窯
3 朝妻焼窯
4 東野亭焼窯
9 田川焼窯
10 川瀬焼窯
11 坂東寺焼窯
12 赤坂焼窯
13 水田焼窯
14 野町焼窯
15 本星野焼窯
16 星野十籠焼窯
17 田の原焼窯
18 今村焼窯
19 釈形焼窯
20 鹿子生焼窯
21 池の本焼窯
22 男ノ子焼窯
24 蒲池焼窯
25 二川焼窯
26 バカツクラ窯
27 黒崎焼窯

福岡県の近世窯業遺跡分布図

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

筑前

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
1	永満寺宅間窯跡	えいまんじたくま	直方市	直方市大字永満寺	山林 現地保存	福岡	藩窯？	調査済み 1914　中山平次郎 直方市教育委員会 1982.11.15 ～ 12.11 1988.3.15　市史跡指定	高取焼
2	内ヶ磯窯跡	うちがそ	直方市	直方市大字頓野	水中保存	福岡	藩窯	調査済み 1914　中山平次郎 直方市教育委員会 〈第1次〉1979. 9.17 ～ 12. 6 〈第2次〉1980. 9.10 ～ 11.20 〈第3次〉1981. 5.19 ～ 6.23 福岡県教育委員会 〈第4次〉1995. 8.24 ～ 10.30 〈第5次〉1997. 2.？ ～ 3.31 〈第6次〉1997. 5. 6 ～ 10.18 〈第7次〉1998. 5.12 ～ 1999. 3.19 〈第8次〉1999. 6.18 ～ 2000. 3.13	高取焼
3	山部窯	やまべ	直方市	直方市山部 多賀神社の西方	未特定	福岡		未調査	
4	山田窯跡	やまだ	嘉麻市	嘉麻市上山田	山林 ボタ山	福岡	民窯	採集 1935　栃内禮次	高取焼
5	猪之鼻窯跡	いのはな	嘉麻市	嘉麻市上山田	山林	福岡	民窯	調査済み 1967　山田市教育委員会 1968.4.3 1980　再調査	高取焼 （上野系？）
6	黒田窯跡	くろた	嘉麻市	嘉麻市上黒田（漆生）	竹林	福岡	民窯	未調査	黒田焼
7	野口窯跡	のぐち	嘉麻市	嘉麻市大隈町	山林	福岡	民窯	未調査	上野系？
8	白旗山窯跡	しらはたやま	飯塚市	飯塚市中字野間	山林	福岡	藩窯	調査済み 1914　中山平次郎 飯塚市教育委員会 〔1号窯〕 1987. 8. 1 ～ 9. 2 〔2号窯〕 1988. 8. 1 ～ 9. 9 〔3号窯〕1990. 1. 10 ～ 3.22	高取焼 （遠州高取）
9	相田窯跡	あいだ	飯塚市	飯塚市相田	未特定	福岡		未調査	高取焼
10	上畑窯跡	じょうばた	岡垣町	遠賀郡岡垣町大字上畑字唐人山	果樹園	福岡		一部、調査 1936以前　栃内禮次 1994.1.8～2.5　岡垣町教育委員会	高取焼
11	千石窯跡	せんごく	宮若市	宮若市宮田字唐人町（千石皿山）	消滅	福岡		調査済み 宮若市教育委員会 1994.11.24 ～ 12.28	高取焼
12	浅ヶ谷［朝谷］窯跡	あさがたに	宮若市	宮若市山口字浅ヶ谷	山林 削平	福岡	民窯	採集	
13	犬鳴窯跡	いぬなき	宮若市	宮若市大字犬鳴字皿山	水没	福岡		調査済み 1914　中山平次郎 福岡県教育委員会 〔1号窯〕 〈第1次〉1986. 9.30 ～ 11.15 〈第2次〉1987. 4.14 ～ 5.19 〔2号窯〕1987. 5.　～ 7.	高取焼
14	上野窯		宮若市	宮若市宮田	未特定	福岡		未調査	
15	勝野峰畑窯跡	かつのみねはた	小竹町	小竹町大字勝野	消滅？	福岡		未調査	

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
陶器 皿・鉢・甕・擂鉢・片口・壺・茶碗・水指・瓶・窯道具(トチン・ハマ)	割竹式登窯 焼成室6・焚口	全長16.6m 幅3.45～3.6m 11度	慶長5年(1600)～寛永元年(1624)？ ※慶長11～19年(1606～1614)(副島1997)	黒田長政が文禄・慶長の役の際に、朝鮮半島から渡来した陶工八山らが焼く。階段状連房式登窯より前段階の窯で、李朝初期の特徴を持つ。 考古地磁気年代法では1595±15年代の結果が出ている。 直方市教育委員会にて遺物を保管 陶土産地:現地周辺及び朝鮮半島(高取歴代記録)	高取歴代記録 福岡県史 尾崎直人1987西日本文化 233 直方市第5集 副島邦弘1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集近世窯業遺跡データ集成
陶器 茶碗・茶入・水指・蓋・瓶・建水・皿・鉢・擂鉢・壺・片口・甕・碗・徳利・陶人形・漁具・筆立・水滴・香炉・花生・陶人形・手捏製品・窯道具(シッタ・焼台・トチン)	階段状連房式登窯 焼成室14・焚口・物原 上屋柱穴 工房跡 祭祀遺構	残存長46.5m 幅2.18～3.23m 19度	慶長19年(1614)～寛永元年(1624) (高取歴代記録)	黒田長政が文禄・慶長の役の際に、朝鮮半島から渡来した陶工八山らが焼く。山田窯に移るまでの間焼くか。 考古地磁気年代法では1590±30～1700±50年代の結果が出ており、少なくとも1600年頃から50年ほど使用か。 直方市教育委員会・九州歴史資料館 にて遺物を保管 陶土産地:直方市大字感田(推定)(※高取歴代記録、直方市上巻)　灰釉・藁釉:直方市大字上頓野柞ノ木(推定)(直方市上巻)	高取歴代記録 福岡県史 尾崎1987西日本文化 233 直方市第4集 福岡県第163集 福岡県第170集 福岡県第181集
			内ヶ磯窯以後か	鞍手郡に1年間、山部窯(直方市多賀神社の西方)に開窯との口碑の記載あり。	奥村次八郎1936福岡NO.62
茶碗・皿・鉢・徳利・壺・甕・瓶・片口 〔※小山冨士夫が1939年11月に高崎正戸宅で実見する〕	階段状連房式登窯 埋没し不明	全長約22.7m 幅約2.7m 約15度 『横幅は壁の外側にて九尺余、縦七十五尺ありて、大約十五度位の緩傾斜をなす。』栃内1936	寛永元年(1624)～寛永7年(1630)(高取歴代記録)	高取八山ら親子は2代藩主黒田忠之の怒りにふれ、寛永元年(1624)に山田村へ蟄居し、開窯。窯跡は戦時中の炭鉱のボタ山になり、埋没。昭和42年(1967)に山田市教育委員会が調査した。大庭源太夫の墓所出土茶碗2点が現存し、平成5年(1993)1.19に(旧)山田市文化財第1号として指定された。	栃内禮次1936古高取山田窯 高取歴代記録 福岡県史 山田町誌 山田市誌
蠟皿・茶碗・鉢・擂鉢・灯明皿・トチン等	側壁・底部が残存していた。(旧山田市教委の調査カードによる)		元文年間(1736～1741)～	高取八山の弟子が作陶した伝承。『筑前国続風土記拾遺』に「猪之鼻に陶工二戸ありて、元文の頃より陶器を製せしも近年絶えたり」との記載あり。 1967年調査では、窯の位置、規模等が判明し、多数の遺物が出土した。	嘉穂郡志 山田町誌 山田市誌 福岡県第195集 嘉麻市第4集
花立・花瓶・擂鉢癒着した擂鉢片、トチン、トンバイ・焼土片等	窯1基　焼成室5・6 陶器片、癒着した擂鉢片、トチン、トンバイ等が幅10m程に高密度で散乱		江戸時代末期～明治20年(1887)頃？	漆尾(うるしお)皿山の記載あり。 『筑前国続風土記拾遺』嘉麻郡 下 漆生の項に「田中に陶工二戸有。其製猪鼻焼に類す。豊前國上野の流なり。」の記載あり。	大橋康二2010東洋陶磁 第39号 稲築町誌1959.1973 筑前国続風土記拾遺 中巻
茶碗・鉢・タコハマ等				平成20～23年度(2008～2011)の分布調査で窯道具・製品の散布を確認し採集した。	現時点で記載なし
陶器・一部磁器か 茶碗・茶入・水指・瓶・皿・鉢・甕・壺・擂鉢・花生・香炉・窯道具・(匣鉢・トチン・焼台)	窯3基 階段状連房式登窯 〔1号窯〕焼成室7 〔2号窯〕焼成室1・焚口 〔3号窯〕焚口	〔1号窯〕 残存長17.4m(推定長25m前後)、 幅2.05～2.3m 19度	寛永7年(1630)～17世紀後半頃	2代藩主黒田忠之の許しを得、白旗山に窯を開く。「遠州高取」の名で知られる。撃鼓(げつこ)神社の境内脇の用水池を挟んだ対岸にあり。高取八山(八蔵重貞)は承応3(1654)年にここで死去。 2・3号窯は一部のみ調査。2号窯焼成室で3号窯焚口を検出する。考古地磁気年代法では〔1号窯〕1630±20、〔2号窯〕1660±30、〔3号窯〕1660±50年代の結果が出ている。窯跡の切り合い関係や構造の特徴、出土遺物の比較から2号窯→3号窯→1号窯への変遷が推定されている。(飯塚市史中巻2016) 飯塚市教育委員会にて遺物を保管	高取歴代記録 福岡県史 尾崎1987西日本文化 233 飯塚市第16集 幸袋町誌 原色陶器大辞典 飯塚市史 中巻2016 栃内1936古高取山田窯 福岡の陶磁
擂鉢・窯道具(トチン)(二瀬町誌)			時期不明　17世紀後半？	二瀬町誌に窯についての記載があるが、詳細不明である。	二瀬町誌
茶碗・皿・鉢・小壺・窯道具(トチン・ハマ) [製品(採集品)は宗像大社・宗像高校にも収蔵される] 〔※小山冨士夫が昭和14年(1939)11月に高崎正戸宅で実見する〕	焼成室1を調査	6度	江戸前期頃か。 ※17世紀初頭か	近くに唐人墓あり。 上畑唐人窯跡として周知化。(岡垣町第16集) 岡垣町調査以前に発掘したことを記載する。調査内容については記述なし。(栃内1936) 製品は永満寺窯に近く、高取焼の中でも古い窯に位置する。(福岡の陶磁)	岡垣町史 図録岡垣町の文化財 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 岡垣町第16集 栃内1936古高取山田窯 九州陶磁文化館1992福岡の陶磁
陶器 皿・碗・擂鉢・瓶・窯道具(トチン・ハマ 〔※小山冨士夫が1939年11月に高崎正戸宅で実見する〕	階段状連房式登窯？ 焼成室1のみ検出	残存長2.8m	寛永元年(1624)以降 ※17世紀初頭か	焼成室の構造が内ヶ磯に近い。 考古地磁気年代法では1640±20年代の結果が出る。 宮若市教育委員会にて遺物を保管	宮田町第5集
磁器 表採資料　徳利・花生・小皿・茶碗・窯道具(トチン)			明和4年(1767)～	『年代記』明和4年(1767)の条にあり。百姓惣兵衛との関連は不明。藩の御用窯になる前に成立か。公民館建設時の整地により窯跡破壊か。	若宮町誌上巻 福岡県第94集 副島邦弘1999九州歴史資料館研究論集24
陶器 〔1号窯〕茶碗・徳利・鉢・擂鉢・壺・甕・瓶・陶板・置台・窯道具(トチン・ハマ・トンバイ) 〔2号窯〕茶碗・皿・擂鉢・片口・瓶・甕・火入・水指・香炉・花生・置台・窯道具(トンバイ・ハマ・トチン)	窯2基 〔1号窯〕 割竹式登窯 焼成室8残存 〔2号窯〕不明	〔1号窯〕 残存長18.5m(推定長25m前後か) 幅2.4～2.95m 12度 〔2号窯〕不明	寛文(1661)～貞享4年(1687)か (1660年代後半～1680年代)	犬鳴皿山に住む新四郎が始める。廃絶時期は福岡藩の命令による。 考古地磁気年代法では1650±20年代の結果が出る。	福岡県第94集
				黒田(筑前鞍手郡宮田)上野窯と記載する。市が副島氏に確認し、窯の存在はないか。	井上圓蔵1943豊前上野焼研究
陶器？ 壺・窯道具(陶枕)・甕	灰原2か所		江戸時代後期	江戸後期の近世陶器を焼いた雑器窯で、土物を中心に焼く。	小竹町史

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
16	能古焼窯跡	のこ	福岡市	福岡市西区能古字寺坂	現地保存	福岡	民窯	調査済み 1914　中山平次郎 福岡市教育委員会 1988.10.24 ～ 12. 2 1990.3.29 市史跡指定	能古焼 （姪の浜焼）
17	大鋸谷窯跡	おがんたん おおがんたに おおがたに おがのたに おおのこだに おおのこぎりだに	福岡市	福岡市中央区輝国1丁目	宅地	福岡	藩窯	採集 昭和の初め　中山平次郎	高取焼 （友泉亭高取又は絵高取）
18	友泉亭窯跡	ゆうせんてい	福岡市	福岡市中央区友泉亭付近		福岡	藩窯	未調査	高取焼？
19	荒戸山窯	あらどやま	福岡市	福岡市中央区荒戸新町(湊町)・荒戸上ノ山		福岡	藩窯	未調査	高取焼 （奥村1979では荒戸高取）
20	東松山窯	ひがしまつやま？	福岡市	福岡市城南区東松山？田島光松？	宅地	福岡	藩窯	未調査	高取焼 （田島高取）
21	田嶋窯	たじま	福岡市	福岡市早良区田島	宅地	福岡		未調査	高取焼
22	東皿山窯跡(麁原窯)	ひがしさらやま （そはら）	福岡市	福岡市早良区西新5丁目	宅地	福岡	藩窯	採集	高取焼 （東山高取）
	東山窯	ひがしやま				福岡		未調査	
23	西皿山窯跡（西新窯跡）	にしさらやま	福岡市	福岡市早良区高取2丁目	宅地	福岡	藩窯→民窯	一部、調査 福岡市教育委員会 2005. 2.17 ～ 2005. 5.17	高取焼 （西山高取）
24	不明	ふめい	福岡市	福岡市早良区西新町藤崎	宅地	福岡	民窯	未調査	高取焼 （森長（永）高取又は藤崎高取）
	不明	ふめい	福岡市	福岡市早良区西新町字皿山	宅地	福岡	民窯	未調査	高取焼
	英一窯	えいいち？	福岡市		宅地	福岡	民窯	未調査	
25	鳥飼茶屋窯(茶屋の山窯)	とりかいちゃや	福岡市	福岡市城南区鳥飼茶屋	宅地	福岡	民窯	未調査	高取焼 （森長（永）高取又は藤崎高取）

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
陶器・磁器 碗・皿・蓋・窯道具(トチン・ハマ) 茶碗・香炉・花瓶・向付・皿 壺・徳利(原色陶器大辞典)	階段状連房式登窯 焼成室7・焚口 窯尻には馬蹄形の溝	全長22m	明和～天明年間(1764～1787) ※大橋2010では1770～90年代	市指定史跡で、永福寺の裏山、能古博物館敷地内にて現地保存する。筑前国続風土記附録によれば「明和の比より比島にて陶器を製す」という記事あり。姪の浜港より出荷されたので「姪の浜焼」とも呼ばれたことがある。 陶土:能古島　釉薬:天草	筑前国続風土記附録 福岡市第354集 大橋2010東洋陶磁第39号 九州陶磁文化館1992福岡の陶磁 原色陶器大辞典 菅波正人2016新修福岡市史史料編考古1
陶器 ほとんど茶入れ若干の茶碗 (尾崎2013)			貞享年間(1684～1688)～元禄17年(1704) ※奥村武説では貞享2年か。 ※奥村次八郎説では貞享3年か。 ※陶磁用語辞典は貞享3年	貞享年間(1684～1688)又は元禄年間(1688～1704)に御陶所を移す。 『友泉亭御庭焼』とも呼ばれる。(福岡市第916集)	奥村1936福岡NO.62 奥村武1979大塚薬報No.322 高取歴代記録 福岡市第916集 陶磁用語辞典 尾崎2013筑前高取焼の研究
				有泉亭とも表記あり。	
			宝永5年(1708)～享保元年(1716)	試し焼程度か。 宝永元年(1704)に福岡城下の侍屋敷に窯を開く。(奥村1979) 高取焼の窯で宝永5年(1708)、福岡市荒戸新町(湊町)に開窯した記録があり、享保元年に止む。窯止、作品は不明。(陶磁用語辞典)	奥村1979大塚薬報　No.322 陶磁用語辞典
			寛永7年(1630)？ 宝永(1704～1711)の数年間？	「頃年(寛永7年)福岡城の南田島村の東の松山にて製す」との記載あり。 宝永年間工人福岡城南の田島村の東松山に於いて、新たに窯を開き陶器を製す。鼓村、東松山の二処の工人今に至って業を伝う。(黒瀬1974) 九州陶磁では荒戸や田島光松等にも開窯との記載あり。(筑紫1938)	筑前国続風土記 副島2014福岡地方史研究 52 黒瀬真頼1974東洋文庫 254　増訂工芸志料 筑紫頼定1938九州陶磁
			享保6年(1721)の前後	朝倉市指定有形文化財(工芸品)の「陶製狛犬」(S49.1.10指定)に刻まれた銘に「奉寄進 享保六年 辛丑歳 夜須郡甘木七日町住人」「早良郡田嶋鳥越山ニテ尾藤孫七之造」とあり、享保年間に高取窯が田島に存在したことがわかる。	甘木市教育委員会1996
陶器 茶入・茶碗・水指・建水・花入・香炉・香合・茶壺・皿・鉢・碗・床置・甕・徳利・水盤・陶硯	焼成室8 ※御陶所の見取図から	全長24m 幅2.5～6.3m	享保元年(1716)～明治4年(1871) 開始が宝永5年(1708)説あり(奥村1979・副島1986) 享保元年(1716) 明治4年(1871)	民家が建ち並び、古窯跡は壊滅状態か。窯は旧街道近くに作られたか。藩主黒田綱政の時に開窯し、藩庁に皿山奉行を置く。文政6年(1823)5月以降には献上品に高取焼の烙印をする。 御焼物所が仕立てられ、藩の窯業が再開する。 高取焼の窯で享保元年、福岡市早良区西新町鹿原に開窯。御用窯として明治4年(1871)に消窯したが、民窯として残り、大甕土管などをその後も焼いている。(陶磁用語辞典) 陶土　御笠郡向佐野村(太宰府市)、穂波郡合屋郷中村の高宮　筑前東皿山(東山高取)及び西皿山(西山高取)の陶窯を鹿原窯と記した書が尠くないが、鹿原窯は誤りで、正しくは麁原窯である。(陶器大辞典) もとの高取の鼓釜と呼んだもので、のち、筑前国(福岡県)上座郡鹿原村に移り、この名を称した。(陶磁用語辞典) ※福岡県案内では高取焼の説明で、鹿原村と記載する。 ※「麁原」を「鹿原」と誤認した結果が一部に流布したものであり、「鹿原窯」は存在しない。	皿山役所記録 筑前国続風土記拾遺 福岡県史 奥村1979大塚薬報No.322 副島1986地方史ふくおか 54 原色陶器大辞典 横河民輔1935日本諸国窯一覧 福岡市第916集 塩田力蔵1922日本近世窯業史 陶磁用語辞典 博多研究会誌第3号 尾崎2013筑前高取焼の研究 陶器大辞典
			享保元年(1716)	松山窯から移る。(横河1935) 享保元年、福岡市早良区西新町皿山より分かれ、東山へ移したものである。日用雑器を主として焼く。(陶磁用語辞典)	横河1935日本諸国窯一覧 陶磁用語辞典
陶器 小皿・小鉢・托・向付・鉢・盤・盥・振出・蓋・猪口・吸出茶碗・碗・丼・把手付片口碗・水注・急須・徳利・銚子・油徳利・瓶・燈盞・秉燭・油差・合子・置物・水滴・陶硯・瓶子・高杯・香炉・花入・漁錘・壺・火入・植木鉢・手焙・稲荷社・擂鉢・鍋・甕・井戸ポンプ・不明容器	窯2基　焼成室30(大橋2010) 窯3基	14度	寛保元年(1741)～明治36年(1903)や明治末年まで ※日本諸国窯一覧・副島説では享保3(1718)年	藤崎遺跡35次調査では窯本体の検出なし。整地層と埋納遺構あり。亀井味楽窯1軒が操業を続け、登窯1基が保存される。 西町皿山の記載あり。(大橋2010) 藩主黒田宣政が小石原陶工数人(柳瀬三右衛門)を移す。明治に森長三郎等が新窯を起して、高取英一等に茶器を焼かせる。(横河1935) 早良郡麁原村の柳瀬甚平(先代勘兵衛)、同郡西新町の中川武平、同町早川嘉平らの先代が享保元年に移窯する。また享保3年(1718)、小石原村の陶工数人が西新町に移る。(塩田1991) 陶土　早良郡七隈村　同郡麁原村 釉薬　金武村　長尾村	幸袋町誌 福岡県西新9 福岡市第916集 福岡市史 大橋2010東洋陶磁第39号 副島1986地方史ふくおか 54 横河民輔1935日本諸国窯一覧 塩田1991日本近世窯業史 力武2016新修福岡市史資料編考古1
			明治22年(1889)～明治25年(1892)	東皿山の陶工高取英一、同重記、同和三郎等が横田利兵衛、牛尾量蔵、森長三郎を出資者として窯を作る。(幸袋町誌) 明治年代、森長三郎が高取英一をして再興せしめたりし新窯は、ゼーゲル十三蕃の火度なりしといふと記載あり。(塩田1922) 陶土　御笠郡吉松村　早良郡七隈村　　上座郡小石原村 天草石(熊本県) 釉薬　早良郡有田村　上座郡赤谷　　穂波郡中村　　他に早良郡金武石　筑紫郡高宮　(塩田1922)	幸袋町誌 塩田1922日本近世窯業史
				北村彌一郎が大正2年(1913)3月に調査見聞。製造業者は早川嘉平・樺島某・亀井源太郎(子息の弥太郎が営業)。茶器・菓子器その他上等品を高取焼とし、植木鉢・水瓶などの下等品は高取焼と称せず 陶土　七隈・吉松・茶山・天草・対州石。釉原料は赤谷石・対州石・天草石・網代石・長尾石	工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
			明治32年(1899)	明治32年(1899)4、5年の間当時の名工高取英一によって開窯される。御用窯の作風による製品が作られる。	筑紫1938九州陶磁
			明治26年(1893)～10年間	森長(永)三郎が独力で開く。 明治26年、福岡市鳥飼で開窯された高取焼。明治36年に閉止した。このころの作品には黒田候の藤巴紋章が捺されている。(陶磁用語辞典)	筑紫1938九州陶磁 幸袋町誌 陶磁用語辞典 原色陶器大辞典

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
26	今川高取窯跡	いまがわたかとり	福岡市	福岡市中央区今川	宅地	福岡	民窯	一部調査　　福岡市教育委員会 1981.5.18～1981.6.2	
27	野間焼窯跡	のま	福岡市	福岡市南区皿山2丁目	宅地 神社	福岡	（藩窯→） 民窯	未調査	野間焼
28	宗七焼窯跡	そうしち	福岡市	福岡市博多区祇園町	ビル	福岡	民窯 （藩御用窯）	発掘調査済	宗（惣）七焼 博多焼
	博多　素焼きもの	はかた　すやきもの		福岡市博多区祇園町	ビル	福岡	民窯	未調査	名無し
	博多　瓦	はかた　かわら		福岡市博多区祇園町	ビル	福岡	民窯 （藩御用窯）	未調査	名無し
	覇台焼	はたい	福岡市	福岡市博多区祇園町	ビル	福岡	民窯	一部調査　　博多遺跡群第213次 福岡市教育委員会　2017.6.5～2018.6.5 ※旧工房の西端（登窯部分）は隣地のため未調査	覇台焼
	博多人形	はかたにんぎょう	福岡市	福岡市博多区祇園町	ビル	福岡	民窯	一部調査　　博多遺跡群第213次 福岡市教育委員会　2017.6.5～2018.6.5	※江戸期においては特定の名はない。運上帳には「素焼人形」とある。近代以降は「博多素焼人形」「博多細工人形」から「博多人形」に遷移
29	須恵焼窯跡 ［福岡藩磁器御用窯跡］	すえ ふくおかはんじきごよう	須恵町	糟屋郡須恵町大字上須恵字東原（皿山）	3基現地保存	福岡	藩窯→ 民窯	調査済み 1974　須恵町教育委員会 〈第1次〉2006.12. 1 ～ 2007. 3.30 〈第2次〉2007.12. 4 ～ 2008. 3.31 〈第3次〉2008. 4.22 ～ 2009. 3.31 〈第4次〉2009. 7. 1 ～ 2010. 3.31 1980.3.1　県史跡指定 須恵焼の町指定有形文化財（工芸品）として「釈迦像台座」・「花立（仏花器）（1978.4.1）／「染付鉢」・「御酒器徳利」2・「御供鉢」（1982.4.1）／「金錆染付山水文花生」・「金錆染付酒注」（2005.7.19）	須恵焼 〔金錆焼〕

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
				今川高取窯跡　包蔵地解除	福岡市文化財分布地図
磁器 徳利、碍子 陶器 土瓶（山水、イッチン）、行平、焙烙、平仄、鉄道茶瓶（徳利形と急須形の新旧2種あり）	澤田瞬山まで登り窯（山王神社境内西側） 他は空吹窯5地点が遺構として確認。 記録では戦前の昭和最盛期には15件の窯元があり、2つの工房が登り窯を採用していたが、終戦後解体され空吹き窯のみとなった。		安政2年（1855）～明治3年（1870） ※安政3年（1856）？　安政4年（1857）？	陶工佐々木与三郎・横田與七に京焼を作らせる。その後、澤田舜山が明治8（1875）年に復興。初期の藩窯時代は磁器も生産。鉄道茶碗が主体。大正12（1923）年頃に野間工業組合ができ国鉄門司鉄道局と契約して全九州の鉄道茶瓶を受注、戦前の昭和最盛期には15件の窯元があった。 京焼の類で、土瓶、急須、茶碗等を作る。 陶土　野間村柳河内（野間2丁目東側、、皿山2丁目、御畠山（若久5丁目付近）、長住。1960年代前半に長住が団地化したことで原土採掘が終了し廃業した事業者が多い。	横河1935日本諸国窯一覧 筑紫1938九州陶磁 塩田1922日本近世窯業史 原色陶器大辞典 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 南区ふるさと 西花畑郷土史研究会2017郷土西花畑 山村1992大町遺跡 太宰府市 西花畑郷土史研究会2019郷土西花畑 山村信榮氏聞き取り調査
陶器 風炉、手炉、香炉、火鉢、焜炉、床置物、文鎮、狂言人形、能楽面 面、風炉、台七輪、植木鉢、香炉、香合、煎茶道具、根付、火舎、手焙り炉、仏像、頂像、人形	博多遺跡群173次調査地点が宗七家の地所。調査時は中世の面から調査。近世の土坑（攪乱土坑と記載）などが検出されるも報告書には詳細な記載がない。遺物も人形類などがあるとされているが割愛されている。		明和3年（1766）以前～明治初期	初代惣七（1768年没）は博多瓦町にあった藩の御用瓦師正木家の3代から分派し傍系家として独立した陶工師で、祇園町下に工房を構えそこで幕末の6代まで操業した。2代から「御用御焼物所」の看板を掲げ、4代から「宗七」銘を使用。近代になり県の仲介により「宗七」の落款は中ノ子家に譲渡された。 原土は比重の異なる在地系の褐色土と京都系の白色土を混ぜて使用。京都系の白土が無くなったため廃絶したともされている。 燻による光沢のある黒焼や鉄錆を表現した柚肌錆地焼など焼成による色調に特色があり、色材を原土に混ぜた色土の技法も見られる。人形ものなど絵付けに蒔絵師による彩色の作もあるとされる。	横河1935日本諸国窯一覧 筑前国続風土記 原色陶器大辞典 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 塩田1922日本近世窯業史 陶磁用語辞典 『博多人形沿革史』博多人形沿革史編纂委員会2001 梅林新市 1977 稿本古博多人形史
土器、灯火具、七輪、涼炉、急須、火桶、焙烙、玩具（ままごと道具、箱庭道具、おはじき他）、鈴	博多遺跡群117次調査において、高尾家関係の素焼きもの出土。 高尾家の傍系は近代以降に野間皿山に工房を構え、博多人形と兼業で空吹き窯を操業		江戸初期～近代	瓦町の成立に伴って火を扱う陶工が瓦町やそこに近い社家町や祇園町で工房を展開。江戸中期で6,7軒であったが、幕末頃には30軒程の同業者で株仲間を形成。正木、岡、今井、高尾家などが知られる。岡は中世の宇美八幡宮のかわらけ生産につながるとされ「平蔵」の名を継いで生産を現代まで続けた。人形師の中ノ子家は化政期頃までは七輪を主製品とする陶師であった。今井家は藩の儀礼用のかわらけを生産する御用役として小倉村（春日市）での原土の採掘を公役として行っていた。	山村1993近世都市における窯業生産（福岡・博多のケースについて）はかた第6号
丸類			江戸初期～幕末	黒田家が筑前に移封された際に博多の南郊に瓦町を設け、城普請に必要な瓦を調達するため瓦町を設け播州からの瓦師を住まわせた。江戸初期から幕末まで大凡11軒の瓦屋が操業。長子が家を継ぎ傍系は本家の家業を避け、陶工になるものや今宿、宰府、江辻など博多近郊に出て瓦師を続ける者があった。宗七焼は江戸中期以降の傍系の陶工によるもの。瓦師には山崎、正木、喜多村、田中、千胡などの名が知られ、同業者で瓦座を形成していた。	山村1993近世都市における窯業生産（福岡・博多のケースについて）はかた第6号
花器、供膳具、床置物、面 吉三郎作には白磁人形（武者もの）があり市兵衛は碍子の生産も行った。	博多祇園町の工房で吉三郎期はロストル倒炎式の小型窯で市兵衛は登り窯を採用。		江戸末～	覇台焼は祇園町にあった中ノ子家の製陶業の部分を示し、藩の勧業製陶所に出仕して須恵焼の工房で作陶していた。中ノ子吉兵衛の子吉三郎が焼いて居り、その後、市兵衛、勝美と長子が継いできた。技法は傍系の市兵衛の妹タミの系統にも伝えられる。須恵の金錆、高取焼、宗七焼の作風等が見られ、窯印には覇山と銘が捺されている。「渋手焼」とされる釉に亀裂を入れる独自の技法が知られる。また、素焼人形等に焼成前に鉱物系の色材で彩色して焼成で焼き付ける「中ノ子焼」の技法も伝承している。市兵衛の窯場は祇園町の他に野間皿山、雑餉隈、平尾又は高宮などにもあった。勝美以前のどの世代から「覇台焼」を称していたか明確ではない。	筑紫1938九州陶磁 梅林新市 1976 稿本古博多人形史 『博多人形沿革史』博多人形沿革史編纂委員会2001 山村信榮氏聞き取り調査
素焼人形・人形型・火鉢・七輪・窯道具・玩具（ままごと、おはじき、箱庭道具）、土鈴	博多遺跡群213次調査（中ノ子工房跡）において、1面目で江戸時代末～明治初頭にかけての窯跡7基を検出。江戸後期から明治初期に位置付けられ、ロストル倒炎式の小型窯と空吹き窯の2種があったと考えられる。ロストル窯は薪の他石炭が使用された。 中ノ子以外の他工房の窯は焼成が容易な空吹窯が採用された。		中ノ子家　文化5年（1808）～	福岡市博多区産の土人形。江戸後期に宗七焼の四代正木宗七、中ノ子吉兵衛らが始めた。（日本陶磁大辞典） 山村信榮は博多人形の始原について宗七焼より伏見人形と関わりを指摘している。（山村1988）人形師の師弟関係の系統から宗七焼は博多人形との繋がりがなく、博多人形はほぼ中ノ子系統と白水系統からなる。白水家は細工物師の技術系統で、江戸期に博多祇園山笠を製作していた小堀家系の技術を継承する。慶応2年（1866）の段階で博多市中で23件の素焼人形師がいた。江戸期に同業者組織があったか不明だが、明治7年（1874）に組合が組織された（嘉永3年（1850）の別説あり）。 江戸期まで原土は花崗岩風化土の褐色系粘土と第4紀のローム層の青い粘土（麦野土＝八女ローム）の2種が使用され、大正末期以降に七隈、田島の花崗岩風化土の白色系粘土が主流になった。江戸期の中ノ子家の土型の一部が「博多人形祖型」として福岡県の有形民俗文化財に指定されている。 原土のうち、白土は野間土・七隈土、黒土は雑餉隈付近の小松原土ほか（北村） 商工省「全国工場通覧」には小島人形工場（明治33年（1900）5月開業）と博多人形製作工場（大正6年（1917）6月開業）が掲載される	日本陶磁大辞典 山村1988 博多人形沿革史 工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929 全国工場通覧 梅林新市 1976 稿本古博多人形史 山村1993近世都市における窯業生産（福岡・博多のケースについて）はかた第6号 『博多人形沿革史』博多人形沿革史編纂委員会2001 博多192　2023　福岡市教育委員会
磁器 皿・碗・鉢・壷・瓶・水指・風炉・水注・香炉・花生・盞・神佛具・置物・窯道具（トンバイ・ハマ・トチン）	本窯（41室）、新窯（明治期）、試験窯 建物跡 土坑 大橋2010では窯2基　焼成室31 ※筑前国続風土記拾遺の文政年間の皿山の様子では、登窯2基、焼成室22、13	本窯・新窯・試験窯 本窯 長さ100m 幅10m	宝暦（1751～1764）～明治35年（1902） ※宝暦8年（1758）・宝暦14年（1764）の説もあり（高山1991・1992） 久我記念館2003では宝暦14年（1764）築窯	寺社司の下吏、新藤安平が須恵村金山間堀で白土発見する。焼き物に詳しいものを肥前南河原山で指導を受けさせ、始まる。 享和元年（1801）～文政12年（1829）に皿山奉行所設置。 文政12年～安政末（1860）年には民窯へ移行するが、安政年（1860）～明治3年（1870）には再度、皿山奉行を設置する。その後、井上伊作・松永吉蔵・金森嘉助により引き継がれる。明治20年（1887）には株式会社が組織され、金錆焼を製作する。（高山1991・1992） 明治30年（1897）頃数年の間、朝倉郡甘木の玉ノ井騰一郎、藩窯を再興し金錆釉の雑器を製造して居る。（筑紫1938） 慶應3年（1867）3月24日「七卿在西日誌」東久世通禧に「乗馬。午後、須恵は皿山陶所見物。宇美社参拝し憩う。暮夜帰宰す。所々藤花盛開。」（伊東尾四郎編） 文化初年には窯41、水碓65を設ける。 筑前国続風土記附録（平岡本）須恵皿山陶器所の図によると、本窯、試験窯、陶器所のほかに薪小屋、水簸施設、瓦葺建物（製品を保管する蔵と想定される）、一宇一石塔（創始者新藤安平の50回忌を供養して孫が建立）、その他建物（付属施設や工人の住居）等が描かれている 須恵町教育委員会にて遺物を保管 陶土は地元と天草石	大橋2010東洋陶磁 第39号 原色陶器大辞典 高山慶太郎1991ふるさとの自然と歴史 227 高山1992福岡県地域史研究　第10号 須恵町誌 須恵町第9集 塩田1922日本近世窯業史 筑紫1938九州陶磁 福岡県史資料第3輯「五卿在筑資料」 久我記念館2003筑前の磁器須恵焼資料集2003

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
30	役所畑新窯跡	やくしょばた	須恵町	糟屋郡須恵町大字上須恵字東原（皿山）	山林	福岡	藩窯	未調査	須恵焼〔金錆焼〕
31	宇美障子岳窯跡	うみしょうじだけ	宇美町	糟屋郡宇美町障子岳2丁目	山林	福岡	民窯	昭和56年（1981）に、遺物（須恵焼の破片）が表採され、聞き取り調査等により、窯跡があると推測された。平成30（2018）年1月に現地踏査を行い、須恵焼の破片と窯跡に伴う遺物を表採した。	須恵焼〔金錆焼〕
32	中野上の原窯跡	なかの かみのはる	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字中野（皿山）	現地保存	福岡	藩窯 ※民窯	調査済み 1989　小石原村教育委員会 〈第1次〉1987. 6.15 ～ 7.18 〈第2次〉1989. 9.22 ～ 12.12	小石原焼 中野焼
33	火口谷窯跡	ひぐちだに	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字中野（皿山）	山林	福岡		〔1号窯〕 調査済み 小石原村教育委員会 〈試掘〉1988. 9. 5 ～ 10. 1 〈調査〉1993. 8. 2 ～ 12.21 〔2号窯〕 調査済み 小石原村教育委員会 〈調査〉1995. 9.20 ～ 11.30 〈試掘〉1996.10.21～1997.2.24	小石原焼
34	大明神窯跡	だいみょうじん	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字中野（皿山）	宅地	福岡		未調査	小石原焼
35	旧下組窯跡	きゅうしもぐみ	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字中野（皿山）	倉庫 畑地	福岡	民窯	未調査	小石原焼
36	旧上組窯跡	きゅううえぐみ	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字中野（皿山）	窯	福岡	民窯	未調査	小石原焼
37	池の谷窯跡	いけのたに	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字中野（皿山）	宅地	福岡		未調査	
38	金敷様裏窯跡	かなしきさまうら	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字中野（皿山）	神社 山林	福岡	民窯	〔1・2号窯〕未調査 〔3号窯〕調査済み 小石原村教育委員会　1992.10.20 ～ 11.27	
39	一本杉窯跡	いっぽんすぎ	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字中野（皿山）	現地保存 山林	福岡		〔1号窯〕試掘調査　小石原村教育委員会　1992.10.20 ～ 11.27 〔2号窯〕調査済み　小石原村教育委員会　1994.9.6 ～ 12.19 1996.5.31 県史跡指定	高取焼系？
40	十文字窯跡	じゅうもんじ	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字中山	山林	福岡		未調査	
41	奥畑瓦窯跡	おくはた	東峰村	朝倉郡東峰村大字小石原字奥畑	山林	福岡	民窯	未調査	近代の工業製品？
42	釜床窯跡	かまとこ	東峰村	朝倉郡東峰村大字鼓	現地保存	福岡	藩窯	〔1号窯〕 調査済み 小石原村教育委員会 〈試掘〉 1990.12.14 ～ 1991. 2. 2 〈第1次〉1991. 9. 1 ～ 10.14 1996.5.31 県史跡指定 〔2号窯〕未調査	高取焼
43	鎌研窯跡	かまとぎ	糸島市	糸島市二丈深江		中津		未調査 土地の所有者が発見	

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
磁器			江戸時代	窯道具が散布する。 平坦地に「役所畑」の地名が残り、隣接地水碓が残る。筑前国続風土記附録（平岡本）須惠皿山陶器所の図では「平原陶丘」と記載。隣接する村山家は「新窯」の屋号を持つ。	須恵町第9集
磁器・燈明皿・金錆焼（仏花器）など			明治期	標高約80mの丘陵裾に位置する。昭和56年5月に宇美町立歴史民俗資料館が遺物表採・聞き取り調査を行う。表採遺物は、明治期と考えられるの須恵焼（金錆焼）であり、須恵焼皿山窯跡と関連が深いと考えられる。 採集品は、宇美町立歴史民俗資料館にて保管。	須恵町誌 須恵町立歴史民俗資料館1981 新修宇美町誌
陶器・半磁器・磁器 碗・鉢・皿・坏・壺・甕・瓶・水指・風炉・水注・香炉・仏飯具・擂鉢・陶管・火入れ・合子・手捏ね製品・ひょうそく・筆立て・蓋・花入れ・窯道具（トッチミ・チャツ・ダンゴ・焼成台・・シノ・ハマ・サヤ鉢・トンバイ）	階段状連房式登窯 焼成室10（3・5・10室と3回増築） 礎石あり（窯の上の屋根を作る）	残存長38.7m～ 幅3.9～4.8m 幅4～4.5m 12度	天和2年（1682）～享保7年（1722） 1736年頃に再興された記述あり『筑前国続風土記附録』（大橋2010）	藩主黒田光之が天和2年（1682）に肥前伊万里から陶工を呼ぶ。小石原焼草創期の窯。享保7（1722）年銘の最後に焼かれた土管類あり。 考古地磁気年代法では1680～1750年代の結果が出る。 ※『近国焼物山大概書上帳』で小石原皿山の記載あり（大橋2010）。どの窯が該当するかは不明。 東峰村教育委員会にて遺物を保管 泉山の陶石を使用か※蛍光X線分析による	筑前国続風土記 児玉1993東洋陶磁 第20・21号 小石原村第1集 小石原村第3集 小石原村第5集 東峰村第5集 大橋2010 『近国焼物山大概書上帳』「筑前領皿山之分」 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集
〔1号窯〕 陶器・磁器 碗・皿・鉢・植木鉢・徳利・片口・擂鉢・瓶・火入・灯火具・仏飯器・蓋・水滴・陶管・窯道具（チャツ・ハマ・ダゴ・トッチミ・火盾・トンバイ） 〔2号窯〕 陶器・磁器 碗・皿・火入・窯道具（ハマ・チャツ）	窯2基 〔1号窯〕 階段状連房式登窯 焼成室10 上屋柱穴20 排水溝 〔2号窯〕 焼成室1のみ残存	〔1号窯〕 全長約42m 幅2.85～4.9m 11度 〔2号窯〕 残存長2.6m 幅2.6m 10度	〔1号窯〕18世紀前半～18世紀中頃 〔2号窯〕1号窯よりわずかに先行するか。	〔1号窯〕 中野上の原窯に少し遅れてつくられるか。 〔2号窯〕 昭和30年頃に掘られた目砂採りにより、窯の大半は削平される。 東峰村教育委員会にて遺物を保管	小石原村第2集 小石原村第4集 東峰村第5集
窯道具（トチン）			19世紀代か	窯は天井が低く、腰をかがめてしかは入れない。横壁・天井にトンバイ使用。クサビ形のトンバイや磁器があったようである。個人宅地内にあったが、現在は確認できない。	小石原村誌 小石原村第3集 東峰村第5集
			昭和36年（1961）まで操業	現在は壊され、畑になる。4窯元の共同窯であった。 昭和36年まで操業した共同窯	小石原村誌 東峰村第5集
			昭和32（1957）年まで操業	廃窯後に新しく築窯されている。4窯元の共同窯であった。 昭和32年まで操業した共同窯	小石原村誌 東峰村第5集
染付？			18世紀前半か	平成6（1994）年6月に合併浄化槽建設中に大量の陶片が出土する。現在の宅地部分に窯があったか。出土品には染付けがあり、上の原窯と同時期か。	小石原村誌 東峰村第5集
〔3号窯〕 碗・皿・鉢・徳利・窯道具（ハマ・トッチミ・トンバイ・火盾）	窯3基 〔3号窯〕焼成室4	〔3号窯〕 全長約15m 幅2.6～3.4m	〔1・2号窯〕18世紀後半～19世紀代か 〔3号窯〕18世紀中～後半に開始か。	〔1・2号窯〕 金敷様裏1・2号窯周辺で19世紀以降の徳利を表採。物原・窯本体もかなり破壊されている。 〔3号窯〕 中野上の原窯跡より古い時期か。 18世紀代の皿・碗・鉢類の窯 東峰村教育委員会にて遺物を保管	小石原村第3集 小石原村第4集 東峰村第5集
〔1号窯〕 擂鉢・捏鉢・壺・甕・水盤・団子状目・窯道具（トッチミ・トンバイ） 〔2号窯〕 水指・片口・小壺・捏鉢・水盤・擂鉢・甕がある。窯道具（トッチミ、チャツ、クサビ形焼台）	窯2基 〔1号窯〕 胴木間と焼成室4 〔2号窯〕 階段状連房式登窯 胴木間と焼成室6 排水溝 柱穴	〔1号窯〕 残存長13m 幅2.4～2.6m 〔2号窯〕 残存長20m 幅2.4～3.6m 10度	〔1号窯〕17世紀後半 〔2号窯〕寛文9年（1669）～	〔1号窯〕 奥壁だけにトンバイを使用し、天井・壁を粘土で構築する。他の窯跡とは異なる陶土を使用か。窯幅が狭く、奥壁にだけ屯バイを使用することから中野上の原窯跡より古い窯跡か。 〔2号窯〕 トンバイを奥壁のみ使用し、天井・壁を粘土で構築する。肥前の影響がなく、高取焼の系譜を受け継いだものか。『高取歴代記録』による「寛文9年（1669）に小石原村の中野と云う所に新皿山が出来しより、高取八之丞が移り住む」に該当する窯か。 奥壁での考古地磁気年代法では1680±30年代の結果が出ている。 東峰村教育委員会にて遺物を保管	小石原村第4集 小石原村第7集 東峰村第5集 小石原村誌
			18世紀中頃～後半	梨畑にあり。梨園造成中に陶片を表採するが、窯本体については不明。	小石原村誌 小石原村第3集 東峰村第5集
			明治？	陶器瓦の窯跡。	小石原村誌 東峰村第5集
〔1号窯〕 陶器・磁器 茶入・蓋・蓋置・水指・碗・皿・鉢・香炉・水盤・花入・窯道具（サヤ・トチン・焼台・トンバイ）	窯2基 〔1号窯〕 窯3か所？焼成室5以上 階段状連房式登窯 焼成室6以上 上屋柱穴左右に6～7 排水溝 土坑	〔1号窯〕 残存長11m 残存幅1.9～2.6m 11度 〔2号窯〕 不明	〔1号窯〕 開始は寛文5年（1665）・寛文7年（1667）か。閉窯は元禄17年（1704）。 17世紀後半～18世紀初頭 〔2号窯〕 天保6年（1835）～明治	〔1号窯〕 次男八蔵貞明（2代目）が白旗山窯より移って活動する。 戦前、高取家が木材搬出路を掘削した際に窯跡を確認する。多量の陶器片とレンガを採集。 考古地磁気推定年代によると最終焼成は1710±30年という結果がでる。 〔2号窯〕 八郎常保が天保6年に認可を願い出たものと思われ、19世紀中頃と推定される窯。現状では確認できないが、長さ20m、幅6mの平坦な場所を確認する。東側斜面からは陶器片が散乱する。現在は昭和43年（1968）に白旗山から移築された高取八山と志らと、12代の墓になる。 窯跡周辺には天照太神宮や高取家累代墓地がある。 東峰村教育委員会にて遺物を保管	福岡県史 高取家文書 小石原村誌 小石原村第3集 小石原村第5集 東峰村第5集
磁器 碗・窯道具（ハマ・タコハマ・トチン）			出土遺物から19世紀代	糸島地方唯一、磁器を焼いた窯跡。土地の所有者が発見する。	二丈町誌平成版

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
44	日明窯跡	ひあけ	糸島市	糸島市大字飯原		唐津 幕府 中津		未調査	
45	雷山窯跡	らいざん	糸島市	糸島市		福岡		未調査	
46	三並ヒエデ窯跡	みなみひえで	筑前町	朝倉郡筑前町大字三並	宅地	秋月	民窯？	未調査	
47	浄満寺窯跡	じょうまんじ	朝倉市	朝倉市長谷山	山林	秋月	藩窯	採集	
48	野鳥窯跡	のとり	朝倉市	朝倉市秋月野鳥	山林	秋月	藩窯	採集	
49	石崎焼	いしざき	筑紫野市	筑紫野市石崎	未特定	福岡	民窯	未調査	
50	糟尾焼	かすお	不明		未特定			未調査	
51	津屋崎人形	つやざきにんぎょう	福津市	福津市	宅地	福岡	民窯	未調査	
52	宰府　瓦	さいふ　かわら	太宰府市	太宰府市五条1丁目	民家	福岡	民窯	未調査	
53	今宿人形	いまじゅくにんぎょう	福岡市	福岡市西区今宿1丁目	ビル	福岡	民窯	未調査	今宿人形

筑後

1	一の瀬[朝田]窯跡	いちのせ[あさだ]	うきは市	うきは市朝田楯	山林	久留米	民窯	採集	一ノ瀬焼（朝田焼）
2	柳原焼窯跡	やなぎはら	久留米市	久留米市篠山町（久留米城内三の丸）	工場	久留米	お楽しみ窯、藩窯	未調査	柳原焼
3	朝妻焼窯跡	あさづま	久留米市	久留米市合川町	山林	久留米	藩窯	調査済み 久留米市教育委員会 〈第1次〉1992.1月下旬 ～ 3月 〈第2次〉2015. 2.12 ～ 3.31	朝妻焼
4	東野亭[野中]焼窯跡	とうやてい[のなか]	久留米市	久留米市野中町	消滅	久留米	お楽しみ窯・藩窯・民窯	調査済み 久留米市教育委員会　1998.10.14 ～ 12.28	東野亭（野中焼）
5	十三部焼窯跡	じゅうさんぶ	久留米市	久留米市合川町十三部	消滅	久留米	民窯	2011年度に旧従業員の聞き取り調査を実施（未報告）	十三部焼

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
				糸島郡雷山に開窯の記述あり。 糸島郡誌では長糸村の中に雉子琴神社の側に、製陶所址の記載あり。	船木長造1933大日本窯業協會雑誌 41巻490号 糸島郡誌
				雷山に於て製陶した事ありと、記載する。 糸島郡雷山に開窯の記述あり。(船木1933)	中山1915考古学雑誌 5-6 船木1933大日本窯業協會雑誌 41巻490号
			19世紀	窯道具のみ確認	伊﨑俊秋1999甘木歴史資料館報第1集
陶器 トチン・ハマ	登窯？ 3室以上か		18世紀中葉～18世紀後半	レンガ状の壁体が見いだせる。現地踏査では、尾根の頂上付近に長さ約14m、幅約3mの範囲で窯跡を確認した。周辺は削平を受けていて、露出した土層断面から厚さ約0.5m床面が、階段状に見える。南側の斜面からは遺物が点在する。	望春随筆 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集
			18世紀後半～19世紀初めか	旧八丁峠にいたる旧道沿いにあり、窯は完全に埋没し、僅かに壁体がのぞける。副島邦弘による平成18年(2006)の現地踏査や今回の調査でも窯自体は確認できない。	望春随筆 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集
			明治	明治18年(1885)の調査によれば、御笠郡石崎村にも陶窯あり。土器及び瓦等に渉りては、更に窯場も少なからざるべし。殊に明治末年には、此地方の瓦は全く石炭焼成となれるを見る。(塩田1922)	横河1935日日本諸国窯一覧 塩田1922日本近世窯業史
				筑前国(福岡県)に産するやきもの。詳細不明。(陶磁用語辞典)	横河1935日本諸国窯一覧 陶磁用語辞典
土人形			明和～安永年間(1764～1781)	江戸後期の明和～安永年間に始まったとされる。博多土人形と同系の土人形。最初は火鉢や甕などをつくっていたが、人形や動物などを製作するようになった。原田家の人形型(通称加藤清正像)に安政6年(1859)4月の銘がある(津屋崎町史)	福岡県百科事典 津屋崎町史通史編
瓦		ダルマ型瓦窯	江戸～昭和34年(1959)まで	中世宰府「六座」のうち金屋(鋳造)の平井家が瓦を製造。平井家の瓦生産は平安時代に遡る。江戸期は太宰府天満宮の営繕で瓦を供給している。江戸後期には博多瓦町の瓦師の山崎家系統の「忠七」が宰府で操業し、観世音寺に供給している。平井家は昭和34年に観世音寺宝蔵の屋瓦を一括して生産したのを最後に廃業した。瓦製作道具一式は太宰府市指定文化財。	太宰府市広報2023.9月号
土人形 節句人形、面、おはじき		空吹き窯	平成まで	「九州では博多人形が津屋崎を成立させたが、さらに明治になって今宿(福岡市)、弓野(佐賀県武雄市)を派生させた」(石沢1984) 明治末頃に初代大橋清助が明治38年(1905)に福岡市西公園の「みつや」から型を買い受けて博多中ノ子系の節句人形を中心に製作を開始。昭和に入り茂雄が家業を継ぎ、一時生産を縮小したが平成の初め頃まで製作を続け廃業。姪の佐藤由美子氏が平成に復興し今に至る。清助の工房の至近には江戸期以来の「今宿瓦」の生産工房(博多の瓦師正木家の傍系工房)が複数あった。「今宿三右衛門」銘瓦は福岡城跡でも出土している。窯業起業の背景に連関する可能性はある。	石沢1984 ※山村聞き取り調査を加味

磁器・陶磁器 茶碗・皿・徳利・瓶・壺・火鉢など	46年前にはすでに消失 2基の内1基現存か 階段状連房式登窯 焼成室13室	口伝では全長50m程度	元和6年(1620)説あり 文化元年(1804)～文政12年(1829) 天保元年(1830)～短期間 安政年間(1854～1860)又は慶応元年(1865)～明治初期	祥瑞が朝妻に窯を開き、次に朝田窯を開く。久留米藩御内用銅山方が朝妻焼開窯前に朝田で陶器の試焼を行う(西原家文書)。慶應元年3月〔安政年間(1854～1860)とも〕朝田村庄屋足立俊平の子壽平が再興して製陶したが、同3年9月に消窯した。 明治維新後廃窯。昭和34年(1959)に再興して5軒あり。 陶土 窯場近く 釉薬 天草	浅野陽吉1935筑後陶瓷考 陶器大辞典 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 久留米市368集2016 浮羽町史上巻・下巻 浮羽郡誌 久留米市史13
茶陶、碗・水注・花器	消滅	不明	天保3年(1832)～天保12年(1841) 天保年間 天保3年より7年まで(陶器大辞典)	6代藩主有馬則維が陶工祥瑞を伊万里より招く。 昭和9年(1934)に福岡県が設置した標示板について記載あり。(御井町誌) 日本諸国窯一覧にも元和2年、「一説に瑞祥五郎太夫この窯で染付を創めたと傳へらる」と記載する。(横河1935) 県地図030253 「石原家記」には、有田・伊万里から陶工を招き、朝妻で水唐臼を突いた記事あり。当時は「十三部皿山」と呼ばれ、城下町の豪商、山崎屋・戸板屋資本が実質経営か(旧家由緒書)。皿屋・竹屋・田中家が販売権を持つ。(田中家資料) 久留米市教育委員会にて遺物を保管 陶土 天草産と窯の所在付近の隈山産	陶器大辞典 浅野1935筑後陶瓷考 御井町誌 横河1935日本諸国窯一覧 久留米市誌(下) 久留米市史13 久留米市368集 久留米藩土器司田中家資料1979
陶器・磁器(色絵磁器) 皿・蓋付碗・瓶・猪口・鉢・香炉窯道具(トチン・ハマ・チャツ・ナンキン・サヤ鉢・チャニ・シノ)	階段状連房式登窯 焼成室3(推定9室)・物原 排水溝	推定長40m	正徳元年(1711)又は同4年(1714)～享保10年(1725)又は同13年(1728) (元和2年(1616)説あり:御井町誌、陶器大辞典)	11代藩主有馬頼咸が赤坂焼の緒方宗市に命じて作らせたお楽しみ窯。藩の収入強化のため成産方の管理となり、日用雑器を中心に製作するが、磁器も少量製作する。廃藩後、民間会社に引き継がれるが長くは続かなかった。 久留米市教育委員会にて遺物を保管 陶土 うきは市田篭(旧姫治村)妹川谷？	浅野1935筑後陶瓷考 久留米市第150・404集 原色陶器大辞典 久留米市史13
陶器・磁器 急須・土瓶・湯罐(とうかん)・行平鍋・水注・銚子・燗徳利・碗・皿・壺・鉢・火入れ・灯火具・擂鉢・片口鉢・大鉢・瓶・壺・甕・植木鉢・竈・鋳型・その他・窯道具(輪トチン・ダンゴ・逆台形ハマ・蓋・ハマ・足付ハマ・環状焼台・冠状焼台・ツク・匣鉢・支脚・焼台・支柱・トンバイ)	階段状連房式登窯 焼成室2～3(4～5室以上) 胴木間・物原	全長15.8m以上 最大幅5m 16度	慶應元年(1865)～明治8年(1875)	11代藩主有馬頼咸が緒方宗市に命じて作らせたお楽しみ窯。藩の収入強化のため成産方の管理となり、日用雑器を中心に製作するが、磁器も少量製作する。赤坂焼の緒方宗市が陶業に従事する。廃藩後、民間会社に引き継がれるが長くは続かなかった。 久留米市教育委員会にて遺物を保管 陶土 うきは市田篭(旧姫治村)妹川谷	浅野1935筑後陶瓷考 久留米市第150・404集 原色陶器大辞典 久留米市史13
食器・茶器・植木鉢・便器・土管・火鉢・七輪等	階段状連房式登窯6室	焚口は幅1尺、高さ1尺5寸、各室は2～3間は幅	明治32年(1899)～昭和50年(1975)10月	豊田信吉が開く。 日常雑器を焼き近来では茶器も製出。高取焼に似る傾向がある(原色陶器大辞典)。火鉢や七輪から始まり、小鹿田の職人が参加。「朝妻」角印、「大辻」楕円印を押印(証言)。豊田経営の合川町の十三部焼が64年の歴史を閉じる(西日本新聞) 陶土 久留米市合川町の福聚寺門前の水田	浅野1935筑後陶瓷考 原色陶器大辞典 久留米市史第6巻年表編

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
6	日渡焼窯跡	ひわたり ひわたし？	久留米市	久留米市国分町日渡	未特定	久留米	民窯	未調査	日渡焼
7	青木焼窯跡	あおき	久留米市	久留米市通外町上口屋	未特定	久留米	民窯	未調査	青木焼
8	久留米焼	くるめ	久留米市	久留米近辺	未特定	久留米	民窯	未調査	久留米焼
9	田川焼窯跡	たがわ	久留米市	久留米市三潴町田川	未特定	久留米	民窯	採集	田川焼
10	川瀬焼	かわぜやき	広川町	八女郡広川町大字広川	宅地	久留米	民窯	未調査	川瀬焼
11	坂東寺焼窯跡［熊野焼］	ばんどうじ（くまの）	筑後市	筑後市大字熊野	宅地	久留米	藩窯	採集	坂東寺焼（熊野焼）
12	赤坂焼［三原］窯跡	あかさか［みはら］	筑後市	筑後市蔵数字赤坂 赤坂神社（三原窯跡）	神社 宅地	久留米	藩窯	採集	赤坂焼
13	水田焼窯跡	みずた	筑後市	筑後市大字水田	宅地	久留米	藩窯	採集	水田焼
14	野町焼窯跡	のまち	筑後市	筑後市大字野町	継続	久留米	藩窯	採集	水田焼
15	本星野焼窯跡	ほんぼしの	八女市	八女市星野村大字本星野	畑地	久留米	藩窯→民窯	未調査	星野焼
16	星野十籠焼窯跡	ほしのじゅうごもり	八女市	八女市星野村麻生・十籠	畑地 道路	久留米	藩窯	採集 「星野焼灯篭 一対」1994.12.22 村指定有形文化財（工芸品）→市指定	星野焼
17	田の原焼	たのはら	八女市	八女市星野村田の原	未特定	久留米		未調査	田の原焼
18	今村焼窯跡	いまむら	八女市	八女市黒木町今	未特定	久留米	民窯	採集	今村焼

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
			明治25年(1892)～　不明	水田焼近藤姓が開く。(浅野1935) 明治25年頃水田焼の陶工近藤某が築窯して製陶したものである。(陶器大辞典)	浅野1935筑後陶瓷考 陶器大辞典 原色陶器大辞典
			明治10～20年(1877～1887)頃	青木喜四郎、紺屋嘉七らが作る。青木家の窯で焼いたが、思ったものができず、赤坂窯に依頼して二度焼する。二度焼のため、釉は変化し、器の多くが歪んでいる。 陶土　久留米東郊外の正源寺山	浅野1935筑後陶瓷考 陶器大辞典 原色陶器大辞典
			万延元年(1860)～　不明	万延年間筑後久留米町の傍に於て藩主の命に因て開窯す。(好陶会1918) 久留米近辺に藩主の命令で開窯。朝鮮御本および柿瀬戸・黒瀬戸を模した。	好陶会編1918陶寄 原色陶器大辞典 横河1935日本諸国窯一覧
風炉・火鉢・水甕			江戸中期？	「三潴郡田川村の産風爐、火鉢、水甕等の製大に民用に利あり」と筑後志(安永6年)に記載あり。 昭和51年(1976)頃町道側改修時に素焼き水甕・風炉の破片出土・宇田川野屋敷付近に素焼ドンがいたと伝わる。 陶土　三潴町田川	副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 浅野1978増補筑後陶瓷考 堤1982三潴路今昔
土管・火鉢・七輪・火消壺・芋焼窯ほか			明治初期～	九鐵福島線沿道に窯あり(筑後陶瓷考)。 起源は詳らかではないが、明治の初めには窯があったという。地元に皿山(現在の工業団地北側)と呼ばれる場所があり、そこから採土していた。薪を焚く単窯で、土管・火鉢・七輪・火消壺・芋焼窯等を主に製造していた。昭和60年(1985)当時、3業者の工場があった。消費者ニーズの変化から、従来の作品は需要が無くなっていることから、神山窯では電気窯を使用し、花瓶・茶碗・壺などを作陶(焼き締めを基調としているが、釉薬を使う)。宮本窯は、薪を焚く窯で、蘭鉢・風炉等の趣味物を作陶していた。もう一つの窯はオートメ化した工場で、素焼きの植木鉢を生産していた。令和2年(2020)現在も続いているのは、「神山窯」のみであるが、作陶量は極めて少なくなっている。 陶土:皿山(現在の広川工業団地北側、丘陵北側)	浅野1935筑後陶瓷考
酒器・燈具・茶器・花瓶・火鉢・瓦・手焙			元和9年(1623)～明治維新まで	窯元は田中家(俗にドケ屋)と呼ぶ。風爐前土器との記載あり。家永彦三郎方親の次男藤兵衛方次が、田中五郎左衛門の養嗣となるので、蒲池焼の支流か。元和9年(1623)3月に田中平兵衛が久留米藩初代藩主有馬豊氏の御用土器師となる。 「筑後地鑑」(天和2年:1682)に「‥‥(坂東寺の)東の大門ノ側ニ、居民アリテ陶ヲ善クス。‥‥」とある。9代藩主の時期の「御旧制調書」に熊野村土器師1人とあり、白米五石・白一人扶持を給されている。	陶器大辞典 浅野1935筑後陶瓷考 原色陶器大辞典 久留米藩土器司田中家資料 久留米市史13 水田の半田土鍋焼 久留米市史8
食器・土鍋・植木鉢・土管等・赤坂人形			文政7(1824)年～　三原富次 文化9年(1812)～昭和初期まで続く	文化9年(1812)、水田窯の次郎吉が窯を開くが、その後文政7年に三原富次が再興する。文政10(1827)年には久留米藩御用焼立役となる。 文政11年(1828)の頃、筑後赤坂焼の陶工が、肥前国田代の代官より招かれ、同所皿生野皿山を創設、また、肥後国正代村の瀬上某に頼まれて正代焼を創始する、とされる(筑後市1977)が、対馬藩田代領においては「文政9年(1826)に、代官吉川弾九郎は皿山仕法を計画し、焼物師・陶工・絵師などの手配をおこない、‥皿山仕法を実施した。‥文政12年(1829」ごろに事業は打ち切られている。」(p469-470)とあるのみで、そこに赤坂焼の陶工は出てこない(鳥栖市1973) 陶土:赤坂長原池　　釉薬:天草	浅野1935筑後陶瓷考 九州陶磁文化館1992福岡の陶磁 筑後赤坂焼 久留米市史13
甕・鉢・土管・土鍋・水田人形・半田土鍋・水田瓦			伝・天正年間(1573～1592)	「筑後地鑑」(天和2年:1682)の下妻郡水田村天原山天満宮の記述として「‥‥土師ノ流アリテ陶ヲ善クシ、半田土鍋ヲ作ル。‥‥」とある。本田能登より数代経て、安永5年(1776)に有馬家御用窯となる。本田武兵衛で分家して近藤姓を名乗り、昭和10年(1935)時点ではその系統の近藤虎蔵家のみが営業する(筑後陶瓷考)。「御旧制調書」では9代藩主の時期に、水田土鍋師一人　白米五石・白一人扶持を給されている。(久留米市史)水田人形は虎蔵氏の祖父喜平の叔父・近藤又一が伏見人形・京人形の製法を体得して始めたという。 陶土　水田周辺か	浅野1935筑後陶瓷考 原色陶器大辞典 水田の半田土鍋焼 久留米市史8
甕・鉢・土鍋・植木鉢・土管・屋根瓦など			正徳年間(1711～1716)	水田の焼物師・近藤源八が正徳年間(1711～1716)に野町の近藤家の養子となり、野町において窯業を始めた。現在は近藤四郎家のみ(「水田の半田土鍋焼」) 陶土:伊万里・武雄など(昭和46年記述)	浅野1935筑後陶瓷考 水田校区郷土史 水田の半田土鍋焼
陶器片　焼土片			享保元年(1716)～宝暦年間 明治20年(1887)～明治27年(1894)	「山方小物成方格帳」によると、本星野の御用窯が認可されたのは元文2年(1737)である。星野焼の十六葉菊向附六人揃の箱中に享保9年(1724)とあり。本星野にある星野焼は享保元年(1716)～同9年(1724)の間に開窯したと思われる。室山熊野神社の陶製灯篭に元文3年(1738)の紀年あり(星野村史)。「御旧制調書」では9代藩主の頃に、星野陶細工師一人　白三人扶持とある(久留米市史) 焼土や陶片があり。明治に肥前皿山の職人や小石原陶工池上清一、十籠の陶工森松勢蔵によって焼かれる。	浅野1935筑後陶瓷考 陶器大辞典 原色陶器大辞典1972 星野村史 佐々木四十臣2006星野焼 久留米市史8
茶器類・食器・片口・茶葉壺	窯1基　焼成室6(大橋2010)		宝暦年間(1751～1763)～ (伝・正徳年間(1711～1716)～) ※16世紀末～19世紀	宝暦年間(1751～1763)の初頭に窯が本星野から十籠へ移った。陶工の良八は久留米藩9代藩主有馬頼徳の御庭焼(柳原焼)の窯にも陶工として召し出されている。この窯で作陶していた森松安次・勢蔵父子が明治6年(1873)に黒木に移住して今村焼をおこすが、のちに勢蔵は再び十籠や本星野でも窯を築いていたが、明治27年には窯の火が消える(星野村史)。 正徳年間に復活し、元文以降個人経営に移る(浅野1935)。約30年前の道路拡幅時に遺物を確認した。今回の現地踏査では、窯は確認できなかったが、物原推定地周辺で焼土片や陶器片を採集した。 遺物は八女市教育委員会にて保管	浅野1935筑後陶瓷考 大橋2010東洋陶磁 第39号 原色陶器大辞典 星野村史 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 佐々木2006星野焼 久留米市史13
壺・瓶・瓦・小物			大正年間、短期間操業	石川市蔵開窯。瓦を中心とするが、粘土の質が悪く短期間のみ	星野村史産業編
葉茶壺			明治6年～明治13年(7年間ほど) 19世紀(副島1997)	十籠の星野焼で作陶していた森松安次・勢蔵父子が明治6年に黒木(豊岡村)に移住して今村焼をおこす(星野村史)。カメヤキダニ地名あり。星野焼系統か。初めは隣村の豊岡村で製陶していたが、のちにこの地に移窯。作品陶技については明らかではない。(陶磁用語辞典) 陶土　甕焼谷の続く豊岡の山の根	浅野1935筑後陶瓷考 黒木町史 原色陶器大辞典 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 陶磁用語辞典 佐々木2006 久留米市史13

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
19	釈形焼窯跡	しゃかた ※しゃくがた	八女市	八女市黒木町笠原字釈形	山林	久留米	藩窯	採集 昭和9年(1934)　浅野陽吉窯跡見学	釈形焼
20	鹿子生焼窯跡	かこお	八女市	八女市黒木町鹿子生	消滅	柳河	民窯	採集	鹿子生焼
21	池の本焼窯跡	いけのもと	八女市	八女市黒木町木屋	山林	柳河	藩窯	採集	池の本焼
22	男ノ子焼窯跡	おのこ	八女市	八女市立花町北山男ノ子	山林	柳河	民窯 藩窯	採集	男ノ子焼
23	浜口[小保]焼	はまぐち[おぼ]	大川市	大川市小保		柳河	藩窯		浜口(小保)焼
24	蒲池[柳河]焼窯跡	かまち[やながわ]	柳川市	柳川市蒲池	水田 宅地	柳河	藩窯	採集	蒲池(柳河)焼
25	二川[後田]焼窯跡	ふたがわ[うしろだ]	みやま市	みやま市高田町大字下楠田、上楠田	山林	柳河	民窯	採集 未調査	二川焼
26	バカツクラ[姥ヶ懐]窯跡	ばかつくら[うばがふところ]	みやま市	みやま市高田町上楠田字垣田	未特定	柳河		田中儀三郎による調査 採集	
27	伏部焼窯跡	ふすべ	大牟田市	大牟田市伏部	未特定	柳河		未調査	
28	黒崎焼窯跡	くろさき	大牟田市	大牟田市岬字黒崎	山林	柳河	民窯	採集	
29	赤石焼	あかいし						未調査	
30	鶴東焼							未調査	
31	縄山[水縄]焼							未調査	
32	建山焼							未調査	

豊前

1	菜園場窯跡	さえんば(さいえんば)	北九州市	北九州市小倉北区菜園場2丁目	移設保存	小倉	藩窯(お楽しみ窯)	調査済み 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1982.12. 9 ～ 1983. 9.30 1987.5.9県指定有形文化財(考古資料)	上野焼(小倉焼)
2	小倉清水焼	こくらきよみず	北九州市	北九州市小倉北区清水皿山 ※他にも高田2丁目、原町2丁目	未特定	小倉	藩窯	未調査	上野焼

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
甕・壺 陶器片、ハマ、焼土片			17世紀～18世紀前半頃	有馬豊氏が元和6年(1620)に久留米に入封した後の寛永年間(1624～1643)の書状に黒木の焼物のことが出てくる。これが釈形焼の可能性がある。「石原家記」の正徳4年(1714)12月に「釈形焼」の記事あり(星野村史)。 個人蔵の茶甕の木製容器箱蓋に元禄11年(1698)銘あり。 甕焼殿の墓の東南の傾斜地面の地に、窯は築かれていた。附近に焦土や陶具や窯を築いた煉瓦が存在していた。 甕焼山から原料白土を採る(陶器大辞典) 八女市教育委員会にて遺物を保管 陶土　甕焼山	浅野1935筑後陶瓷考 陶器大辞典 黒木町史 星野村史 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 佐々木2006 久留米市史13
陶器・磁器 食器・茶器・甕・壺・食器・酒器・神佛具など	窯3		天保6年(1835) 19世紀中頃(副島1997)	長岡鳳鳴が窯を開く。持田山の真下に窯や周囲から焼土・陶片などある。皿山地名ある。 平成6(1994)年の周辺の圃場整備の試掘調査の折に、民家の石垣にトンバイを使用した痕跡を確認した。 今回の現地踏査ではその痕跡は確認できなかった。地元の方の話では、平成24年(2012)九州北部豪雨によって斜面が崩落して無くなった。また地元の方から、周辺の畑で採集したトンバイ片を頂いた。 八女市教育委員会にて遺物を保管 陶土　持田山から下辺春へ下る地点	浅野1935筑後陶瓷考 立花町史 原色陶器大辞典 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 陶磁用語辞典
陶器片　焼土片			17世紀か	グリーンピア造成時に発見し、久留米の人たち？に調査を依頼し、窯を発掘した。遺物はその時持ち帰った模様。窯跡は残存か。 平成6年(1994)頃に窯跡があった場所に、木柱があったが今回の調査では木柱を確認できなかった。 八女市教育委員会にて遺物を保管	黒木町史
陶器 茶壺・茶甕・茶碗	直径60cmの穴あり、周囲には焼土・陶片・陶具が散見する。			窯跡は松尾神社西方「カマドコ(窯所)」にある。 他にも周辺には甕(瓶)焼・亀(窯)床・白岩・砥石場・崩竈(くえがま)・二竈(ふたかま)地名あり。窯跡推定地に山本源太氏が建てた石柱があったが、今回の調査では確認できなかった。	浅野1935筑後陶瓷考 陶器大辞典 立花町史
			17世紀か	立花宗茂が「慶長の役のあと朝鮮より伴った陶工を三潴郡浜口村(大川市小保)において窯を築かせ陶器を焼かせ」たが「間もなく製陶材料が乏しいため上妻郡北田村(立花町北山)男ノ子に居を移し、製陶に従事し」たという(立花町史上巻)	立花町史上巻
手焙、風炉、火鉢・灰器など	近年再興の蒲池焼窯西部の水田に干場の地域伝承		少なくとも慶長9年(1604)～明治40年(1907)頃までには絶える。	田中吉政が家永彦三郎を筑後国焼物司役とする。また続く柳川藩より領内焼物司役を許される。	浅野1935筑後陶瓷考
陶器 鉢・壺・甕・皿・徳利・蘭鉢・捏鉢・骨壺・鹽壺(しお？)・半胴甕・土管・耐酸瓶・茶器	階段状連房式登窯　2基	富重窯:4室残存で19m(さらに7m程、延びる可能性あり)、幅4.2　m、一室内寸で幅2.9m、高さ約2m 角窯:6室は残存で、7室　長さ22.6m(さらに10m以上の平坦地あり)、幅9.4m、入り口部分は幅1m、高さ1.3m　1室高さ2.6～2.8m、幅7.6×3.5m	明治10年(1877)～昭和19年(1944)に廃絶か	肥前から丑之助が来て始める。肥前弓野から中尾米作が来て、弓野焼の手法を伝え、二川松絵半胴甕の元祖になる。角熊五郎氏談による明治頃の二川焼(後田・中尾山・楠田東山・楠田西の山・天狗山窯場)についての記載あり。(高田町誌) 4か所について記載し、2か所は消滅、残り2ヶ所は現存する。(みやま市第10集) 大正8年(1919)の頃に開かれた下楠田字後田の富重窯(とみしげがま)の産には銘印を見る、此の窯は小代の陶工葛城と云ふ人を招きて焼き始めたものと聞く。(原色陶器大辞典) 陶器業として、甕土管を産出し、営業戸数は4戸、としている(三池郡誌1926) 浅野1938では、うどん用の捏鉢や木蝋用の蝋皿がおおいに売れたとされる。(浅野1938) みやま市教育委員会にて遺物を保管 陶土　上楠田の椎原山の麓、姥ヶ懐付近	浅野1935筑後陶瓷考 三島格・村松正一1966須恵器の窯址・小代焼と二川焼 みやま市史通史編下巻 高田町誌 みやま市第10集 原色陶器大辞典 浅野1938九州陶磁
布目瓦・須恵器壺	登窯1基　2～3基	楕円形 長さ2丈 窯室内5尺余り (上記の規模は浅野1938) 12度		瓦陶兼用窯か。 赤味のある硬い素焼きで、布目瓦・壺(原色陶器大辞典) 窯は現存せず	浅野1935筑後陶瓷考 浅野1938九州陶磁 高田町誌 原色陶器大辞典 みやま市史資料編上巻
				二川焼に似る。 「銀水村伏部にも陶器業を営むものがある」(三池郡誌1926)	浅野1935筑後陶瓷考 三池郡誌1926
磁器 茶器・食器	窯1基　焼成室11	推定長　5m以上 推定幅3.6m以上	天明年間(1781～1789)～江戸末期？ ※天明元～明治元年頃(1781～1868)	陶器に嘉作銘のものあり。 黒崎皿山の記述あり。染付を中心とした日常雑器を焼いていた民窯、数基現存する。(浅野1935・大橋2010) 窯跡は樫木木山カマドコ(窯所)の玉垂宮境内にある。(陶器大辞典) 陶土　肥前・地元と天草	浅野1935筑後陶瓷考 大橋2010東洋陶磁 第39号 大牟田市第59集 原色陶器大辞典 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集 陶器大辞典 大牟田市史上巻
					横河1935日本諸国窯一覧
					金子文夫1955筑後史学 第3号
					金子1955筑後史学 第3号
茶器					久留米市誌(中)1933

陶器・磁器 茶碗・茶入・向付・水盤・灰器、水指・蓋・焼台	割竹式登窯 焼成室4・焚口 煙道 排水溝	全長約16.6m 幅約2m 約15度	1640年代には建物が作られ削平する。 ※副島説では慶長7～元和7(1602～21)	三齋公たのしみ窯とされ(井上1943)、藩主細川忠興が尊楷(喜蔵)を召し、開窯したとされてきたが、藩主忠利時代のもので上野陶工により作られたとの説もある。 考古地磁気年代法では1630±25の年代結果が出る。これは窯が閉窯後、1640年代の建物が作られるなど2次的に比熱を受けた可能性により、考古学的な所見と時期が異なる。(北九州市埋文第40集)	井上圓蔵1943豊前上野焼研究 上村佳典1985開館十周年記念特別展　小倉藩創始　細川家の歴史展 北九州市埋文第40集 永尾正剛1990『近世近代史論集』 永尾正剛2002研究紀要10 原色陶器大辞典 副島1997国立歴史民俗博物館研究報告第73集
陶器 飴壺	平窯		文化年間(1804～1817)～幕末	『豊国名所』に小倉名物三館飴の容器が描かれる。小倉藩御膳元の御用窯。 清水皿山の記載あり。(大橋2010) 上野庭三氏が改書した文書に水野村(水野窯)より製立スとの記載あり。この水野は清水皿山を指すか。(井上1943)	『近国焼物山大概書上帳』 佐藤浩司2000研究紀要 第14号 佐藤浩司2011江戸時代の名産品と商標 大橋2010東洋陶磁 第39号 井上1943豊前上野焼研究

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
3	高保窯		北九州市	北九州市小倉北区木町皿山	未特定		民窯	未調査	上野焼
4	釜ノ口窯跡	かまのくち	福智町	田川郡福智町上野	山林	小倉	藩窯	調査済み 上野焼組合、田川郷土史会、日本陶磁協会による発掘調査が1955.5.6 ～ 5.15に行われる。	上野焼
5	カンバ窯跡	かんば	福智町	田川郡福智町上野	未特定	小倉		未調査 昭和12(1937)年2月に栃内禮次が発見	上野焼
6	皿山本窯跡	さらやまほんがま	福智町	田川郡福智町上野字皿山	竹林	小倉	藩窯	一部、調査　※測量図あり 上野焼組合、田川郷土史会、日本陶磁協会による発掘調査が1955.5.10 ～ 5.15に行われる。	上野焼
7	山ノ神森ノ下窯跡		福智町	田川郡福智町上野字皿山	未特定	小倉		表採？	上野焼
8	かくし窯跡	かくし	福智町	田川郡福智町上野皿山	未特定	小倉		未調査	上野焼
9	岩屋高麗窯跡	いわやこうらい	福智町	田川郡福智町大字弁城岩屋	山林 道路	小倉		一部、調査 上野焼組合上野焼組合及び学生 1955.5.5 ～ 5.6	上野焼
10	吉右衛門谷窯跡	きちえもんだに	福智町	田川郡福智町大字弁城	未特定	小倉	民窯？	未調査	
11	甲賀焼[幸賀窯]		福智町	田川郡福智町	未特定	小倉	民窯	未調査	
12	鳩軒	きゅうけん	香春町	田川郡香春町	未特定	小倉		未調査	
13	田香焼窯跡	でんこう	香春町	田川郡香春町高野字常安	竹林	小倉	藩窯	未調査	高野田香焼
14	田香焼窯跡	でんこう	大任町	田川郡大任町堂原	山林	小倉	藩窯	調査済み 大任町教育委員会 〔1号窯〕1994. 1.17 ～ 1997. 3.31 〔2号窯〕1994. 1.17 ～ 1997. 3.31 1976.10.1 町史跡指定　/「田香焼花筒」1976.10.1 町指定有形文化財(工芸品)	今任田香焼
15	乙子焼窯跡	おとご	みやこ町	京都郡みやこ町大字上高屋	山林	小倉	民窯	未調査	乙子焼
16	錦原皿山窯跡	にしきばるさらやま	みやこ町	京都郡みやこ町大字豊津	竹林	小倉→豊津	民窯	未調査	

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
			明治10年～30年頃？	小倉木町皿山、高保窯を記載する。吉田藤右衛門に依り焼造されたか。	井上1943豊前上野焼研究
陶器 擂鉢・壺・片口・徳利・土瓶・小皿・鉢・水指・茶碗・茶入・花入・杓立・灰器・建水・型物	階段状連房式登窯 焼成室15・胴木間（焚口）煙道	全長41m 幅2.5～3m 10～18度	慶長7年（1602）に尊楷一族により、開窯。※慶長6年～寛永9年（1601～1632）説あり。（九州陶磁文化館2010）	上野焼窯跡（田川郡赤池町上野）として昭和30年（1955.5.27）昭和32年（1957.8.13）に史跡の仮指定がなされたが、結局指定には至らなかった。 調査履歴は（佐藤1955）による。 佐藤によると、昭和4年（1929）に金原京一（陶片）、昭和11年（1936）に栃内禮次、昭和13年（1938）に井上圓蔵・美和弥之助・佐藤進三（井上・美和は皿山窯を主に掘る）、昭和14年（1939）に鈴木恵一・坂東貫山・佐藤進三・出口繁数、昭和17年（1942）に末松主税が調査する。（佐藤1955）	佐藤進三1955陶説28 佐藤ほか1955上野古窯調査報告書 小林省吾2006県史だより第124号 九州陶磁文化館2010珠玉の九州陶磁展
茶碗・皿・片口・鉢・擂鉢・瓶				里の人が五ツ窯と昔から言い伝えている。 佐藤進三によると 昭和30年（1955）時には窯跡はなく、陶片の散布もほとんどない。	井上1943豊前上野焼研究 佐藤ほか1955上野古窯調査報告書 赤池町史1977
物原から徳利・打皿・油壺・油皿・碗・擂鉢・瓶・土瓶（井上1943）			元和8年（1622）～寛永元年（1624）から明治4年（1871）	井上圓蔵・美和弥之助らが外郭及び物原3か所を掘る。 上野皿山の記載あり。（大橋2010） 主に小笠原藩時代に操業した窯。 ※窯跡北側に香月氏の出城があり、そこを地元が城山と呼び、そこから城山窯という名称がうまれる。 この調査より前に、昭和4年（1929）に金原京一（陶片）、昭和11年（1936）に栃内禮次、昭和13年（1938）に井上圓蔵・美和弥之助・佐藤進三（井上・美和は皿山窯を主に掘る）、昭和14年（1939）に鈴木恵一・坂東貫山・佐藤進三・出口繁数、昭和17年（1942）に末松主税が調査する。（佐藤1955）	佐藤1955陶説28 佐藤ほか1955上野古窯調査報告書 小林2006県史だより 第124号 大橋2010東洋陶磁 第39号 福智町2017豊前小倉藩窯上野焼展図録 井上1943豊前上野焼研究
碗・擂鉢・瓶・片口・花生・筒花生			文政12年（1829）～天保（1831～1845）	渡家文書に「山の神森之下小釜練かへ年號學」に記録あり。	井上1943豊前上野焼研究 小林2006県史だより第124号
浅鉢				土地は十時氏所有、十時器八郎甫春の一人娘で十時フサノ氏の話では、急に御用を仰せつかった場合のために築いた窯とのこと。	井上1943豊前上野焼研究 赤池町史1977
表採？で瓶・擂鉢・壺・皿・碗・徳利か（井上1943）			慶長12年（1607）～元和8年（1622）から寛永年間（1624～1644）	別名唐人窯。井上が窯跡をつきとめ、上野焼組合及び学生らにより、物原の一部、発掘を行う。開窯後から藩主細川氏が肥後に移るまでの間に操業した窯。 元和8年「田川郡家入畜御改帳」には、辨城村焼物山に「焼物師五人。同賣子十一人」と記載する。（井上1943） ※1955年の調査より前の昭和4年（1929）に金原京一（陶片）、昭和11年（1936）に栃内禮次、昭和13年（1938）に井上圓蔵・美和弥之助・佐藤進三（井上・美和は皿山窯を主に掘る）、昭和14年（1939）に鈴木恵一・坂東貫山・佐藤進三・出口繁数、昭和17年（1942）に末松主税が調査する。（佐藤1955）	佐藤1955陶説 28 佐藤ほか1955上野古窯調査報告書 小林2006県史だより第124号 福智町2017豊前小倉藩窯上野焼展図録 井上1943豊前上野焼研究
				吉ヱ衛門窯とし、唐人窯（岩谷高麗窯）が廃絶後のものか。（横山1958） 昭和24・5年（1949・1950）頃に高鶴窯で学び、京都の朝日焼で修業した永末博美が創めた窯。（福岡市観光課1973）	横山群1958郷土田川No.13 小林2006県史だより第124号 福岡市観光課1973福岡市の史話と観光 はかた
			明治末～大正元年（1912）	辨城村畑、幸賀窯を記す。（井上1943） 一代窯で、皆川小一郎が経営する。作風は上野を模倣とする。 ※幸賀窯と甲賀焼との関連ありか？	井上1943豊前上野焼研究 横山1958郷土田川 No.13
			寛政年間（1789～1801） 享和年間（1801～1804）（横河1935）	銘款。エドワード＝モースがこの銘款のある深皿を寛政の作とし、豊前国香春村産とする。	原色陶器大辞典 横河1935日本諸国窯一覧
陶器？ 碗・皿・徳利・水甕・花筒・茶碗・湯呑・駒犬	窯跡 1基・物原		天保年間（1831～1845）～明治	物原が一部残るのみで、窯本体は消滅する。 奥田儀三郎が分家して、天保5年（1835）にはすでに開窯か。田香焼が廃窯後は山岡徹山親子が香春焼を築窯する。（香春町郷土史会1996・2003） 『豊国名所』に田香焼の花器・鉢・水注が描かれている。 現地踏査では、長さ約22m、幅約7mの緩斜面を確認した。南西側の下る急斜面や池が物原にあたり、遺物片が散在する。周辺の墓地には奥田儀三郎の墓がある。	大任町第6集 香春町第12集 香春町郷土史会1996・2003郷土史誌かわら第44・56集 原色陶器大辞典
陶器 ・半磁器・磁器 碗・皿・鉢・花生・甕・徳利・片口・擂鉢・灯明台・おろし・瓦・植木鉢・急須・水指・花器	階段状連房式登窯 2基 各窯1基 焼成室6、6・7物原2ヶ所（大橋2010）	1号窯 全長12～15m、幅1.95～3.4m、胴木間、焼成室4～5、13度、造り替えあり・2号窯 全長10.5m、幅2.6～3.1m、胴木間、焚口、焼成室3、11度	寛政年間（1789～1801）～明治維新頃	地磁気年代測定により、1号窯1810年±25、2号窯1820年±35という結果が出る。従来、今任田香焼は上野焼の十時甫紹の弟子、啓吉が文政11（1828）年に開窯したとされてきたが、寛政8年（1796）成立の『近国焼物山大概書上帳』に記載があるので、寛政年間に遡るか。なお焼物には窯印が入れられる。 今藤（今任）皿山・藤原（道原・堂原）皿山の記載あり。（大橋2010） 『豊国名所』に田香焼の花器・鉢・水注が描かれる。	大任町誌上巻 大任町第6集 大橋2010東洋陶磁第39号 原色陶器大辞典
陶器・磁器 茶碗・鉢・窯道具 碗・鉢・ハマ・トチン	階段状連房式登窯？ ※焚口は削平されるが数室・物原残存か		江戸時代	帝釈天山麓に所在し、遺物の出土がある。近世の操業免許記録あり。 藩の奨励策に応じた開窯か（国作手永大庄屋日記 安政5年（1858）. 9. 21条） みやこ町歴史民俗博物館にて遺物を保管	犀川町誌 犀川町第3集 犀川町第8集 みやこ町第6集 郷土誌さいがわ創刊号
瓦散在			江戸後期？～明治	昭和30（1955）年、豊津町遺跡調査で発見。錦町と石走り西山麓に所在とするが遺存は錦町のみ。 石走り南遺跡として周知化。 明治2年（1869）豊津開府の需要で瓦を焼いたようで小片散布。	豊津町誌 豊津町第25集 みやこ町第6集 豊津町史

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
17	添田皿山		添田町	田川郡添田町	未特定	小倉		未調査	
18	唐原焼窯跡	とうばる	上毛町	築上郡上毛町上唐原	池	中津		大正15年(1926)8月1日　玉泉大梁 昭和11年(1936)5月31日 玉泉大梁・高崎正戸・野村道治ら 1974.11.25 町史跡指定	唐原焼
19	常山焼	じょうざん			未特定			未調査	
20	太郎助楽焼	たろすけらく	北九州市	北九州市	未特定	小倉		未調査	
21	水町焼	みずまち	北九州市	北九州市小倉南区水町	未特定	小倉	民窯	未調査	

【参考】
筑前

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
1	樺島製陶所		福岡市	福岡市早良区西新町		福岡		未調査	
2	亀井陶器製造工場		福岡市	福岡市早良区西新町		福岡		未調査	
3	山村製陶所		福岡市	福岡市南区野間皿山		福岡		未調査	
4	藤野製陶工場		福岡市	福岡市南区野間皿山		福岡		未調査	
5	原製陶所		福岡市	福岡市早良区西新町		福岡		未調査	
6	岡本素焼物製造所		福岡市	福岡市南区野間皿山		福岡		未調査	
7	高尾素焼物製造所		福岡市	福岡市南区野間皿山		福岡		未調査	
8	七輪ほか		福岡市	福岡市中央区住吉		福岡		未調査	
9	鷺谷焼	さぎたに	福岡市	福岡市中央区伊崎浦		福岡	民窯	未調査	
10	土器	かわらけ	福岡市	福岡市早良区飯盛		福岡		未調査	
11	土器	かわらけ	福岡市	福岡市博多区		福岡		未調査	
12	西新陶管製造所		福岡市	福岡市早良区西新町		福岡		未調査	
13	伊佐陶管製造所		福岡市	福岡市早良区西新町		福岡		未調査	
14	高取土管		福岡市	福岡市早良区西新町		福岡		未調査	
15	〔土管窯〕		古賀市	古賀市古賀停車場附近		福岡		未調査	
16	〔土管窯〕		筑紫野市	筑紫野市二日市		福岡		未調査	
17	〔土管窯〕		糸島市	糸島市		福岡		未調査	
18	折尾窯	おりお	北九州市	北九州市八幡西区		福岡	民窯	未調査	
19	土器	かわらけ	朝倉市	朝倉市甘木		福岡		未調査	
20	土器	かわらけ	古賀市	古賀市花鶴		福岡		未調査	
21	土器田	かわらけ	宗像市	宗像市大井		福岡		未調査	
22	日本耐火煉瓦株式会社戸畑工場		北九州市	北九州市戸畑区都島通		福岡		未調査	
23	黒崎窯業株式会社		北九州市	北九州市八幡西区藤田		福岡		未調査	
24	東筑煉瓦工場		北九州市？	北九州市若松区中川		福岡		未調査	

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
					大橋2010東洋陶磁第39号
	階段状連房式登窯？		江戸前期? 幕末頃（佐藤1955）	上唐原と下唐原の境の大池（ランボ池）の東方を皿山といい、登窯あり。 高取八山の最初の窯跡か。付近一帯は皿山と呼ばれる。 『百留居屋敷遺跡』に唐原焼窯跡の遺物を掲載する。 長さ約9m以上、幅2m以上の窯跡の痕跡あり 九州大学玉泉館資料として遺物を保管 九州歴史資料館にて遺物を保管	築上郡史下巻 大平村の文化財 大平村誌 福岡日日新聞（S11.6.2） 佐藤1955陶説 28 『上唐原稲本屋敷遺跡』 『百留居屋敷遺跡』
			天保頃	上野焼の影響を受けた窯、銘常山と日本諸国窯一覧に記載する。	横河1935日本諸国窯一覧
			慶長年間（1596～1615）～寛永年間（1624～1644） 寛永頃（横河1935）	太郎介が製した茶器。太郎介は上野の工人甫久の弟子。世間では太郎介焼といって賞綱。 細川三齋候家臣向井太郎助の楽焼。（横河1935） 「三齋侯の時向太郎介と申茶人有之」とあって菜園場窯のことか？（本朝陶器攷證） 元和寛永のころ、豊前の人・向井太郎助が、小倉窯で領主・細川三斎公の命によりもっぱら風炉、水指を焼いた。そば系の褐黄釉を得意としたのでこの釉を太郎助釉といった。（陶磁用語辞典）	原色陶器大辞典 横河1935日本諸国窯一覧 陶器類集 本朝陶器攷證 陶磁用語辞典
			明治8年（1875）～（原色陶器大辞典）	吉田彦六が創業（原色陶器大辞典） 「企救郡水町村の吉田彦六は、同村高坊の土と同郡上城村の白土とを取り、少許の砂土を混じて、黒釉の陶器を製す。」（塩田1922）	横河1935日本諸国窯一覧 原色陶器大辞典 塩田1922日本近世窯業史

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
植木鉢			慶長元年（1595）開業	代表者は樺島喜三郎	全国工場通覧
植木鉢			享保4年（1719）開業	代表者は亀井源太郎	全国工場通覧
植木鉢			明治28年（1895）10月開業	代表者は小林義雄	全国工場通覧
植木鉢			明治33年（1900）8月開業	代表者は藤野新三郎	全国工場通覧
植木鉢			大正元年（1912）9月開業	代表者は原幸六	全国工場通覧
植木鉢			大正2年（1913）11月開業	代表者は岡本金蔵	全国工場通覧
植木鉢			大正12年（1923）3月開業	代表者は高尾茂吉	全国工場通覧
七輪・土瓶・土鍋・貯金瓶・ゴマイリ（手炮烙）・火消壺・茶風呂・火鉢・土管・米搗臼・瓶掛・水瓶				原土は別府産を主とし、その他に野間土・五十川土、麦野土を使用。福田工場登窯は巣焼室をあわせて5室あり	工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
煎茶器・花器			明治末～大正初め	平田鷺谷のつくった陶器。鷺谷は元伊予国の人、二六焼窯で陶法を学び、福岡に来て陶器を製した。病を得て窯を廃したのちは山口県に去った。当時の弟子2・3人がその後陶器を作っている。	原色陶器大辞典
				「早良郡飯盛村にて作る所の土器尤よし」との記載あり（筑前国続風土記）。 「本編に早良郡飯盛村の製佳品なるよし見え侍れとも、今は製せす。かはらけ屋敷といふ名のみ残れる」（筑前国続風土記附録）	筑前國続風土記 筑前國続風土記附録下巻
				「博多及夜須郡甘木村にも作るといへとも、飯盛の製に及はす」との記載あり（筑前国続風土記）。	筑前國続風土記 筑前國続風土記附録下巻
陶管			明治40年（1907）2月開業	代表者は樺島喜三郎	全国工場通覧
陶管			明治43年（1910）3月開業	代表者は伊佐理之吉	全国工場通覧
高取土管				北村彌一郎が大正2年（1913）3月に調査見聞。製造業者は6戸で、西新町土管製造所（明治20年（1887）7月創始）・亀井・早川・樺島・伊佐・原。窯は登窯と角形石炭窯の2種あり。登窯は原のみで他は石炭窯。石炭窯は明治44年末に常滑より伝習した	工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
土管				北村彌一郎が大正2年（1913）3月に高取土管を調査見聞した際の記録	工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
土管				北村彌一郎が大正2年（1913）3月に高取土管を調査見聞した際の記録	工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
土管				北村彌一郎が大正2年（1913）3月に高取土管を調査見聞した際の記録	工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
土管			明治30年（1897）～明治末年	土管を焼いていた窯。大正初年（1912）に汽車用の粗土瓶を焼成する。	陶器大辞典 原色陶器大辞典1972 工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
				「博多及夜須郡甘木村にも作るといへとも、飯盛の製に及はす」（筑前国続風土記） 「近年裏糟屋郡古賀村の内花津留及夜須郡甘木町にて多く製す。就中花津留村の産好し。」との記載あり（筑前国続風土記附録）	筑前國続風土記 筑前國続風土記附録下巻
				「近年裏糟屋郡古賀村の内花津留及夜須郡甘木町にて多く製す。就中花津留村の産好し。」（筑前国続風土記附録） 陶土　鹿部村の内ほり川という所（筑前国続風土記附録）	筑前國続風土記附録下巻
				「土器田（カハラケ）と云地有。宗像社の祭の土器を製せし所也と云。」（筑前国続風土記拾遺） 村ノ北一町餘二アル田字ナリ。宗像神社の祭禮二用ル土器ヲ製セシ所ト云。※福岡懸宗像郡誌上巻に記載あり。	筑前国続風土記拾遺 福岡県地理全誌 福岡懸宗像郡誌上巻
耐火煉瓦			大正5年（1916）12月開業	代表者は吉武小三郎	全国工場通覧
碍子・耐火煉瓦			大正8年（1919）6月開業	代表者は高良淳	全国工場通覧
煉瓦			大正11年（1922）3月開業	代表者は松崎フサ	全国工場通覧

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
25	戸畑煉瓦製造所		北九州市	北九州市戸畑区戸畑		福岡		未調査	
26	長者原煉瓦製造所	ちょうじゃばるれんがせいぞうしょ？	粕屋町	糟屋郡粕屋町仲原		福岡		未調査	
27	亀山煉瓦工場	かめやまれんが	志免町	糟屋郡志免町（糟屋郡志免村別府）		福岡		未調査	
28	松隈煉瓦工場		嘉麻市	嘉穂郡碓井村		福岡		未調査	
29	田藤赤煉瓦工場		飯塚市	嘉穂郡穂波村		福岡		未調査	
30	中川煉瓦工場		若宮市	鞍手郡宮田町		福岡		未調査	
31	電気興業所名島工場		福岡市	糟屋郡多々良村		福岡		未調査	
32	瓦［芦屋瓦］	かわら（あしやがわら）	芦屋町	遠賀郡芦屋町		福岡	民窯	未調査	
33	佐々木瓦製造工場	ささきかわらせいぞうこうじょう	芦屋町	遠賀郡芦屋町		福岡	民窯	未調査	
34	濱野瓦製造工場	はまのかわらせいぞうこうじょう	芦屋町	遠賀郡芦屋町		福岡	民窯	未調査	
35	佐多瓦製造工場	さたかわらせいぞうこうじょう	芦屋町	遠賀郡芦屋町		福岡	民窯	未調査	
36	井澤瓦製造工場	いざわかわらせいぞうこうじょう	芦屋町	遠賀郡芦屋町		福岡	民窯	未調査	
37	岡村瓦製造工場	おかむらかわらせいぞうこうじょう	芦屋町	遠賀郡芦屋町		福岡	民窯	未調査	
38	和田瓦製造工場	わだかわらせいぞうこうじょう	芦屋町	遠賀郡芦屋町		福岡	民窯	未調査	
39	矢野瓦製造工場	やのかわらせいぞうこうじょう	芦屋町	遠賀郡芦屋町		福岡	民窯	未調査	
40	瓦	かわら	太宰府市	太宰府市五条	宅地	福岡	民窯	未調査	
41	瓦	かわら	太宰府市	太宰府市五条	宅地	福岡	民窯	大宰府条坊跡100次調査	
42	瓦	かわら	太宰府市	太宰府市宰府1丁目	宅地	福岡	民窯	未調査	
43	瓦	かわら	太宰府市	太宰府市国分1丁目	宅地	福岡	民窯	未調査	
44	瓦	かわら	太宰府市	太宰府市五条？		福岡	民窯	未調査	
45	瓦焼窯	かわらやきかま	遠賀町	遠賀郡遠賀町大字別府、浅木		福岡	民窯	未調査	
46	瓦焼窯	かわらやきかま	遠賀町	遠賀郡遠賀町		福岡	民窯	未調査	
47	瓦焼窯	かわらやきかま	遠賀町	遠賀郡遠賀町浅木		福岡	民窯	未調査	
48	瓦焼窯	かわらやきかま	遠賀町	遠賀郡遠賀町大字鬼津、島津、別府、木守		福岡	民窯	未調査	
49	瓦	かわら	福岡市	福岡市博多区		福岡		未調査	
50	瓦	かわら	福岡市	福岡市早良区西新町		福岡		未調査	
51	瓦	かわら	福岡市	福岡市東区浜男		福岡		未調査	
52	瓦町陶		福岡市	福岡市博多区祇園町		福岡		未調査	
53	瓦	かわら	福岡市	福岡市西区今宿		福岡		未調査	
54	瓦町陶		福岡市	福岡市東区浜男		福岡		未調査	
55	箕原瓦製造所		福岡市	福岡市東区多々良		福岡			
56	副田瓦工場	そえだかわらこうじょう	水巻町	遠賀郡水巻町吉田		福岡		未調査	
57	瓦工場	かわらこうじょう	水巻町	遠賀郡水巻町猪熊		福岡		未調査	
58	瓦工場	かわらこうじょう	水巻町	遠賀郡水巻町杁		福岡		未調査	
59	瓦工場	かわらこうじょう	水巻町	遠賀郡水巻町下二		福岡		未調査	
60	瓦	かわら	朝倉市	朝倉市甘木		福岡		未調査	
61	瓦	かわら	朝倉市	朝倉市久喜宮		福岡		未調査	
62	瓦町陶		朝倉市	朝倉市甘木		福岡		未調査	

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
耐火煉瓦			明治36年(1903)5月開業	代表者は林幸男	全国工場通覧
煉瓦				持主は井上理三。創業は明治30年(1897)4月(農商務省「工場通覧」)	農商務省1904工場通覧
煉瓦				持主は中村参一。創業は明治26年(1893)9月(農商務省「工場通覧」)	農商務省1904工場通覧
煉瓦			明治28年(1895)5月開業	代表者は松隈重兵衛	全国工場通覧
煉瓦			明治30年(1897)3月開業	代表者は田中藤兵衛	全国工場通覧
煉瓦・瓦			明治42年(1909)3月開業	代表者は中川初太郎	全国工場通覧
煉瓦			大正10年(1921)4月開業	代表者は無記名	全国工場通覧
瓦				瓦製造業は大正11年(1922)度に13工場を数え、生産高は25,000坪	刀根為次郎『北九州の名物 芦屋の浜』
屋根瓦			明治35年(1902)8月開業	代表者は佐々木熊市	全国工場通覧
屋根瓦			明治38年(1905)1月開業	代表者は濱野庄次郎	全国工場通覧
屋根瓦			大正4年(1915)10月開業	代表者は佐多房太郎	全国工場通覧
屋根瓦			大正6年(1917)1月開業	代表者は井澤次郎吉	全国工場通覧
屋根瓦			大正9年(1920)12月開業	代表者は岡村口市	全国工場通覧
屋根瓦			大正15年(1926)4月開業	代表者は和田乙作	全国工場通覧
屋根瓦			昭和2年(1927)4月開業	代表者は矢野清	全国工場通覧
瓦			江戸～昭和30年代	平井家経営の瓦窯	筑前国続風土記附録上巻 平井家文書(六座文書目録)
瓦	窯の廃棄土坑	未報告	江戸後期	平井家経営の関連瓦窯施設	
瓦			江戸～近代？	太宰府天満宮関連施設の所用瓦「太宰府/れんがや町/石川琢磨」銘瓦	「遺跡だより」第21号1993太宰府市教育委員会
			近現代	「洗出市川製」銘瓦	「遺跡だより」第21号1993太宰府市教育委員会
			江戸	「宰府忠七」銘瓦	「遺跡だより」第21号1993太宰府市教育委員会
瓦				瓦の生産量と所在地、製作者のみ記され詳細は不明別府「瓦10,700枚　別府　森大四郎製」 下底井野「瓦120,000枚　下底井野　柳井勝次郎製」	福岡県地理全誌 遠賀町誌
瓦				瓦職人の戸数、人員、一人又は一戸の労働日数、総日数、一人又は一戸の賃金、賃金高のみ記載され、他の詳細は不明。 「瓦製造　10戸　34人　1人226日　7700日　450円　3,465,000円」	島門村是明治40年(1907)
瓦				瓦職人の戸数、労働日数、労働総日数、賃金、賃金高の記載のみ記載され、他は詳細は不明。「瓦職　三戸　200日　600日　750円　450,000円」	浅木村是明治45年(1912)
瓦				昭和15年(1940)頃の「北九州地方瓦工業組合名簿」に鬼津2軒、島津8軒、別府7軒、木守1軒の瓦工場があったと記され、主に炭鉱住宅の屋根瓦の製造を行っていた。	遠賀町誌 ふるさと
瓦				「博多に瓦町とて、瓦工の集り住る町一坊あり。屋瓦及もろもろの瓦器を作る」(筑前国続風土記)。	筑前国続風土記 筑前国続風土記附録
瓦				瓦師ありとの記載	筑前国続風土記附録下巻
瓦				瓦師ありとの記載	筑前国続風土記附録下巻
				「瓦器[炮轆師といふ]を製する家六七戸あり。火鉢・火ちりん・手爐等数品を製す。就中宗七と云者良工なり。京都深草の製にも勝れりと云」(筑前国続風土記附録)	筑前国続風土記附録下巻
瓦				「夜須郡甘木、糟屋郡青柳、宗像郡赤馬なと所々にて作る。又近年志摩郡今宿にて作る」(筑前国続風土記) 「又瓦工三戸あり。其製殊に佳なり」(筑前国続風土記拾遺)	筑前国続風土記 筑前国続風土記附録下巻 筑前国続風土記拾遺
瓦				「瓦器類を製すれとも、博多の瓦器に及ハす」(筑前国続風土記附録)	筑前国続風土記附録下巻
瓦			明治29年(1896)12月	持主は簑原甚作。創業は明治29年12月(農商務省「工場通覧」)	農商務省1904工場通覧
黒色素焼瓦			嘉永4年(1851)4月開業	代表者は副田口 「瓦五千枚添田伊平製」と水巻の産物としてあげている。幕末から明治初年の操業で吉田御輪地で石炭を利用して始めたものらしく、後に吉田字新吾山の付近でもはじめたが、現在(昭和30年代)でも工場があるとの記載がありこの瓦工場を差している可能性がある。	全国工場通覧 水巻町誌 福岡県地理全誌
瓦					水巻町誌
瓦					水巻町誌
瓦					水巻町誌
				「夜須郡甘木、糟屋郡青柳、宗像郡赤馬なと所々にて作る。又近年志摩郡今宿にて作る」(筑前国続風土記)	筑前国続風土記 筑前国続風土記附録下巻
瓦				瓦師ありとの記載	筑前国続風土記附録下巻
瓦				「瓦器類を製すれとも、博多の瓦器に及ハす」(筑前国続風土記附録)	筑前国続風土記附録下巻

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
63	瓦	かわら	古賀市	古賀市青柳		福岡		未調査	
64	瓦	かわら	古賀市	古賀市古賀		福岡		未調査	
65	仲原製瓦工場		糸島市	糸島市前原		福岡		未調査	
66	甲山製瓦工場		糸島市	糸島市波多江		福岡		未調査	
67	瓦	かわら	飯塚市	飯塚市飯塚		福岡		未調査	
68	瓦	かわら	宗像市	宗像市赤馬		福岡		未調査	
69	瓦	かわら	粕屋町	糟屋郡粕屋町仲原・大川		福岡		未調査	
70	長瓦製造工場		久山町	糟屋郡久山町山田		福岡		未調査	
71	瓦	かわら	北九州市	北九州市八幡西区折尾		福岡		未調査	
72	瓦	かわら	大野城市	大野城市白木原		福岡	民窯	未調査	

筑後

1	巣焼平		八女市	八女市星野村巣焼平		久留米		未調査	
2	小野陶管製造所		久留米市？	久留米市小森野？				未調査	
3	三池製錬所耐火煉瓦工場		大牟田市	大牟田市新町				未調査	
4	松田煉瓦製造所	まつだれんがせいぞうしょ	久留米市	久留米市梅満町		久留米		未調査	
5	荒木窯業株式会社	あらきようぎょう	久留米市	久留米市荒木町	消滅	久留米	民窯	未調査	
6	荒木煉瓦株式会社	あらきれんがかぶしきかいしゃ	久留米市	久留米市荒木町	消滅	久留米	民窯	未調査	
7	東亜窯業株式会社	とうあようぎょう	久留米市	久留米市荒木町	消滅	久留米市	民窯	未調査	
8	安徳煉瓦工場	あんとく	久留米市	久留米市中町	消滅？	久留米	民窯	未調査	
9	九州窯業株式会社荒木工業	きゅうしゅうようぎょう　あらき	久留米市	久留米市荒木町	消滅	久留米	民窯	未調査	
10	肥筑窯業株式会社	ひちくようぎょう	久留米市	久留米市城島町青木		久留米	民窯	未調査	
11	藤木煉瓦工場		柳川市	柳川市三橋町		柳河		未調査	
12	昭和窯業合資会社煉瓦工場		みやま市	みやま市瀬高町		柳河		未調査	
13	高橋煉瓦工場		みやま市	みやま市瀬高町		柳河		未調査	
14	早鐘煉瓦工場		大牟田市	大牟田市駛馬		柳河		未調査	
15	三井鉱山株式会社三池製陶所煉瓦工場		大牟田市	大牟田市新開町		柳河		未調査	
16	久留米藩御用瓦窯	くるめはんごようかわらかま	久留米市	久留米市瀬ノ下町	消滅	久留米	藩窯	未調査	
17	日渡瓦窯跡	ひわたしかわらかまあと	久留米市	久留米市国分町日渡	消滅	久留米	民窯	未調査	
18	善導寺瓦窯（鬼塚家）	ぜんどうじがわら（おにづかけ）	久留米市	久留米市善導寺町	消滅	久留米	民窯	未調査	
19	善導寺瓦窯（久保山家）	ぜんどうじがわら（くぼやまけ）	久留米市	久留米市善導寺町	消滅	久留米	民窯	未調査	
20	吉田瓦製造所	よしだかわらせいぞうしょ	久留米市	久留米市善導寺町		久留米		未調査	
21	梯瓦製造工場	はしごかわらせいぞうしょ	久留米市	久留米市犬塚		久留米		未調査	
22	城島瓦	じょうじまかわら	久留米市	久留米市城島町		久留米	民窯	未調査	
23	荒巻瓦工場（瓦製造所）	あらまきかわらこうじょう	久留米市	久留米市城島町城島		久留米	民窯	未調査	

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
瓦				「夜須郡甘木、糟屋郡青柳、宗像郡赤馬なと所々にて作る。又近年志摩郡今宿にて作る」(筑前国続風土記)	筑前国続風土記
瓦				森與三瓦屋・森七助瓦屋・長崎兵三郎瓦屋・姫路屋瓦屋・三輪瓦屋・長峯瓦屋・渡源一郎瓦屋・古賀合資会社瓦屋・山片瓦屋など	渋田喬2009近代化に翔けた人間模様
黒色素焼瓦			明治23年(1890)3月開業	代表者は仲原又次郎	全国工場通覧
唐草瓦・平瓦・丸瓦			明治27年(1894)2月開業	代表者は甲山一男	全国工場通覧
瓦				瓦師ありとの記載	筑前国続風土記附録下巻
瓦				「夜須郡甘木、糟屋郡青柳、宗像郡赤馬なと所々にて作る。又近年志摩郡今宿にて作る」(筑前国続風土記)	筑前国続風土記 筑前国続風土記附録下巻
瓦				「仲原・大川両村は、むかしから良質の粘土が産出し瓦製造業がさかんでした。・・・仲原村では、・・瓦屋親方(製造業者)が十数軒あり・・、大川村でも・・瓦、煉瓦工場がさかんでしたが現在はその跡さえみることができません。」として、大川村の8軒のの概要が示されている(粕屋町誌)	粕屋町誌
屋根瓦			明治40年(1907)4月開業	代表者は長熊吉	全国工場通覧
瓦				窯は煉瓦をもってつくる。窯数3基。燃料は石炭	工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
瓦	不明		近代(明治～大正)	「大野城市史」の中に、聞き取り調査の結果、大正時代に白木原村に瓦屋があったという記述あり。後原遺跡4次調査SP03出土遺物の中に「白木原村新七製造」銘の桟瓦あり。	大野城市1990『大野城市史　民俗編』、大野城市教育委員会1998『後原遺跡Ⅰ』(大野城市文化財調査報告書第53集)

				「巣焼」は「素焼」の転化か	浅野1935筑後陶瓷考 陶磁大辞典
陶管			大正13年(1924)8月開業	代表者は大塚作次	全国工場通覧
磁管			大正7年(1918)2月開業	代表者は小田清	全国工場通覧
煉瓦			大正13年(1924)12月開業	代表者は松田卯太郎	全国工場通覧
煉瓦・瓦その他			大正9年(1920)1月26日～ 全国工場通覧では大正9年2月開業とする	資本金30万円　職工38名 戦後、嘉麻市山田に工場を設置　平成26年(2014)3月28日に営業停止し自己破産	福岡県三潴郡誌 全国工場通覧
煉瓦			大正6年(1917)7月～	資本金1万円　大正10年(1921)には80万個を製造	福岡県三潴郡誌
煉瓦			大正9年(1920)1月26日～	資本金3万5千円 全国工場通覧では東亜窯業大運工場とし、代表者は古賀駒次とする	福岡県三潴郡誌 全国工場通覧
煉瓦と瓦			大正時代？	大正13年(1924)時点で生産額13,840円。資本金10,000円	梅崎次義1924 久留米市編入当時の国分町
煉瓦その他			大正7年(1918)8月1日～	職工45名	福岡県三潴郡誌
煉瓦			大正7年(1918)12月30日設立	資本金5万円	福岡県三潴郡誌
普通煉瓦			大正12年(1923)11月開業	代表者は藤木村男	全国工場通覧
普通煉瓦			大正13年(1924)11月開業	代表者は薮田亀太郎	全国工場通覧
普通煉瓦			大正15年(1926)3月開業	代表者は高橋周造	全国工場通覧
煉瓦			大正12年(1923)3月開業	代表者は江口政平	全国工場通覧
耐火煉瓦			大正7年(1918)11月開業	代表者は山田清	全国工場通覧
瓦類			元和7(1621)年～不明	丹波の瓦職人三牧吉右衛門が有馬家に随伴し久留米へ移住。御用瓦師として京ノ隈小松原に瓦焼場所を与えられ蔵米25石支給。享保5年(1720)より三人扶持、銀150目支給。久留米市教委が保存する久留米城多門櫓石段出土の文政6年(1823)4月製釘抜文鬼瓦の銘文によれば、三牧七左衛門が野中村「御用瓦場」で制作。	古賀幸雄1975
鬼瓦			江戸時代後期？	三柏文鬼瓦銘に「安政五年八月上旬　国分村日渡江淵嘉衛門」と銘文あり。江渕家は御用瓦師三牧家の分家筋。江渕家が営む瓦窯？	久留米市教委蔵三柏文鬼瓦銘文
丸瓦			不明～明治末廃業	善道寺近辺に窯場・主に大本山善道寺用の瓦を製造。製品の一部には「善道寺鬼塚」楕円印文瓦あり。	善道寺修理報告書(大庫裏・釜屋編)2011
			明治33年(1900)以後～昭和13年(1938)頃	鬼塚家が廃業したため、弟子の久保山惣太郎が跡を継ぐ。市立善道寺保育園の南駐車場に窯場があった。製品の軒瓦には瓦当面に「久保山」印を押印するものあり。	大本山善道寺報告書(大庫裏・釜屋編)2011
瓦				持主は吉田恒吉。創業は慶応元年(1865)3月(農商務省「工場通覧」)	農商務省1904工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正12年(1923)7月開業	代表者は梯潔	全国工場通覧
	近代以降石炭窯		江戸時代～	江戸時代は大庄屋大石家、内野村庄屋後藤家が製造を許可され生産。大石家が宝暦一揆の処分により追放されると荒巻家が跡を継ぐ。田地の粘土採取規制が消滅した明治以降に業者が増加し、大正8年(1919)には1186軒の製造業者が1500万枚を製造、69万円の販売額であった。	福岡県三潴郡誌 城島町誌
瓦類(黒色素焼物)			天保2年(1831)3月～ [北村彌一郎窯業全集第3巻では天保11年(1840)3月創業]	大正10年(1921)には13名の職工を擁し、31万枚の瓦を生産。北村彌一郎窯業全集第3巻では原土は生岩(三潴)、福土(大木)、大依(城島)及び佐賀県の迎島(千代田)・東津(三根)。持主は荒巻貞次郎。創業は明治23年(1890)7月(農商務省「工場通覧」)城島町 陶土　北村彌一郎窯業全集第3巻では5か所ほど	福岡県三潴郡誌 工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929 農商務省1904工場通覧

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
24	二ノ宮瓦製造所	にのみやかわらせいぞうしょ	久留米市	久留米市城島町大字内野		久留米		未調査	
25	市川清製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
26	池田製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
27	的場瓦製造工場	まとばかわらせいぞうこうじょう	久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
28	田中瓦製造工場	たなかかわらせいぞうこうじょう	久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
29	今村幾瓦製造工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
30	中村瓦製造工場	なかむらかわらせいぞうこうじょう	久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
31	今村津瓦製造工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
32	堀江瓦製造工場	ほりえかわらせいぞうこうじょう	久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
33	田中虎製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
34	今村作瓦製造工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
35	今村栄瓦製造工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
36	権藤製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
37	今村甚瓦製造工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
38	坂井勝瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
39	原倉瓦製造工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
40	楢林製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
41	田所筆瓦工場		久留米市	久留米市城島町江上		久留米		未調査	
42	坂井種瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
43	池田瓦工場	いけだかわらこうじょう	久留米市	久留米市城島町江上		久留米		未調査	
44	市川卯製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
45	江藤鹿製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
46	古賀菊製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
47	古賀米製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
48	古賀市製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
49	原市製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
50	緒方製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
51	印(御)船製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
52	下坂瓦製造工場	しもさかかわらせいぞうこうじょう	久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
53	中村勘製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
54	田中製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
55	森山瓦製造工場	もりやまかわらせいぞうこうじょう	久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
56	島瓦製造工場	しまかわらせいぞうこうじょう	久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
57	原志製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
58	今村亀製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
59	澁田末瓦工場		久留米市	久留米市城島町江上		久留米		未調査	
60	田中熊瓦工場		久留米市	久留米市城島町江上		久留米		未調査	
61	中園製瓦工場		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
62	田中商店瓦工場	たなかしょうてんかわらこうじょう	久留米市	久留米市城島町江上		久留米		未調査	
63	中村善八		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
64	今村嘉次郎		久留米市	久留米市城島町		久留米		未調査	
65	中村新八		久留米市	久留米市城島町江島		久留米		未調査	
66	金田瓦製造工場		大木町	三潴郡大木町大溝		久留米			
67	萬瓦製造工場		大木町	三潴郡大木町大溝		久留米			
68	久瓦製造工場		大木町	三潴郡大木町大溝		久留米			
69	清瓦製造工場		大木町	三潴郡大木町大溝		久留米			
70	伍瓦製造工場		大木町	三潴郡大木町大溝		久留米			
71	森國瓦製造工場		大木町	三潴郡大木町大溝		久留米			
72	瓦		柳川市	柳川市佃町ほか		柳河		未調査	
73	瓦		柳川市	柳川市大和町明野ほか		柳河		未調査	
74	瓦		柳川市	柳川市三橋町柳河ほか		柳河		未調査	
75	村田瓦製造場		柳川市	柳川市三橋町		柳河			
76	甲斐田製瓦工場		柳川市	柳川市東宮永		柳河			
77	古賀瓦工場		柳川市	柳川市東宮永		柳河			

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
瓦				持主は二ノ宮周助。創業は明治31年(1898)5月(農商務省「工場通覧」)	農商務省1904工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治5年(1872)4月開業	代表者は市川清太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治9年(1876)10月開業	代表者は池田雨太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治14年(1881)1月開業	代表者は的場勘次郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治14年(1881)2月開業	代表者は田中常次郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治14年(1881)3月開業	代表者は今村幾次	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治20年(1887)4月開業	代表者は中村鶴松	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治20年(1887)8月開業	代表者は今村津太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治28年(1895)6月開業	代表者は堀江虎吉	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治30年(1897)1月開業	代表者は田中虎吉	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治30年(1897)4月開業	代表者は今村作太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治30年(1897)10月開業	代表者は今村栄	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治31年(1898)1月開業	代表者は口橋喜久次	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治32年(1899)5月開業	代表者は今村甚太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治33年(1900)2月開業	代表者は坂井勝造	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治34年(1901)2月開業	代表者は原倉次	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治36年(1903)10月開業	代表者は楢林種吉	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治37年(1904)1月開業	代表者は田所筆吉、久留米市十間屋敷遺跡第5次調査で「筑後城口(島)／特製／田所製」スタンプがある平瓦出土	全国工場通覧 久留米市文化財調査報告書第366集2016
瓦類(黒色素焼物)			明治37年(1904)12月開業	代表者は坂井種次郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治41年(1908)1月開業	代表者は池田正信	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治42年(1909)8月開業	代表者は市川卯太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治43年(1910)3月開業	代表者は江藤鹿太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治43年(1910)8月開業	代表者は古賀菊次郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治43年(1910)12月開業	代表者は古賀米蔵	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治44年(1911)2月開業	代表者は古賀市太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治44年(1911)4月開業	代表者は原市次	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			明治45年(1912)2月開業	代表者は緒方梅蔵	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正1年(1912)9月開業	代表者は御船重太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正2年(1913)9月開業	代表者は下坂藤吉	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正3年(1914)8月開業	代表者は中村勘助	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正3年(1914)8月開業	代表者は田中末吉	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正4年(1915)12月開業	代表者は森山茂太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正7年(1918)2月開業	代表者は島重喜	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正7年(1918)8月開業	代表者は原志末吉	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正9年(1920)12月開業	代表者は今村亀吉	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正10年(1921)1月開業	代表者は溢田末吉	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			大正12年(1923)3月開業	代表者は田中熊太郎	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			昭和2年(1927)3月開業	代表者は中園佐野吉	全国工場通覧
瓦類(黒色素焼物)			昭和3年(1928)10月開業	代表者は田中理三郎	全国工場通覧
瓦類				久留米市京隈侍屋敷遺跡第20次調査で「特別改良筑後江島／中村善八」「城島製」スタンプがある桟瓦出土	久留米市第323集
瓦類				久留米市十間屋敷遺跡第5次調査で「筑後城島／特製／今村嘉次郎」スタンプがある平瓦出土	久留米市第366集
瓦類				久留米市十間屋敷遺跡第5次調査で「城島瓦／製造中村新八／筑後江島」スタンプがある平瓦出土	久留米市第366集
瓦(黒色素焼物)			明治33年(1900)1月開業	代表者は田中秀次郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治34年(1901)5月開業	代表者は森山萬蔵	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治36年(1903)1月開業	代表者は野口久次郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正2年(1913)2月開業	代表者は坂井清	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正2年(1913)12月開業	代表者は森山伍次郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正11年(1922)3月開業	代表者は森山國太郎	全国工場通覧
				塩塚川沿岸	
				矢部川・塩塚川沿岸	
				沖端川 江崎洋瓦店前身、文久2年創業(史料)	
黒色瓦			明治45年(1912)5月開業	代表者は村田新太郎	全国工場通覧
黒色瓦			明治30年(1897)3月開業	代表者は甲斐田徳良	全国工場通覧
黒色瓦			大正7年(1918)2月開業	代表者は古賀昌	全国工場通覧

表1　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　窯跡

	名称	読み	市町村名	所在地	現況	旧藩名	経営	調査歴	焼物名
78	瓦		柳川市	柳川市大和町中島		柳河			
79	瓦		みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
80	瓦		みやま市	みやま市高田町		柳河			
81	瓦		みやま市	みやま市		柳河			
82	田中瓦工場	たなかかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
83	末吉瓦工場	すえよしかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
84	小宮瓦工場	こみやかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
85	大津瓦工場	おおつかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
86	高田瓦工場	たかだかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
87	西田瓦工場	にしだかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
88	平川瓦工場	ひらかわかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
89	大津瓦工場	おおつかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
90	大木瓦工場	おおきかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
91	末吉瓦工場	すえよしかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
92	武末瓦工場	たけすえかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
93	石橋瓦工場	いしばしかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
94	松藤瓦工場	まつふじかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
95	豎塚瓦工場	とくつかかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
96	重富瓦工場	しげとみかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
97	佐藤瓦工場	さとうかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
98	大橋瓦工場	おおはしかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
99	齋藤瓦工場	さいとうかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			
100	牟田口瓦工場	むたぐちかわらこうじょう	みやま市	みやま市瀬高町		柳河			

豊前

1	東洋陶器株式会社		北九州市	北九州市小倉区篠崎		小倉		未調査	
2	門司硬化煉瓦製造所		北九州市	北九州市門司区小森江		小倉		未調査	
3	文化木炭工場		北九州市	北九州市門司区大里門瀬町		小倉		未調査	
4	辻村商店煉瓦部		北九州市	北九州市門司区大里		小倉		未調査	
5	大里窯業所		北九州市	北九州市門司区大黒町		小倉	民窯	未調査	
6	小袋煉瓦工場	おぶくろれんが	大任町	田川郡大任町	宅地	小倉	民窯	未調査	
7	川西煉瓦工場		糸田町	田川郡糸田町					
8	瓦		豊前市	豊前市大村・鳥越（記録には境とある）		小倉	民窯	未調査	
9	瓦		豊前市	豊前市吉木	道路	小倉	民窯	未調査	

製品	窯の状況	規模・傾斜角度	推定年代	備考	参考文献
					工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
					工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
					工学博士北村彌一郎窯業全集第3巻1929
				「瓦業に従事せるものは、江浦、開地方を主とし、郡内瓦製造戸数16戸、1ヶ年の産額7万余円で販路は郡内及隣郡である。」とある(三池郡誌1926)	三池郡誌1926
瓦(黒色素焼物)			明治13年(1880)3月開業	代表者は田中久次郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治25年(1892)3月開業	代表者は末吉辰次郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治35年(1902)2月開業	代表者は小宮留太郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治35年(1902)2月開業	代表者は大津鶴松	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治35年(1902)2月開業	代表者は高田三太郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治35年(1902)3月開業	代表者は西田荘吉	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治40年(1907)3月開業	代表者は平川正太郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治41年(1908)6月開業	代表者は大津末松	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			明治45年(1912)3月開業	代表者は大木	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正 2年(1913)2月開業	代表者は末吉進	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正 7年(1918)9月開業	代表者は武末勇三郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正10年(1921)2月開業	代表者は石橋栄太郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正12年(1923)3月開業	代表者は松藤速人	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正12年(1923)3月開業	代表者は豎塚正巳	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正13年(1924)3月開業	代表者は重富福松	全国工場通覧
黒色瓦			大正13年(1924)3月開業	代表者は佐藤新太郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正13年(1924)3月開業	代表者は大橋梅次郎	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			大正14年(1925)7月開業	代表者は齋藤福松	全国工場通覧
瓦(黒色素焼物)			昭和 2年(1927)3月開業	代表者は牟田口虎次	全国工場通覧

衛生器			大正6年(1917)5月開業	代表者は無記名	全国工場通覧
煉瓦			昭和3年(1928)6月開業	代表者は無記名	全国工場通覧
耐火煉瓦			大正14年(1925)12月開業	代表者は高山始	全国工場通覧
耐火煉瓦			大正12年(1923)12月開業	代表者は辻村良衛	全国工場通覧
			大正7年(1918)10月～	商工省の「全国工場通覧」には飲食用陶磁器製造業の代表者として久富藤九郎が掲載される	全国工場通覧
煉瓦・屋根瓦			明治38年(1905)4月開業	代表者は小袋半	全国工場通覧
煉瓦			明治37年(1904)3月開業	代表者は川西亀吉	全国工場通覧
瓦			明治2年(1869)～昭和中期	明治二年六月巳年諸願書控「願い奉る口上の覚」「一瓦焼き御免礼壱枚」に農業で手のすいた時間、瓦焼きを行いたい旨の願出が願主・大村村長・鳥越村長3人連名で提出されている。いこの記録にある瓦焼きの原料供給地が大村天神林遺跡2区と推定される。県指定史跡蔵春園(求渓舎)の瓦は大村で制作されたもの。　　陶土　豊前市大村？	友枝文書史料集(一)商業
瓦			近世～近代	近代まで瓦屋が操業された場所と伝えられ、調査では近代頃と推定される大型掘立柱建物が検出された。この大型建物が瓦工房の可能性がある。	

表2　福岡県近世窯業関係遺跡調査表　関係遺跡

筑前

番号	名称	読み	種別	所在地	現況	推定年代	備考	参考文献
1	土取り跡	どとりあと	1	太宰府市観世音寺1丁目	駐車場			
2	土取り跡	どとりあと	1	太宰府市向佐野2丁目	店舗	江戸末～近代	早良高取焼の原土採取地［西皿山］	「佐野を掘る1向佐野原口遺跡」山村信榮『都府楼』第6号 1988古都大宰府保存協会 日本近世窯業史
3	土取り跡	どとりあと	1	太宰府市吉松3丁目	宅地	江戸末～近現代	中の子家の博多素焼、古博多人形の原土採取地	『博多人形沿革史』博多人形沿革史編纂委員会 日本近世窯業史
4	焼物用の土		1	須恵町大字上須恵			文献記録 須恵焼の創始者新藤安平が藩の鉱山にかかわっていた際に「須恵村蓬谷」（現、須恵町大字須恵字ヨムギと思われる）で焼物用の土を発見したとされる。（都府楼6号）	「佐野を掘る1向佐野原口遺跡」山村信榮『都府楼』第6号 1988古都大宰府保存協会
5	釉薬用の原料の土		1	須恵町大字植木			聞き取り記録 「甲植木切通付近より、釉薬用の原料の土を採掘し、粕屋町原町から天草などに送り出していた」（博多人形沿革史）	『博多人形沿革史』博多人形沿革史編纂委員会
6	釉薬土採土場		1	朝倉市杷木赤谷			「村ノ東杉添と云處より陶器の薬に用る白土を出す」（筑前国続風土記拾遺）	筑前国続風土記拾遺 日本近世窯業史
7	釉薬土採土場		1	直方市感田			「薬土　行常と云處の松山の下より白土を出す。早良郡西皿山の焼物に用ゆる薬土也。毎年福岡へ出す。」（筑前国続風土記拾遺）	筑前国続風土記拾遺
8	原土（採掘地）		1	福岡市城南区七隈	宅地	明治～	高取焼の花瓶・置物・茶器・猪口 現在も博多人形・津屋崎人形の原料として採掘中	日本近世窯業史 市史だよりFukuoka16
9	原土（採掘地）		1	福岡市南区野間	宅地	江戸～	瓦町焼	日本近世窯業史
10	原土（採掘地）		1	福岡市南区柳河内	宅地	明治～	野間焼	日本近世窯業史
11	原土（採掘地）		1	福岡市南区若久	宅地	江戸～	瓦町焼	日本近世窯業史
12	原土（採掘地）		1	福岡市南区高宮	宅地	江戸～	瓦町焼	日本近世窯業史
13	原土（採掘地）		1	福岡市南区横手	宅地	江戸～	瓦町焼	日本近世窯業史
14	原土（採掘地）		1	福岡市南区五十川	宅地	江戸～	瓦町焼	日本近世窯業史
15	原土（採掘地）		1	福岡市中央区鳥飼	宅地	江戸～	瓦町焼	日本近世窯業史
16	原土（採掘地）		1	福岡市博多区]青木	宅地	江戸～	瓦町焼	日本近世窯業史
17	原土（採掘地）		1	福岡市博多区麦野	宅地	江戸～	博多人形	日本近世窯業史
18	釉料（採掘地）		1	福岡市早良区有田	宅地	明治～	高取焼：褐鉄鉱	日本近世窯業史
19	釉料（採掘地）		1	福岡市南区多賀	宅地	明治～	野間焼	日本近世窯業史
20	釉石（採掘地）		1	福岡市西区金武		江戸～	西皿山	日本近世窯業史
21	釉石（採掘地）		1	福岡市城南区長尾	宅地	江戸～	西皿山	日本近世窯業史
22	原土（採掘地）		1	朝倉郡東峰村		江戸～	小石原焼	日本近世窯業史
23	薬石採土場		1	飯塚市		江戸～	西皿山の高取焼の薬石	日本近世窯業史
24	高取焼発祥乃地 永満寺宅間窯跡〔碑〕	えいまんじたくまかまあと	4	直方市	原野	平成19年（2007）1月		
25	高取焼内ケ磯窯記念碑	たかとりやきうちがそかまきねんひ	4	直方市	山林	平成22年（2010）4月		
26	高取八山墓跡〔碑〕	たかとりはちざんはかあと	4	飯塚市庄司字白旗 〔筑紫1938によると、「墓は嘉穂郡仲村白旗山の麓にあって墓碑はなく、朝鮮式の土饅頭型の柄である。先年高崎正戸氏の発見によって‥‥」とある	宅地	昭和41年（1966）頃に建立か	初代八山を含め八山一統の墓地については、昭和41年（1966）に市営白旗団地造成のために改葬された。現在はその場所に記念碑が建つ。移転に関して「分骨移転、白旗山（幸袋町）より小石原（朝倉郡）へ　埋葬供養式　昭和43年　左側　八山　右側　妻しらと　名碑寄進　黒田長成」と栃内1936に写真と手書きの書き込みが残されていることから、墓は東峰村に在するものと考えられる。	筑紫賴定1938高取焼その他
27	古高取山田窯跡記念碑	こたかとりやまだかまあときねんひ	4	嘉麻市上山田	山林	昭和11年（1936）	福岡日日新聞　昭和11年（1936）8月19日	
28	仮称：高取八仙慰霊碑	たかとりはちざんいれいひ	4	嘉麻市上山田	山林	昭和54年（1979）	高取焼13代窯元高取八仙建立	
29	大庭源太夫、夫婦の墓	おおばげんだゆうふうふのはか	4	嘉麻市上山田	山林		山田窯に面した小高い丘のふもとに並んで立つ。墓碑銘は「心譽浄源信士（大庭源太夫・明暦3年（1657）6月22日没」「光譽妙雪禅尼（同妻寛永21年（1645）11月2日没）」通称「殿の墓」と呼ばれる。1967年（1968年？）にこの墓所から抹茶碗2個が発見された	秋月街道
30	神武天皇社　式日献燈	じんむてんのうしゃしきじつけんとう	4	遠賀郡芦屋町正門町	神武天皇社境内入り口に現存	嘉永2年（1849）5月	二基一対の石灯籠　基壇まで入れた高さ5m 台石には発起人・石工などの氏名が彫られる。	
31	岡湊神社　式日献燈	おかみなとじんじゃしきじつけんとう	4	遠賀郡芦屋町船頭町	岡湊神社境内に現存	天保3年（1832）9月	伊万里と芦屋の商人とが共同して献納した一対の式日献燈	
32	岡湊神社　式日献燈	おかみなとじんじゃしきじつけんとう	4	遠賀郡芦屋町船頭町	岡湊神社境内に現存	天保10年（1839）8月	伊万里と芦屋の商人とが共同して献納した一基の式日献燈	

番号	名称	読み	種別	所在地	現況	推定年代	備考	参考文献
33	陶工小山田家墓跡	とうこうおやまだけはかあと	4	須恵町大字上須恵	須恵南幼稚園西側の共同墓地。整備され、現存せず。1981年墓碑銘調査実施	天明2年(1782)以降	歴史民俗資料館に当時の調査記録及び副葬品(須恵焼)収蔵	
34	松永吉右衛ヱ門の墓	まつながきちえもんのはか	4	糟屋郡須恵町大字上須恵	共同墓地の中に位置する		須恵町から天草に渡った陶工松永家の墓	須恵町誌p1140
35	採土場跡		1	朝倉郡東峰村			「陶土を採掘時に出た石などを円墳状に盛ったもので8か所ほどある」とする。『日本近世窯業史』のものと同じか否か不明	東峰村第5集
36	陶神		4	朝倉郡東峰村			「祭日は10月10日。自然石で高さ133cm、幅60cm、厚さ46cm。小石原工芸館内にあり」とする	東峰村第6集
37	火の神様		4	朝倉郡東峰村			村地図84で、「石祠に祀られる」とある	
38	土神様		4	朝倉郡東峰村				小石原村史 東峰村第3集
39	高取家累代墓地		4	朝倉郡東峰村			災害のため不明	高取家文書
40	天照太神宮		4	朝倉郡東峰村			延宝9年(1681)に高取八蔵貞明が高取家がこの地に移り住むまでに営んできた所の神を勧請して建立。※八郎重房が勧進した。	小石原村史 高取家文書
41	皿山山王神社		4				佐々木与七　澤田舜山の窯があったとされる神社	
42	澤田舜山の墓		4					須恵町誌p1139

筑後

番号	名称	読み	種別	所在地	現況	推定年代	備考	参考文献
1	赤坂神社境内　狛犬台	あかさかじんじゃけいだいこまいぬだい	4	筑後市大字蔵数	現地保存	大正10年(1921)	三原窯跡に建立された赤坂神社境内の狛犬台の銘に「百年祭記念　大正十年」とある。	
2	坂東寺焼窯元記念碑	ばんどうじやきかまもときねんひ	4	筑後市大字熊野	現地保存	昭和48年(1973)5月5日	坂東寺東大門の傍らに建立された平吾窯の窯元記念碑。近隣に十二代元生の碑がある。	筑後市神社仏閣調査書 坂東寺篇
3	水田焼記念碑	みずたやききねんひ	4	筑後市大字水田	現地保存	昭和48年(1973)8月	本田能登が水田焼を始めた場所の石碑。筑後郷土史研究会によって建設される。	
4	男ノ子焼窯跡〔石柱〕	おのこやきかまあと	4	八女市立花町北山			星野の山本源太氏が建てた石柱に「男ノ子焼窯跡」とある(立花町史 上巻p452)	
5	カメヤキドンの墓	かめやきどんのはか	4	八女市黒木町笠原			八女郡笠原村字釈形山中のウゲイシゴエ池の窪にあり、「甕焼殿の墓」とのこと	浅野1935筑後陶瓷考
6	池の本窯跡		4				木製の標柱 消滅	
7	名陶二川焼登窯〔碑〕	めいとうふたかわやきのぼりがま	4	みやま市高田町下楠田			富重窯と角窯にある。	
8	森松家之墓	もりまつけのはか	4	八女市星野村	墓地		森松家之墓の横に、「森松勢蔵墓記」の碑がある。	

豊前

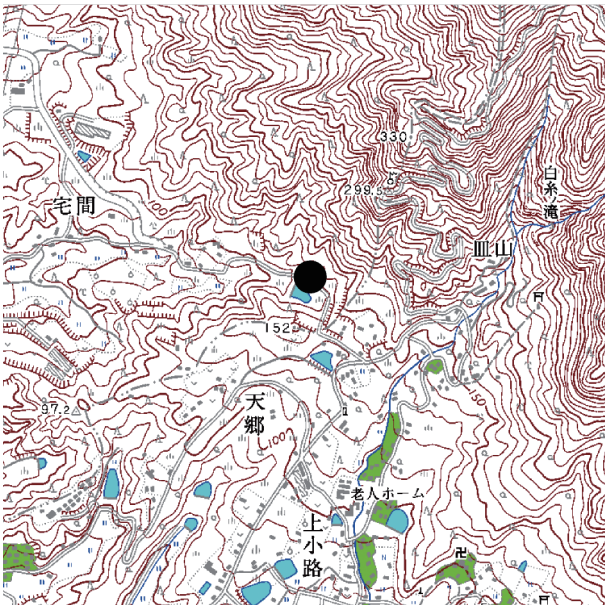
番号	名称	読み	種別	所在地	現況	推定年代	備考	参考文献
1	上野本窯跡碑	あがのほんがまあとひ	4	福智町皿山	山林	平成14年(2002)10月吉日	12代熊谷無造により開窯400年を記念し建立	
2	古墓		4	福智町釜蓋？	山林	江戸期	地元では大友宗麟の焼き討ち犠牲者の墓と伝えられる。釜の口より数百m東の尾根上	
3	岩屋高麗窯発祥の地碑	いわやこうらいがまはっしょうのちひ	4	福智町岩屋	山林	平成21年(2009)8月21日		
4	奥田儀三郎夫妻の墓	おくだぎさぶろうふさいのはか	4	田川郡香春町大字高野	墓地	慶応元年(1865)8月	「田香」銘の陶工と考えられる奥田儀三郎とその妻の墓碑。	
5	原土(採掘地)		1	田川市？		江戸～	上野焼	日本近世窯業史
6	原土(採掘地)		1	田川市夏吉		江戸～	上野焼	日本近世窯業史 小林省吾「豊前国焼窯上野焼の発祥とその背景」郷土田川44号　p25『萬之代控』本登御用目録控「夏吉工 煎茶茶碗、一輪立」

筑前１　永満寺宅間窯跡

所在地：直方市大字永満寺
経　営：福岡藩
焼物名：高取焼
年　代：慶長 11 年 (1606) ～慶長 19 年 (1614)
現　況：山林
備　考：市 94、県 050117 として周知化

『高取歴代記録』には慶長５年 (1600) の黒田長政入国後、文禄・慶長の役により朝鮮半島から日本へ渡来した八山により鷹取山の麓で製作をはじめたとあり、これが永満寺宅間窯とされる。すなわち高取焼の起源となる窯と評されるが、具体的な開窯年代には慶長 11 年 (1606) や慶長９年 (1604) 等の諸説がある。慶長 19 年 (1614) の一国一城令による鷹取城廃城により閉窯し、内ヶ磯窯に移ったとされる。

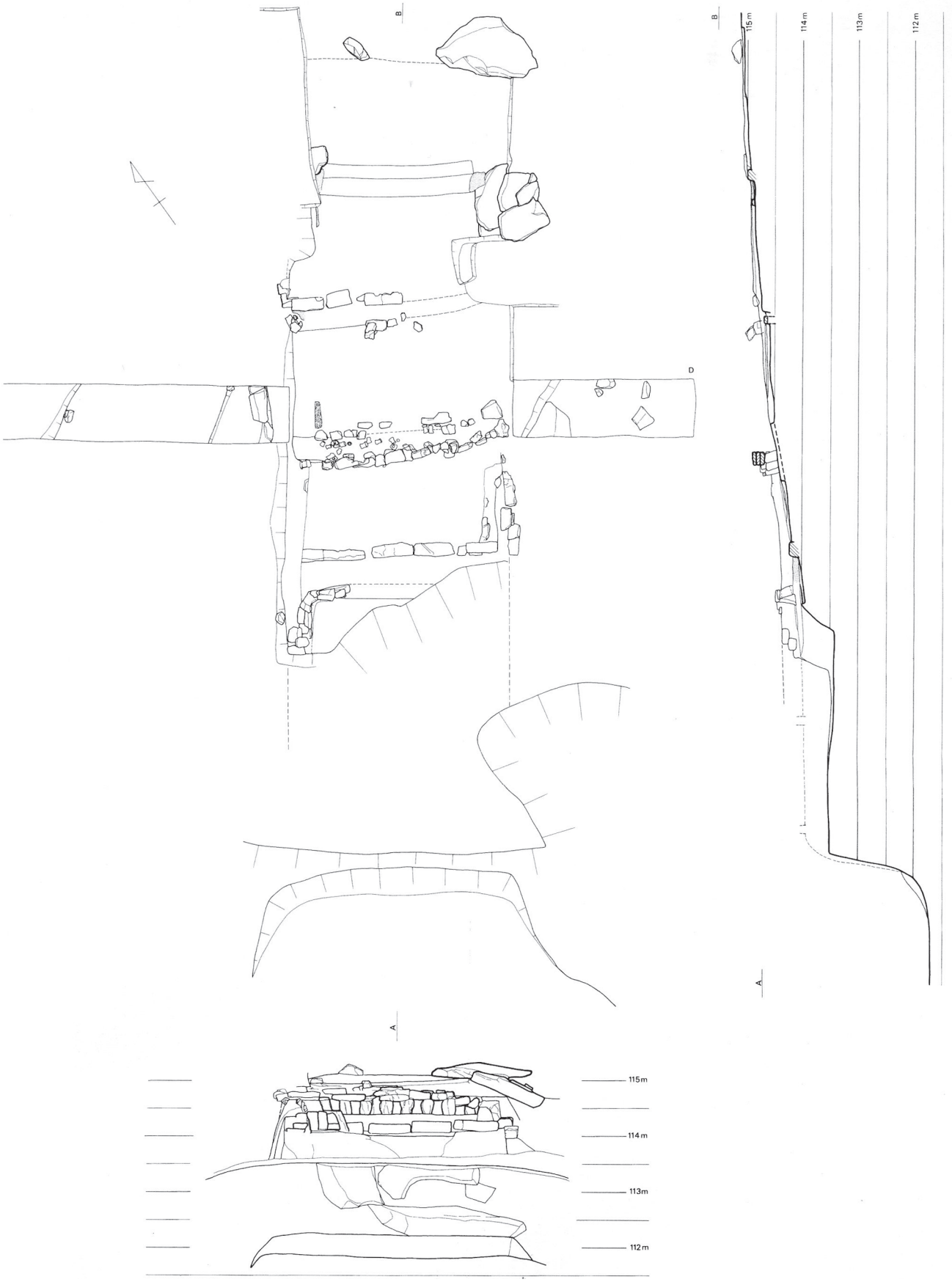
窯は鷹取山南麓に位置する。豊前国境に近い地にあり、豊前上野焼の皿山本窯とはおよそ 750m しか離れていない。昭和 57 年 (1982) に直方市教育委員会による発掘調査が行われ、全長 16.6 mの焚口と焼成室６室からなる割竹式登窯が検出された。小皿や碗、瓶など日常製品が多く、茶陶は発掘調査資料には含まれない。釉薬は藁灰、土灰、褐釉が多く、海鼠釉となるものが目立つ。窯道具にはハマとトチンがある。



窯跡位置図　『金田』（1/25,000）

窯跡現況（近景）

窯跡（調査時）
直方市教育委員会提供



永満寺宅間窯跡実測図（1/100）

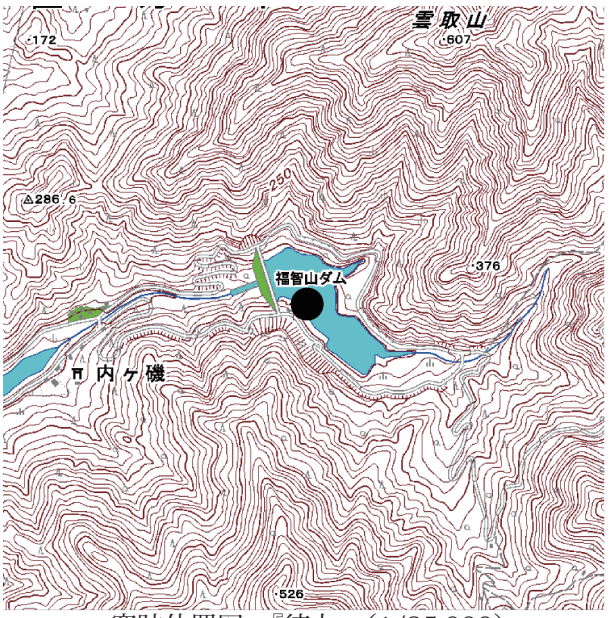
筑前２　内ヶ磯窯跡

所在地：直方市大字頓野
経　営：福岡藩
焼物名：高取焼
年　代：慶長 19 年（1614）～寛永元年（1624）
現　況：ダム水没
備　考：市 55、県 050118 として周知化

『筑前国続風土記』によると朝鮮出兵により渡来した八山により慶長 19 年 (1614) に開窯。『高取家文書』は寛永元年 (1624) に、八山父子の帰国願いが二代藩主黒田忠之の勘気に触れ、山田村へ蟄居させられたとある。『筑前国続風土記』には寛永 7 年 (1630) に白旗山に移ったとあることから、その時期まで続いたとする説もある。

窯跡は鷹取山北麓の比較的狭い谷に位置する。昭和 54 年 (1979) から 56 年 (1981)、平成 7 年 (1995) から平成 11 年 (1999) に計 8 次の発掘調査が行われ、全長 46.5 mの焚口と焼成室 14 室からなる階段状連房式登窯が検出され、前面域を中心に工房跡もまた検出された。窯の両脇には厚い物原が形成される。皿や擂鉢など日常製品が多く生産されたが、茶入・茶碗・水指・向付など多様な茶陶もまた生産された。藁灰釉、アメ釉を中心に、多種多様な釉薬が用いられ、掛け分け・イッチン掛け等の技法もみられた。

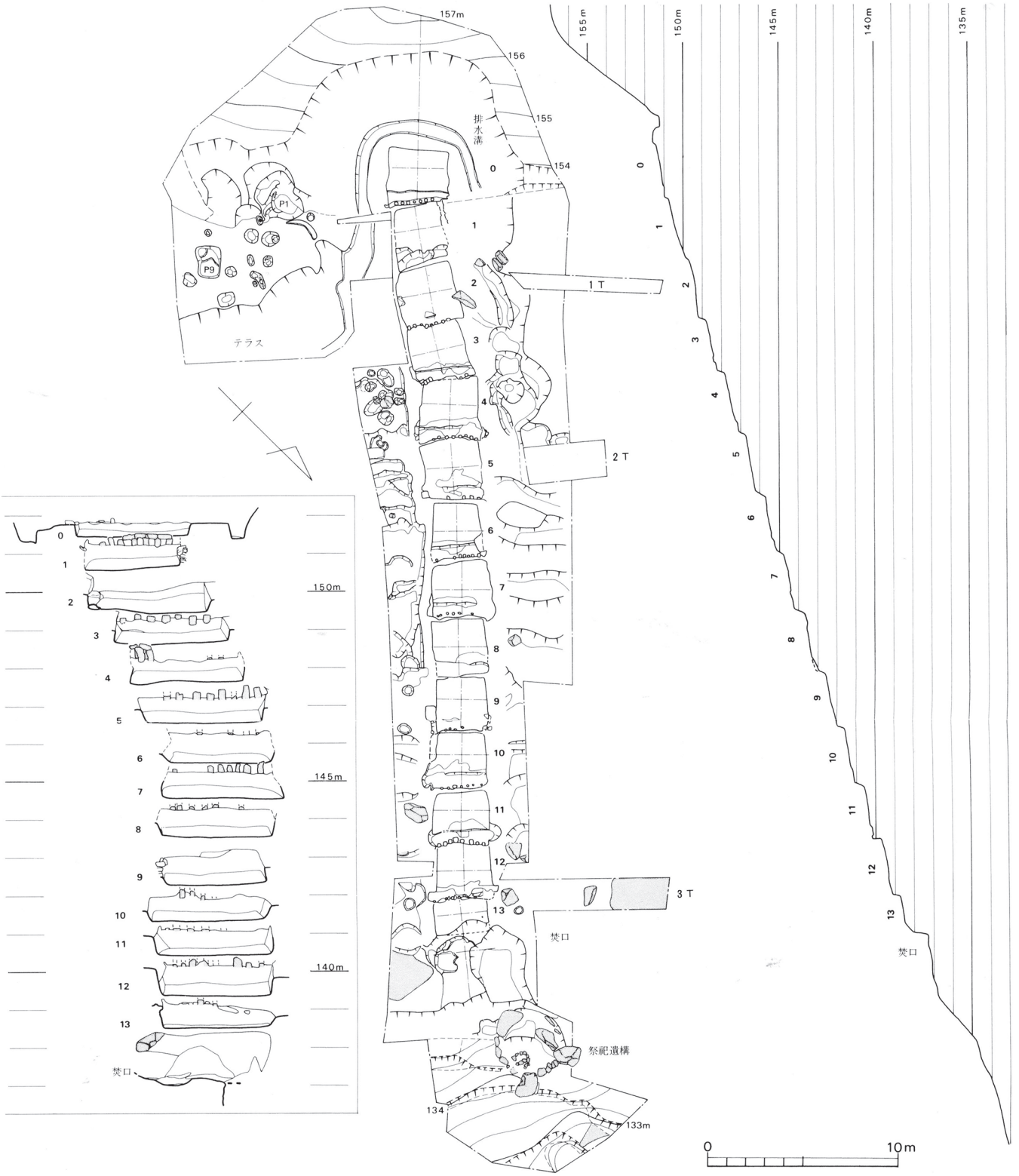
窯本体は調査後に保存措置が講じられた上で、福智山ダムの湖底に水没している。



窯跡位置図　『徳力』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

窯跡遠景（調査時）



内ヶ磯窯跡実測図（1/150・1/300）

筑前４　山田窯跡

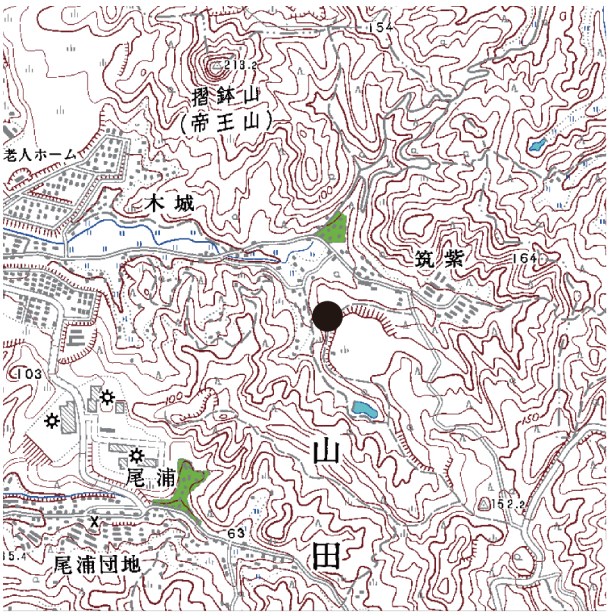
所在地：嘉麻市上山田
経　営：民窯
焼物名：高取焼
年　代：寛永元年 (1624) ～寛永７年 (1630)
現　況：山林、ボタ山埋没
備　考：市 2078、県 090013 として周知化

高取焼初代八山が、黒田忠之が二代藩主になったことを機に帰国を願い出たところ、その怒りに触れて蟄居を命じられ、山田に住むことになり（『高取家文書』）、製陶した窯である。皿・壺・鉢・片口等の日用雑器を焼いたとされる。

筑前と豊前を分ける低い丘陵が続く地にあり、谷の奥部に築かれる。現在はボタ山の堆積下にあり窯跡を確認することはできないが、現地近くには八山の慰霊碑と調査後の昭和 11 年 (1936) に建立された古高取山田窯跡碑が立つ。

昭和 10 年 (1935) に地元有志により発掘調査が行われ、栃内禮次氏により調査成果がまとめられた。陶器の皿や碗、瓶等が出土している。側壁と思われる高まりが残る状況であったとされるが、発掘調査当時の聞き取りでは、かつては１尺程度の側壁と幅２～３尺程度の焚口が残り、窯床は階段状をなしていたとされる。

現在知られている出土品は少ないが、一部は根津美術館に所蔵されている。また近隣にある大庭源太夫の墓所から出土した碗は山田窯で焼かれた可能性が高く、嘉麻市指定文化財（工芸品）に指定されている。



窯跡位置図　『金田』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

窯跡現況（古高取山田窯跡碑）

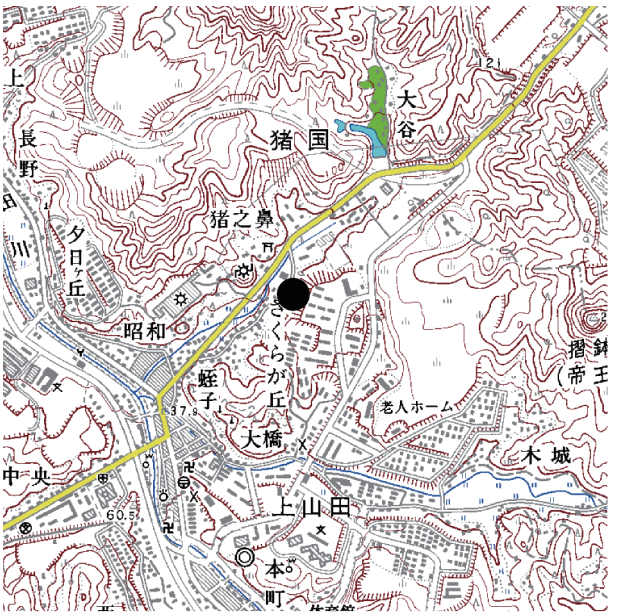
筑前５　猪之鼻窯跡

所在地：嘉麻市上山田
経　営：民窯
焼物名：高取焼
年　代：元文年間～
現　況：山林
備　考：市 2076 として周知化

『筑前国続風土記拾遺』には「猪之鼻に陶工二戸ありて元文の頃より陶器を製せしも近年絶えたり」とある。付近の土地は皿山と呼ばれている。

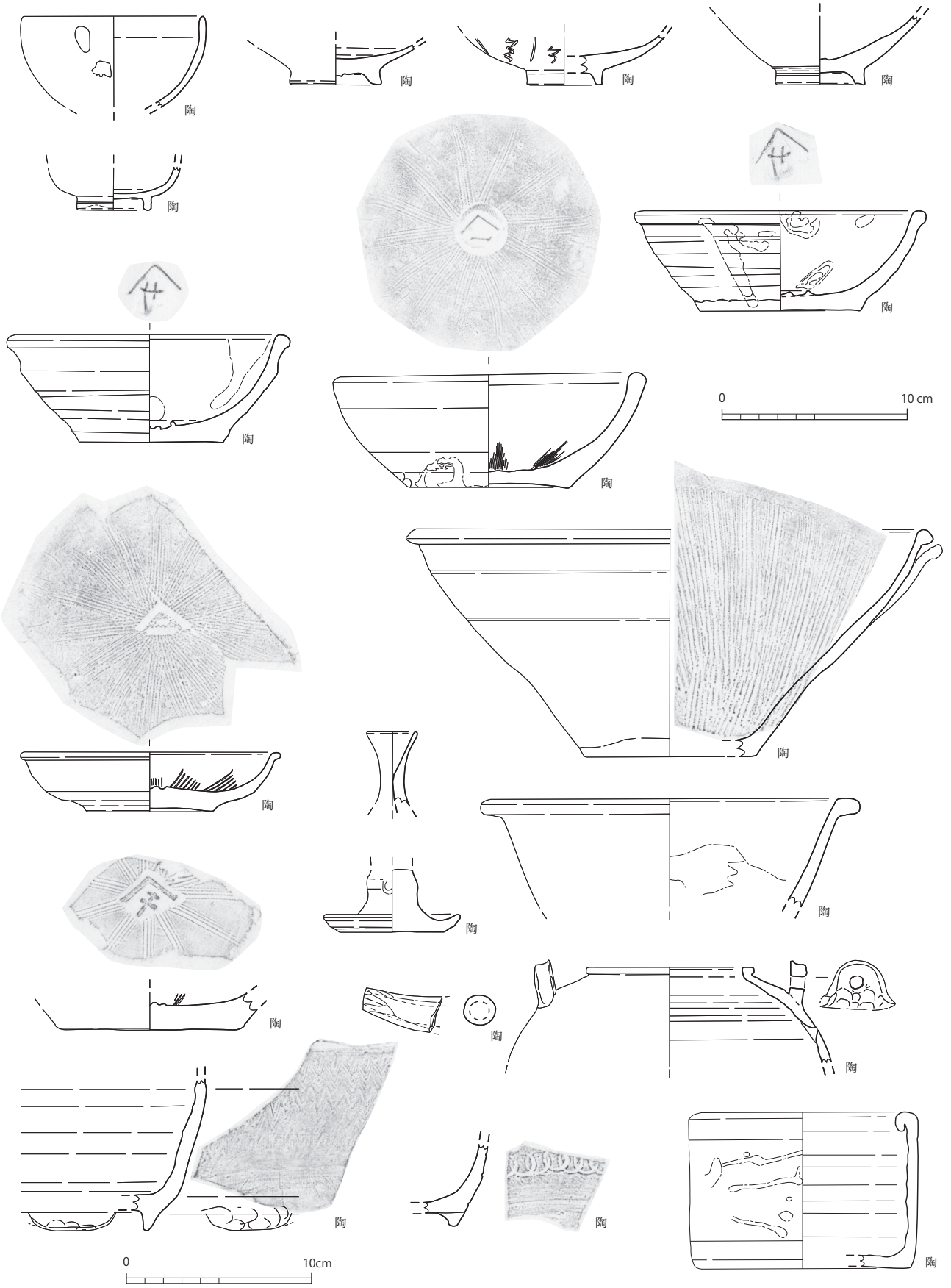
山田川に近い標高約 45m の丘陵裾に位置する。昭和 42 年 (1967)3 月に山田市教育委員会（現．嘉麻市教育委員会）により調査がなされ、窯の位置や規模が判明したとされるが、その具体的な内容は今回の調査では確認出来なかった。また、大師堂付近の山林が想定される地点と考えられるが、窯跡を示す状況は確認出来なかった。

出土品は嘉麻市教育委員会で保管されている。鉢・すり鉢が最も多く、小皿・碗・土瓶・ひょうそく・土管が含まれている。屋号の陽刻・陰刻がある小形の鉢・すり鉢が特徴的である。またトチンやタコハマ等の窯道具が出土している。

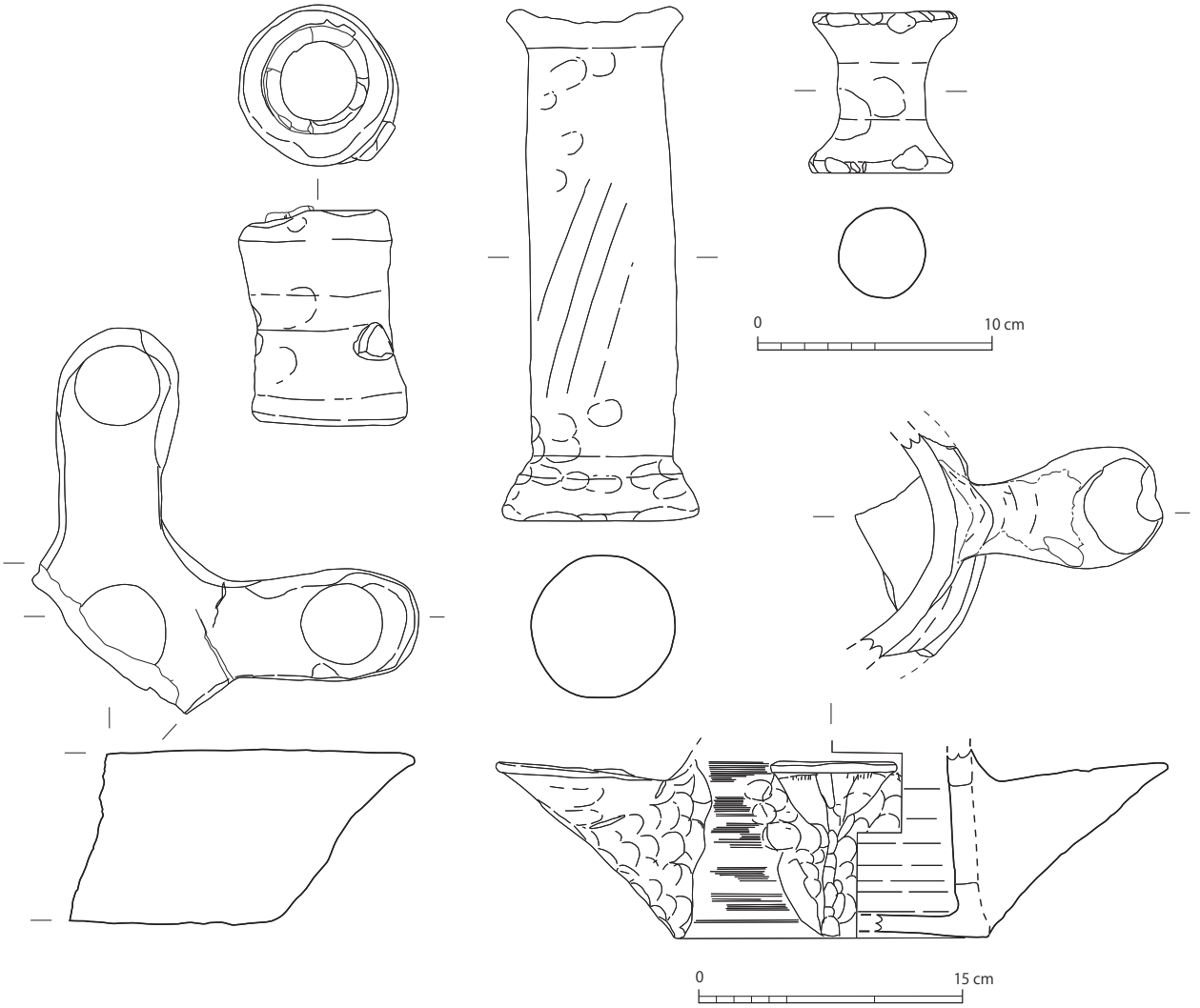


窯跡位置図　『筑前山田』（1/25,000）

窯跡現況（推定地遠景）



猪之鼻窯跡出土遺物実測図１（１/３・１/４）　嘉麻市教育委員会所蔵



猪之鼻窯跡遺物実測図２（１/３・１/４）　　嘉麻市教育委員会所蔵

猪之鼻窯跡出土遺物

筑前６　黒田窯跡

所在地：嘉麻市上黒田（漆生）
経　営：民窯
焼物名：黒田焼
年　代：江戸時代末期～明治 20 年 (1887) 頃
現　況：竹林
備　考：市 2036 として周知化

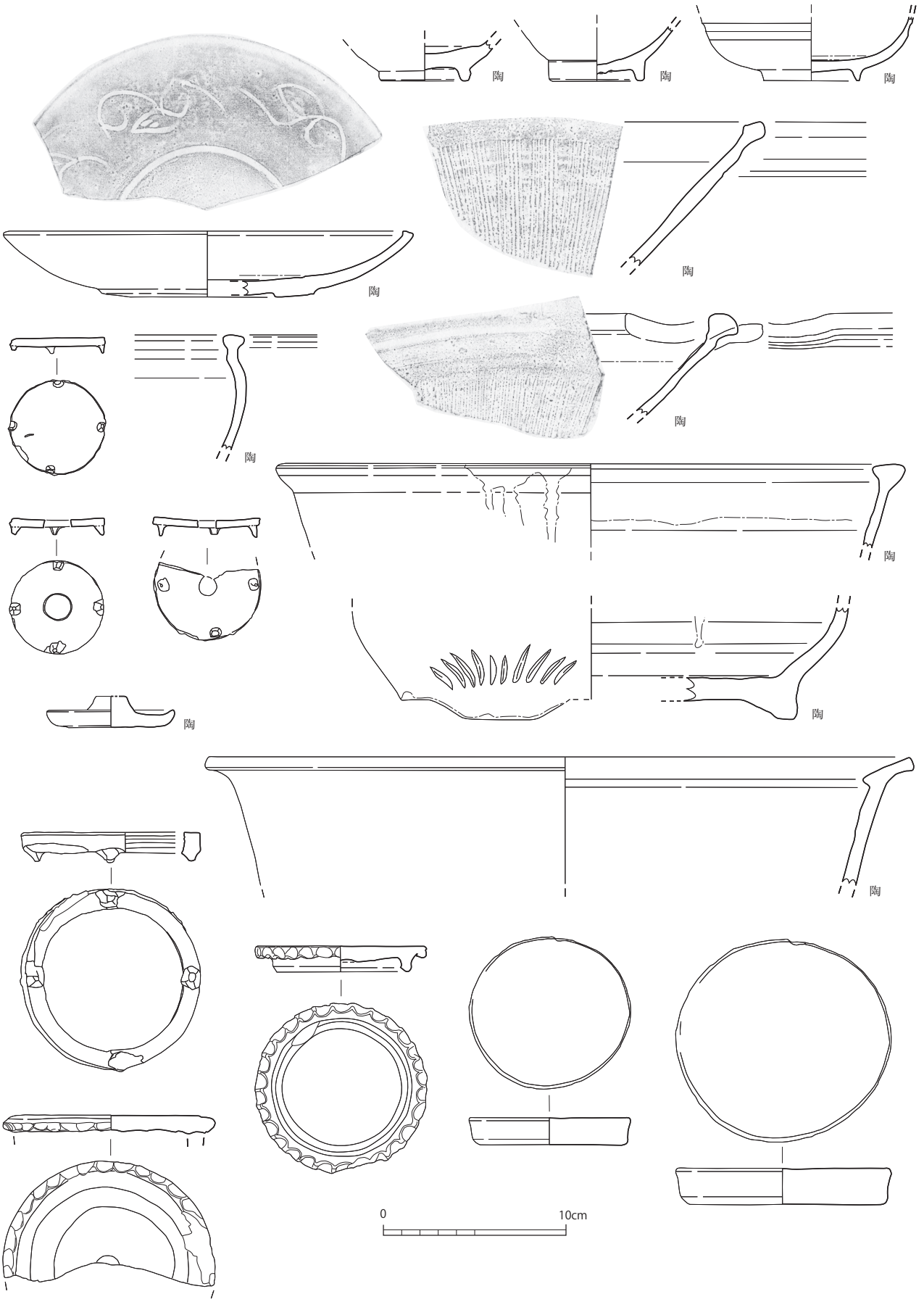
1979 年刊行の『稲築町誌』に江戸時代末期開窯、明治 20 年 (1887) 頃閉窯の記載があるが、詳細を追うことはできなかった。

遠賀川に近い標高約 49m の尾根先端部に位置する。尾根先端の斜面中段に平坦面があり、窯壁や窯道具、陶片が散乱する。尾根方向と直交する東西方向に 0.5 ～ 1m 程度の比高差で 3 面が連続して観察されることから、東側を焚口とする窯本体を想定したが、『稲築町誌』では、「上り窯で 9 個あったという」との記述があり、窯の向きや室数は現状では正確に判断できないと考える。平坦面は南北（幅）3.3 ～ 3.6m、東西（奥行）4.5m 程度の規模を測る。窯本体推定位置から南に向かった斜面には碗・皿等の陶器片や窯道具（足付サヤ・トチン）、焼土が多量に堆積し、物原を形成している。製品には「黒」の刻印があるとされるが、採集資料では確認できなかった。

窯跡位置図　『飯塚・大隈』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

窯跡現況（近景）



黒田窯跡出土遺物実測図１（１/３）　　九州歴史資料館所蔵

黒田窯跡遺物実測図２（１/３・１/４）　　九州歴史資料館所蔵

黒田窯跡出土遺物

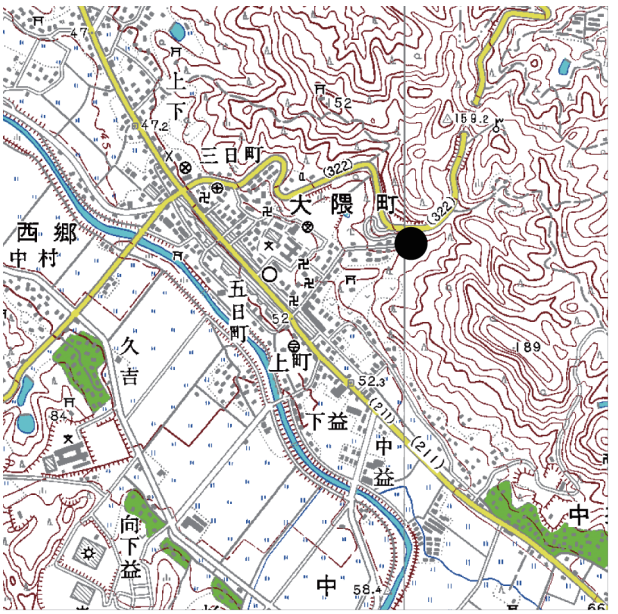
筑前７　野口窯跡

所在地：嘉麻市大隈町
経　営：民窯
焼物名：
年　代：19 世代？
現　況：山林
備　考：市 2169 として周知化

文献等の記録類にあらわれない窯跡。

大隈集落を外れた丘陵斜面に位置し、旧山田市へ抜ける旧道に近い場所にある。急傾斜地を斜めに登る幅約 4m の古道があり、標高約 90m の地点において道に沿って石垣が築かれている。石垣の上面は狭い平坦面をなしており、南側は急傾斜地となる。窯道具は、この古道の周辺に散布しており、石垣を含む造成地に窯を築いていた可能性があるが、現状で窯の構造は確認できない。散布する量は少量で、小規模な窯であった可能性がある。散布地の北側斜面上にも平坦面は見られるが、窯に伴うであろう遺物の散布はみられなかった。

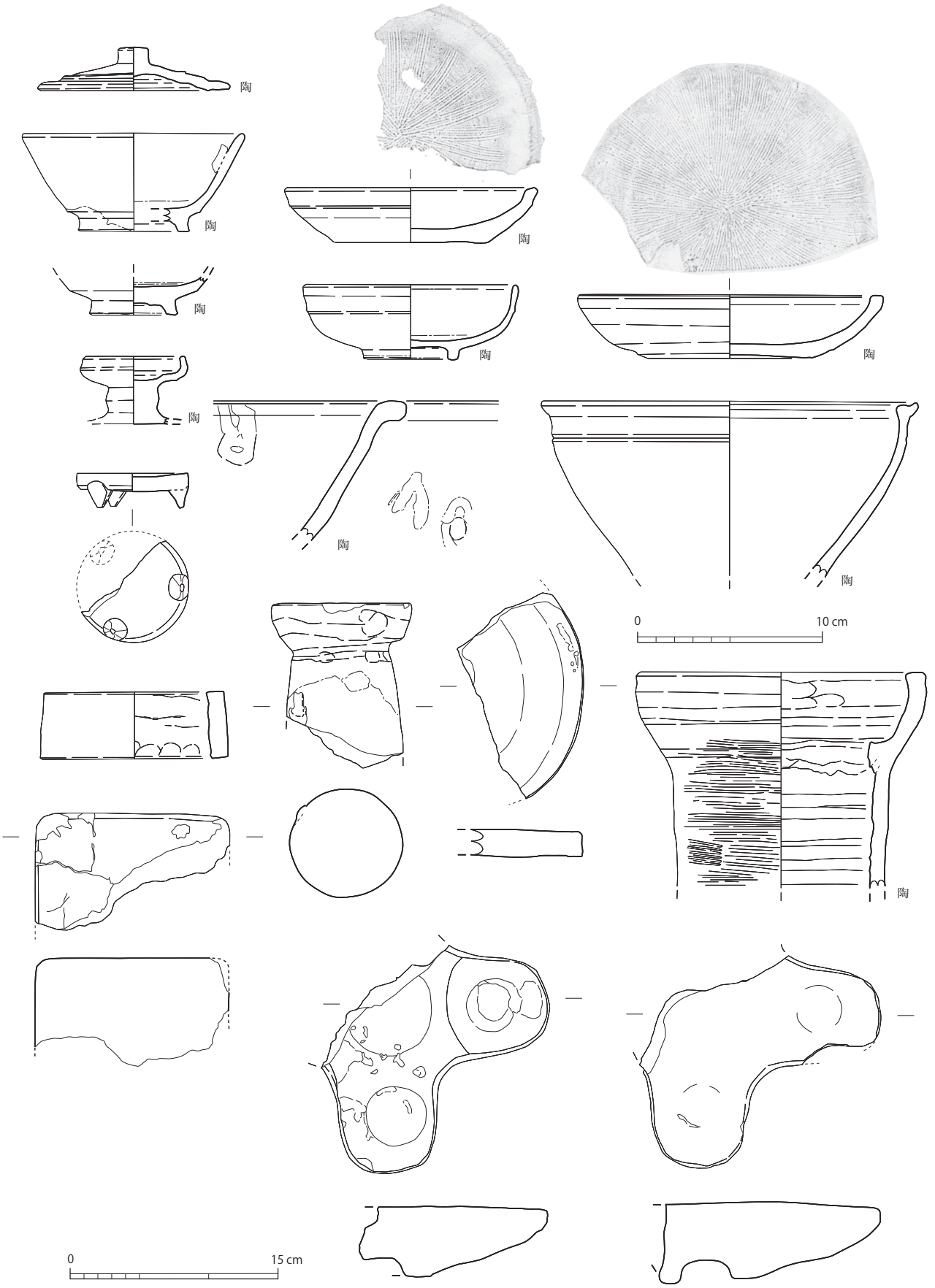
嘉穂市教育委員会に採集資料がパンケース 1 箱保管されている。



窯跡位置図　『大隈・筑前山田』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

窯跡現況（近景）



野口窯跡遺物実測図（1/3・1/4）　　嘉麻市教育委員会所蔵

筑前８　白旗山窯跡

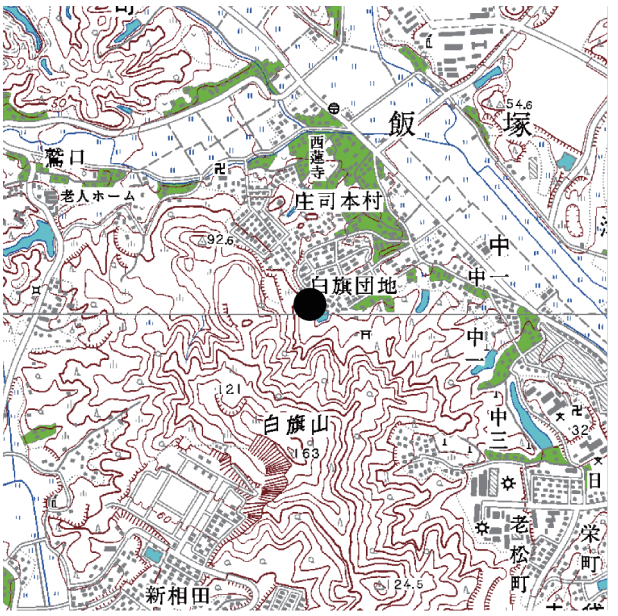
所在地：飯塚市中字野間
経　営：福岡藩
焼物名：高取焼
年　代：寛永７年 (1630) ～寛文５年 (1665)
現　況：山林
備　考：市 414、県 070335 として周知化

『高取歴代記録』によると、寛永７年 (1630)、山田へ蟄居させられていた八山父子の帰参が許され開窯したとされる。寛文５年 (1665) に上座郡鼓村に移るまでの間、操業された。その間、八山父子は小堀遠州のもとへ派遣され、指導を受け、遠州好みの茶陶を制作した。

窯は白旗山北麓の東斜面に位置する。昭和 62・63 年 (1987･88)、平成２年 (1990) に発掘調査が行われ、３基の窯跡が発見された。１号窯は階段状連房式登窯で、住宅造成のため消滅している部分もあり焼成室７室を検出したが、本来は 10 室前後と推定され、25m ほどの全長に復元される。２・３号窯は１号窯の南約 70m に位置し、重複するような形で検出された。２号窯は１室、胴木間、焚口のみ検出され、１号窯と同規模同式の窯と推測される。

１号窯は物原が失われており、出土遺物は少ない。多くがサヤ鉢を中心とした窯道具である。製品はすり鉢等の雑器が多く、茶入･碗等の茶陶もみられる。２号窯からもサヤ鉢を中心に窯道具が多く出土している。すり鉢等の雑器の他、茶入・水指等の茶陶が出土している。また、少数ながら磁器（青磁）片が出土している点は、本県の磁器生産の開始を考える上で重要である。

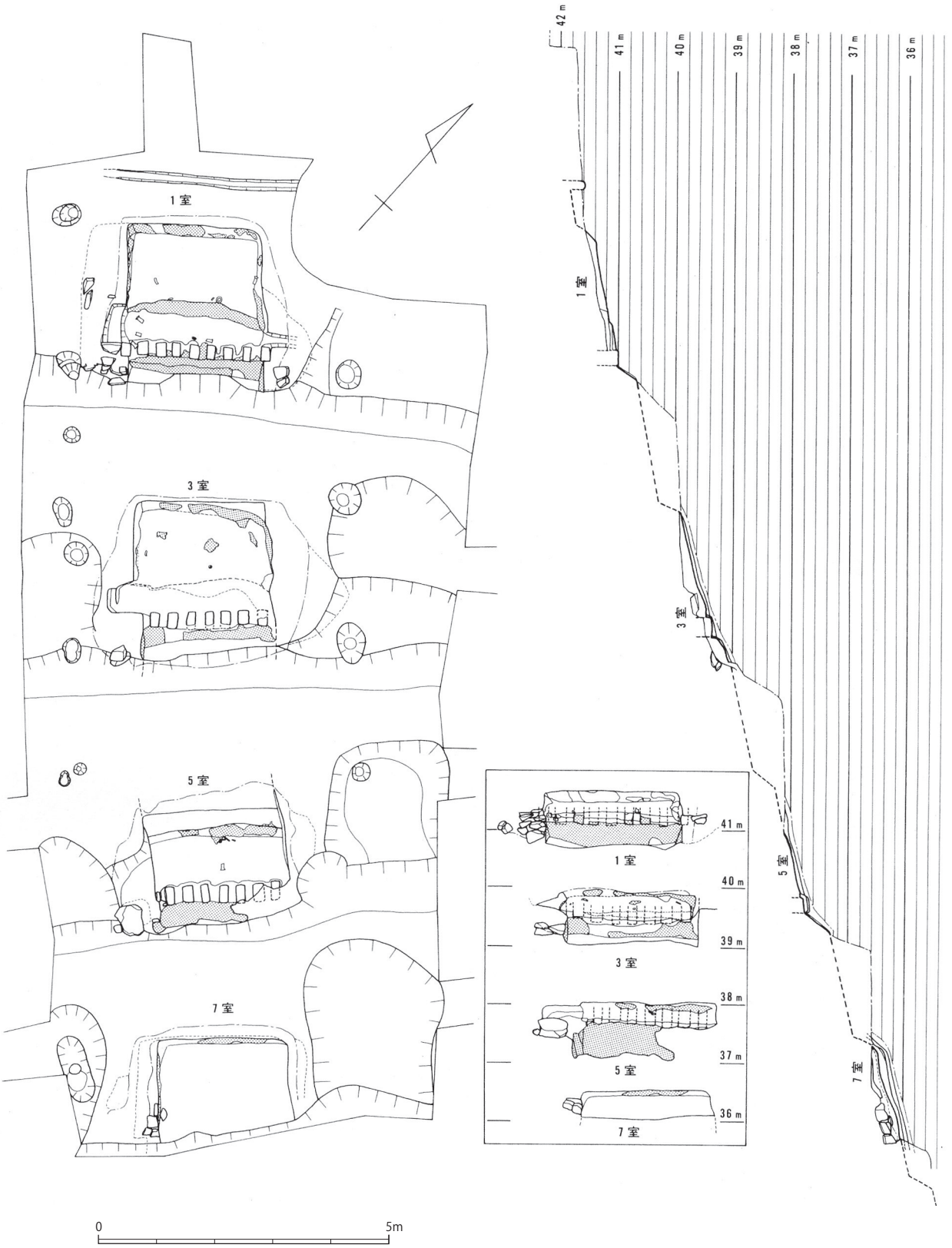
なお、八山は承応３年 (1654) にこの地で没し、近隣に葬られた。八山夫妻、長男の八郎衛門夫妻、孫の善七夫妻の墓所は昭和 42 年 (1967) に改葬されたが、その折に出土した 28 点の陶磁器は飯塚市指定有形文化財となっている。



窯跡位置図　『直方・飯塚』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

１号窯跡（調査時）
飯塚市教育委員会提供



白旗山１号窯跡実測図（1/100）

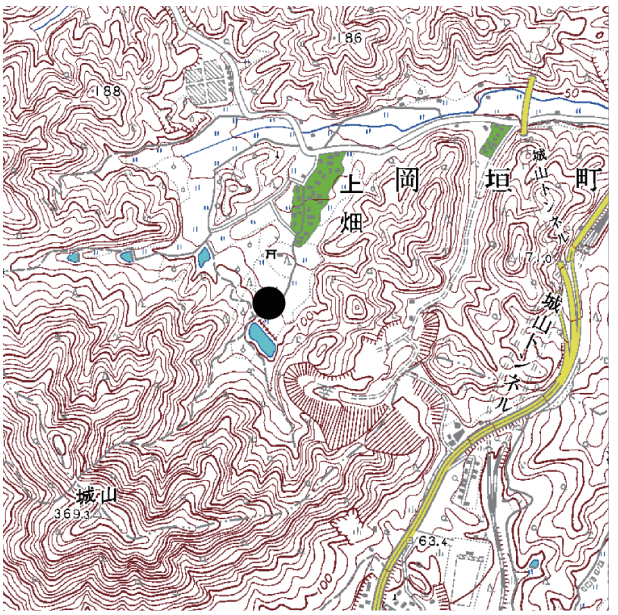
筑前 10　上畑窯跡

所在地：遠賀郡岡垣町大字上畑字唐人山
経　営：
焼物名：高取焼
年　代：17 世紀初頭か
現　況：果樹園
備　考：町 390163、県 390163 として周知化

記録類にはあらわれないが、『黒田御用記』にある黒田長政が陶工を芦屋から帰国させるという記事に関連する可能性がある。この記事は慶長 12 年 (1607) 頃と考えられ、陶片は高取焼の中でも古式の要素が多く、永満寺宅間窯・千石窯と近い時期に位置付けられる。

窯跡は城山（標高 369 m）から北東に延びる尾根が緩斜面となる標高約 100 mの地点に位置する。窯がある土地の字名は唐人山であり、周辺には土取や灰ヶ谷、火渡といった字名が残る。唐人墓があったとされるが、踏査では確認できなかった。

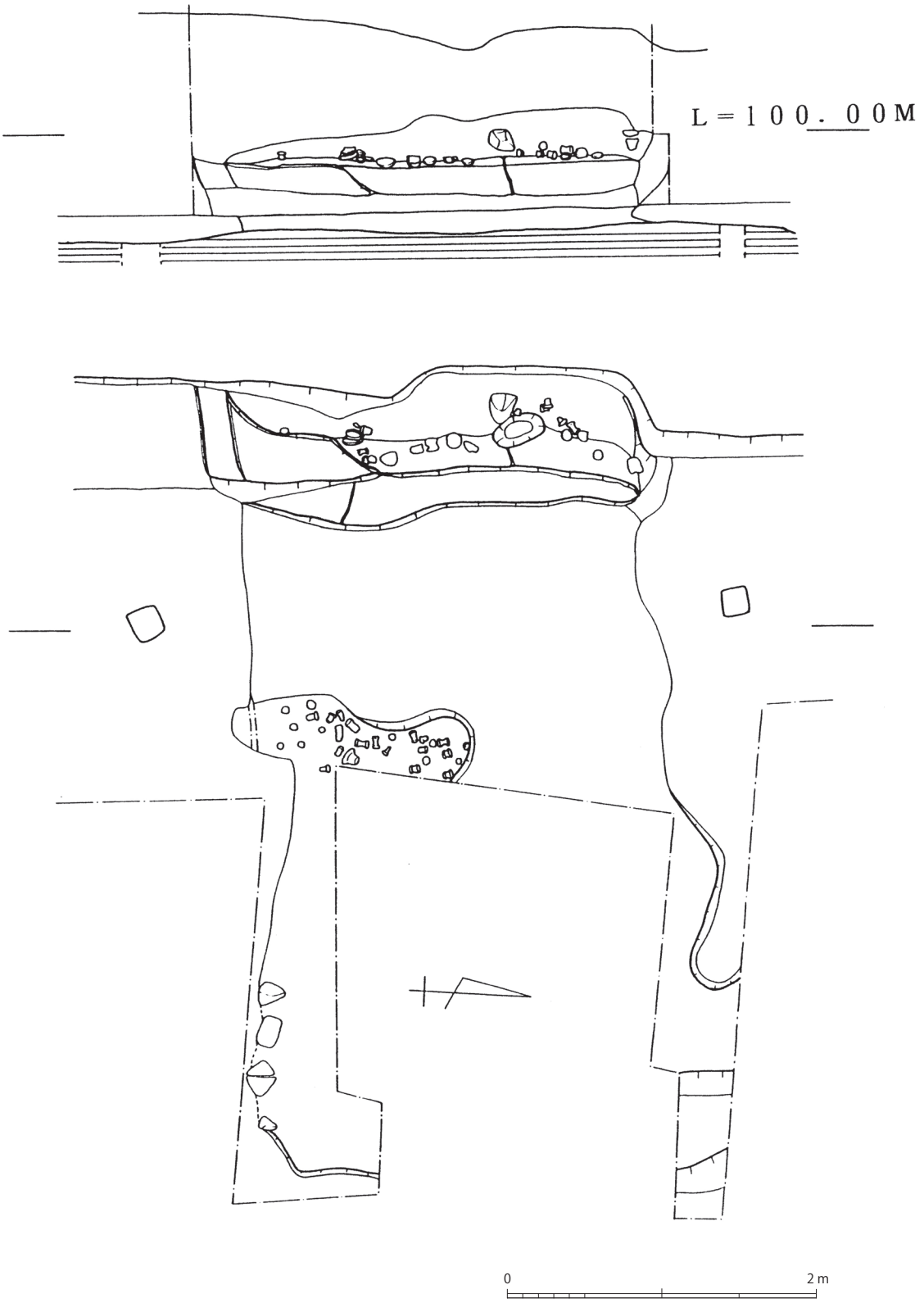
平成 6 年 (1994) に岡垣町教育委員会により確認調査が実施され、焼成室 1 室を検出した。縦長形で傾斜角約 6 度を測る。陶器の碗・皿・鉢・小壺が出土。窯道具にはトチンとハマがある。



窯跡位置図　『筑前東郷』（1/25,000）

窯跡近景

窯跡（調査時）
岡垣町教育委員会提供



上畑窯跡実測図（1/40）

筑前 11　千石窯跡

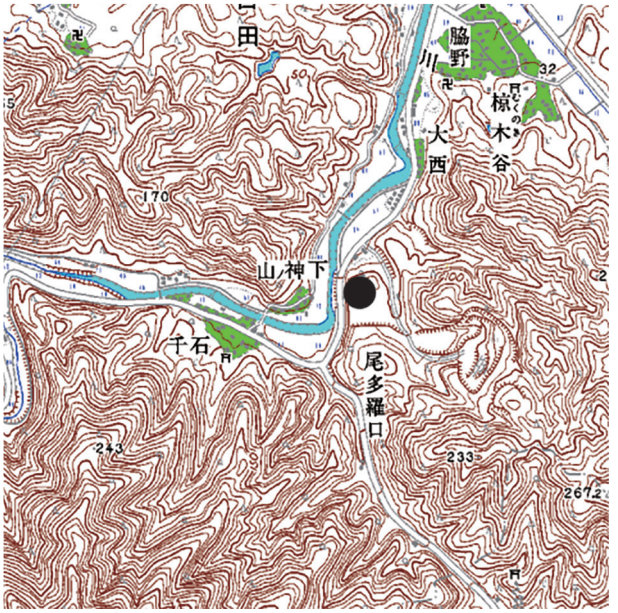
所在地：宮若市宮田字唐人町（千石皿山）
経　営：
焼物名：高取焼
年　代：17 世紀初頭か
現　況：消滅
備　考：県 410348 として周知化

記録類にはあらわれないが、上畑窯と同様に『黒田御用記』にある黒田長政が陶工を芦屋から帰国させるという記事に関連する可能性がある。初期に位置付けられる窯として注目されてきた。

窯跡は八木山川右岸の標高約 33m の地点で、背後や周辺に急峻な山塊が点在する狭い谷に位置する。

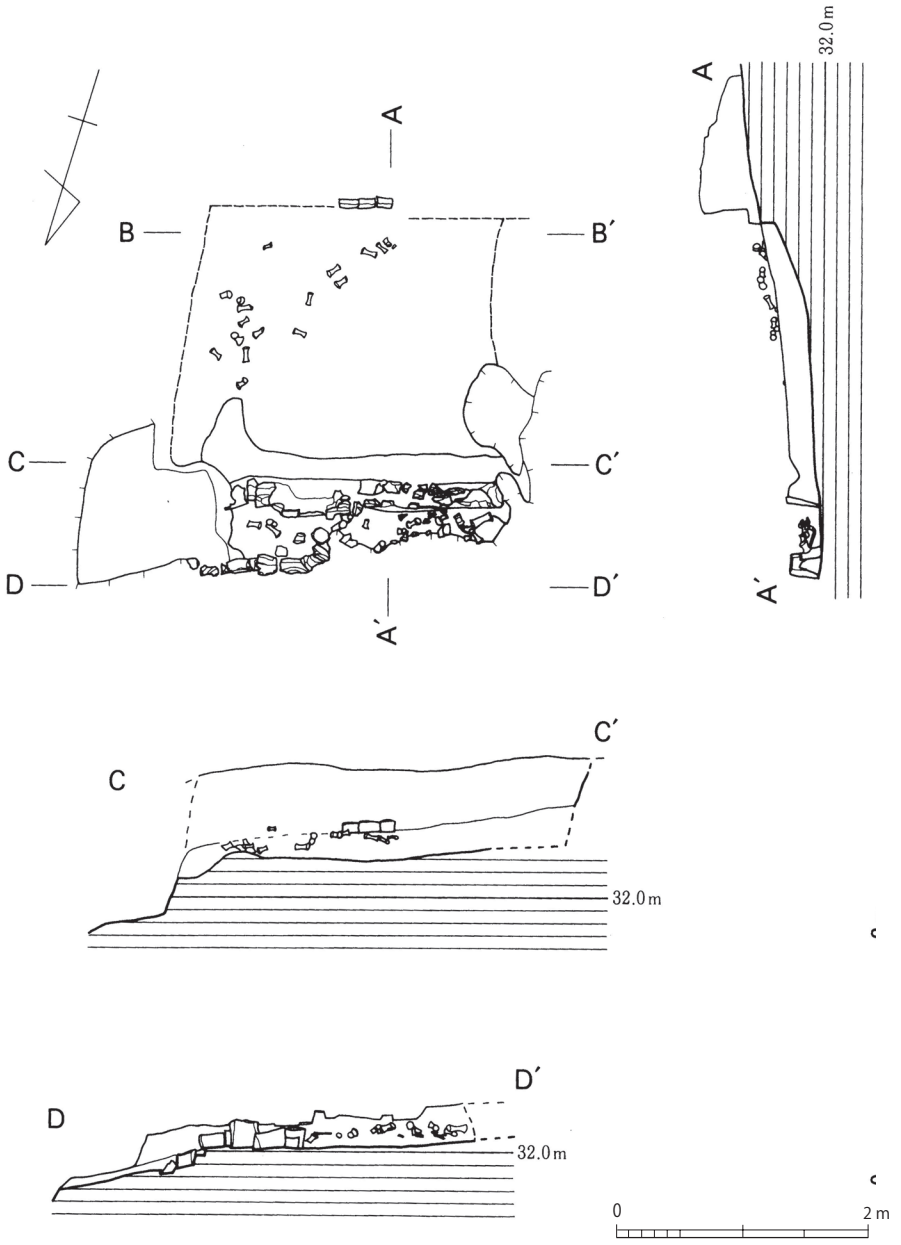
平成 6 年 (1994) に宮田町教育委員会（現．宮若市教育委員会）により確認調査が実施され、ほぼ正方形プランの焼成室 1 室を検出した。陶器の碗・皿・すり鉢等が出土。窯道具にはトチンとハマがある。陶器の皿はイッチン掛けを多用する点に特徴がある。

かつては残存が良いとされたが、周辺の採石が進み、窯跡は消滅している。



窯跡位置図　『直方』（1/25,000）

窯跡遠景



千石窯跡実測図（1/60）

窯跡（調査時）
宮若市教育委員会提供

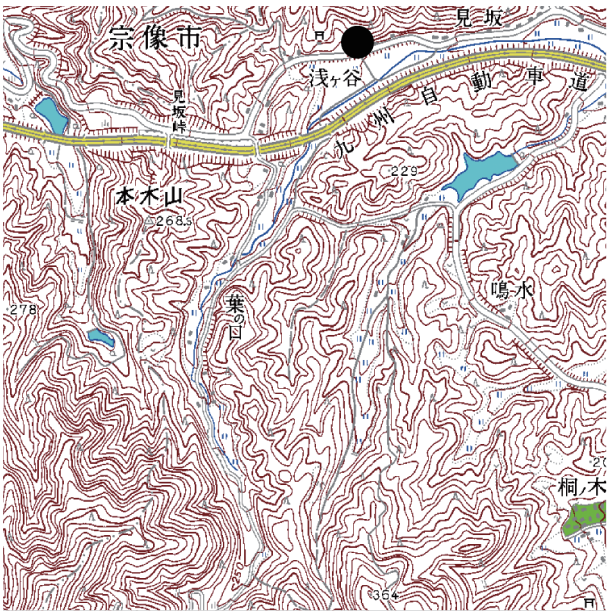
筑前 12　浅ヶ谷［朝谷］窯跡

所在地：宮若市山口字浅ヶ谷
経　営：民窯
焼物名：
年　代：明和 4 年 (1767) ～
現　況：山林・削平

中村伝五郎編『年代記』（桑野家文書　文政 8 年（1825））によれば、明和 4 年 (1767) の条に、鞍手郡山口村（宮若市若宮大字山口）で百姓惣兵衛が屋敷内に窯を造り伊万里焼風の焼き物を焼成したとある。

窯跡は「皿山」と呼ばれ、三坂峠に近い標高約 170m の南斜面に位置する。公民館建設により破壊を受けるが、奥壁の一部が残るとされる。表採遺物には、染付の皿、徳利などが見える。高台内面に「山」の文字が書かれた碗が知られる。また、窯道具にトチン、ハマがある。

須恵焼創始とほぼ同時期であるが、短期間の操業とみられる。



窯跡位置図　『脇田』（1/25,000）

窯跡遠景

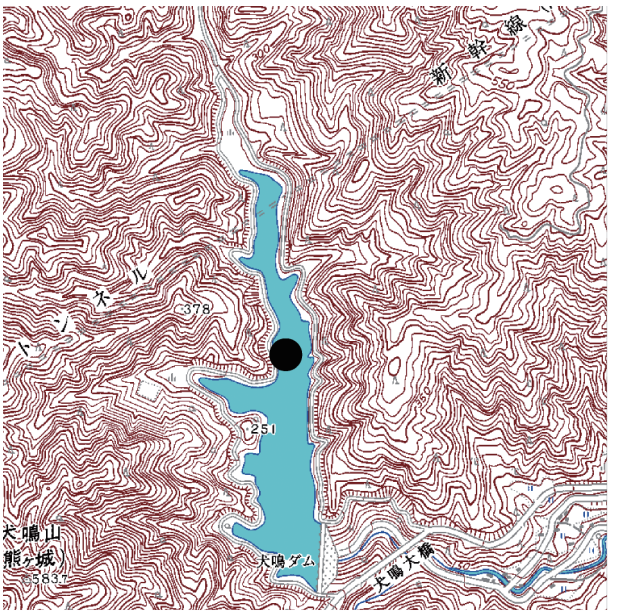
窯跡近景

筑前 13　犬鳴窯跡

所在地：宮若市大字犬鳴字皿山
経　営：
焼物名：高取焼
年　代：寛文年間～貞享年間
現　況：ダム水没
備　考：県 440255 として周知化

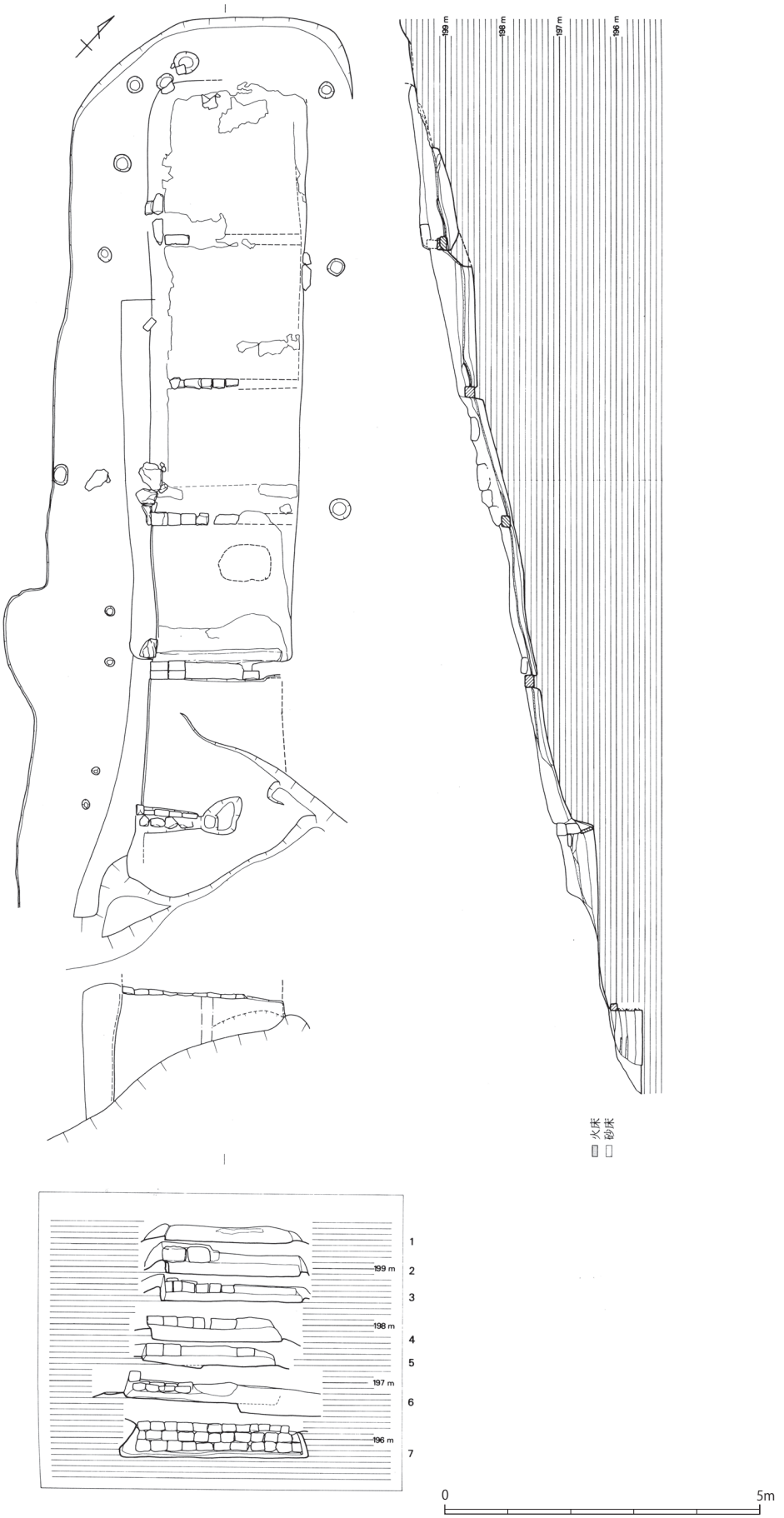
貝原益軒『筑前国続風土記』(1710) に犬鳴山にて陶器を生産するとの記述があり、『犬鳴山古実』(1729) には「皿山の新四郎」という人物が開窯したと記される。

西山山系から発する犬鳴川の渓谷にあり、川を挟んだ東西に２基築かれた。昭和 61 ～ 62 年（1986 ～ 87）に犬鳴ダム建設に係り福岡県教育委員会により発掘調査が行われた。削平や自然崩壊により全長は明らかでないが、１号窯は焚口と焼成室８室＋αからなる割竹式登窯で、残存長 18.5m を測る。２号窯は焼成室５室＋αからなり、残存長 13 mを測る。いずれも 1660 ～ 80 年代の短い期間に、陶器の碗やすり鉢、甕等の日常製品などを焼いた。窯道具ではトチン、ハマが見られ、サヤ鉢も少ないながら確認された。



窯跡位置図　『脇田』（1/25,000）

1 号窯跡（調査時）



犬鳴１号窯跡実測図（１/100）

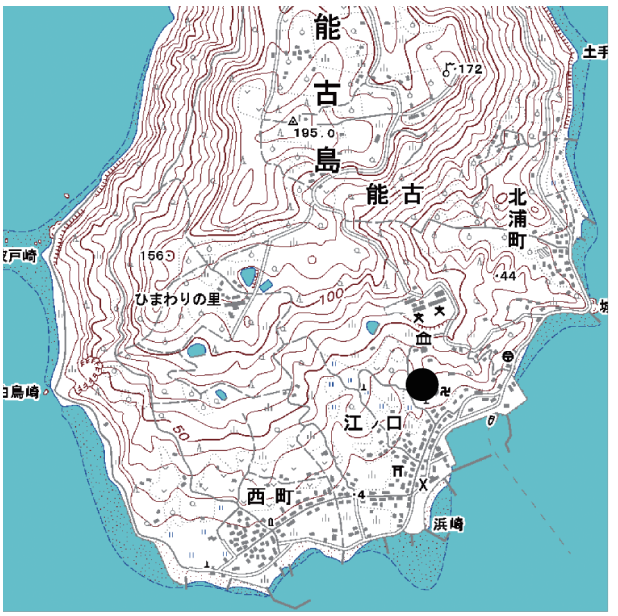
筑前 16　能古焼窯跡

所在地：福岡市西区能古
経　営：民窯
焼物名：能古焼
年　代：明和年間～天明年間
現　況：現地保存

『筑前国続風土記附録』に明和の頃から陶器がつくられていた旨の記述がある。また、有田の工人・佐十郎が磁器生産を始めたが、天明７年 (1787) 頃に逮捕のために役人が赴くとすでに本人は逃亡していたという記録が有田の『皿山代官旧記覚書』に記される。これらの記録から、明和・天明頃（18 世紀後半）の一時期に操業した期間の短い窯だと推測できる。

窯は博多湾に浮かぶ能古島の南東の緩斜面に位置する。昭和 63 年 (1988) に発掘調査が行われており、焚口と焼成室７室からなる全長 22m の階段状連房式登窯が検出された。各室のしきりにトンバイが用いられる。肥前系磁器の碗・皿・蓋や高取系陶器の碗などが出土しているが、出土品の大半は窯道具である。

平成２年 (1990) に市史跡に指定され、覆屋がかけられた上で保存されている。



窯跡位置図　『福岡西部』（1/25,000）

窯跡遠景

窯跡近景

能古焼窯跡実測図（1/150）

筑前 22　東皿山窯跡

所在地：福岡市早良区西新 5 丁目
経　営：福岡藩
焼物名：高取焼
年　代：享保元年 (1716) ～明治 4 年 (1871)
現　況：宅地

享保元年 (1716) に開窯した。明治 4 年 (1871) の廃藩置県まで続き、高取焼の諸窯のなかでは一番操業期間が長く、150 年の歴史がある。文化 13 年（1816）に描かれた見取図から、焼成室 8 室からなる全長 24 mの規模であったことがわかる。藩窯であり、茶入・碗・水指・香炉といった茶陶のほか生活全般にわたる多種多様な器種を焼き、贈答用の置物もみられる。文政 6 年 (1823) 以降、「高」銘が義務付けられ、藤巴の印文もある。

窯は博多湾沿岸の標高約 21 mの独立丘陵に位置するが、宅地化しており窯跡は確認されず、陶片や窯道具が採取されるのみである。北に近隣する西新町遺跡から福岡県教育委員会による発掘調査で窯道具が多量に出土しており、東皿山窯に関係するものと考えられる。

窯跡位置図　『福岡西南部』（1/25,000）

窯跡近景

筑前 23　西皿山窯跡

所在地：福岡市早良区高取 2 丁目
経　営：藩窯→民窯
焼物名：高取焼
年　代：寛保元年 (1741) ～
現　況：宅地

西新窯ともいい、寛保元年 (1741) に開窯した。東皿山窯が茶陶を主とする御用窯だったのに対して、本窯では日常製品を焼いており、殖産興業的側面が強い。東皿山窯が大破した際には御用品を焼いていたとされる。『近国焼物山大概書上帳』には「西町皿山　窯二登　此数参拾間」とあり、200 人に及ぶ陶業者が従事し、御道具焼物師として知行を受けていた。廃藩置県後には民間窯として存続し、現在は亀井味楽窯が操業を続け、登窯 1 基が保存されている。

博多湾沿岸の独立丘陵である紅葉山の北麓に位置する。周辺は大規模に開発され、旧地形が大きく損なわれている。

平成 17 年 (2005) の福岡市教育委員会による発掘調査（藤崎遺跡 35 次）で、物原を掘削した整地面が確認され、多量の陶器が出土した。碗・皿・鉢・瓶・徳利・仏具・灯明皿・甕等、日用雑器が主であるが、高級食器も少量ながら出土した。文政 11 年 (1828) や天保 9 年 (1838) の年号を刻むものもあり、当地点については 19 世紀前半に位置付けられる。

窯跡位置図　『福岡西南部』（1/25,000）

窯跡遠景

窯跡近景

筑前 27　野間焼窯跡

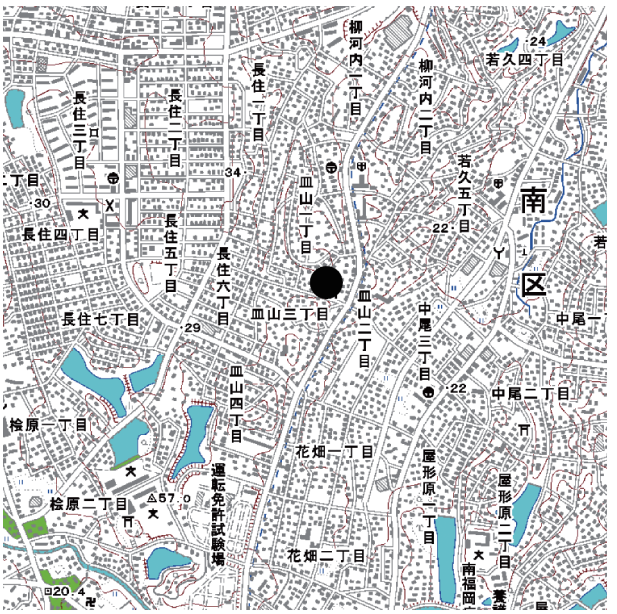
所在地：福岡市南区皿山
経　営：
焼物名：野間焼
年　代：安政２年 (1855) ～明和３年 (1870)
現　況：宅地・神社境内

福岡藩の殖産興業政策に基づき、安政３年 (1856) 年には京都の陶工であった佐々木与三らを招致し、陶土を柳河内で採集し、野間皿山に開窯した。明治８年 (1875)、京都から須恵に来た名工の澤田舜山を招致し、傾きかけた窯を立て直した。京焼に似た土瓶・急須・茶碗などの日用雑器や汽車土瓶は需要が大きく、生産が拡大した。

しかし、生活様式の変化に伴い規模が縮小し、近年まで存続したものの現在は操業されていない。窯跡は複数箇所にわたるとされるが、トンバイによる窯壁が残る地点を確認した。また山王神社は陶工が大山昨神と火産霊神を京都から勧請して建てたものであるが、境内で筑前野間焼の銘がある縁起物の土鈴やトンバイ等が採取され、窯の存在が想定された。

なお、澤田舜山の墓は野間窯から近い南区野間２丁目の野間墓地にある。

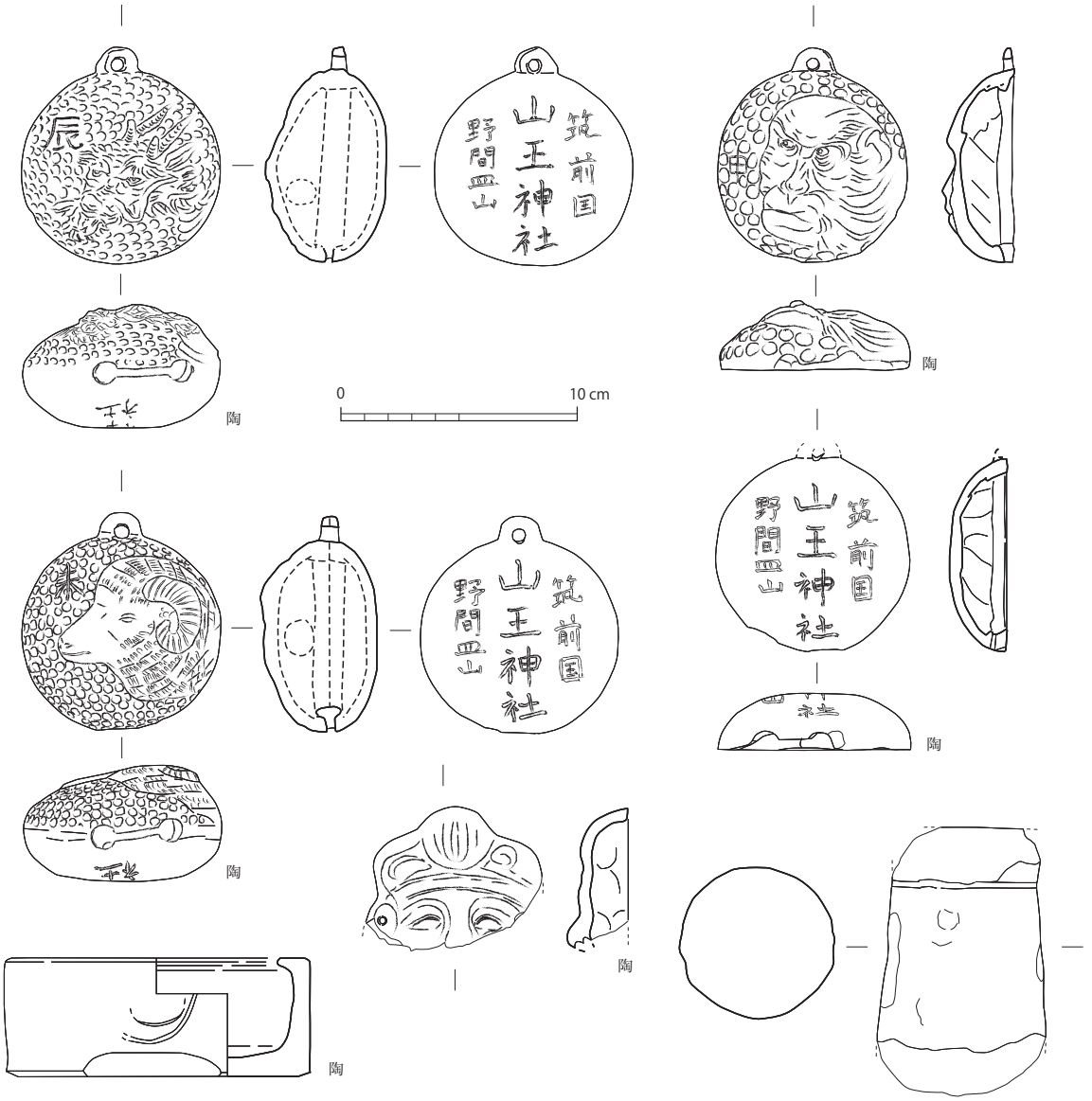
澤田舜山の墓



窯跡位置図　『福岡南部』（1/25,000）

窯跡現況（窯壁残存地）

窯跡現況（山王神社）



野間焼窯跡出土遺物実測図（1／3）　九州歴史資料館所蔵

野間焼窯跡出土遺物

筑前 29　須恵焼窯跡［福岡藩磁器御用窯跡］

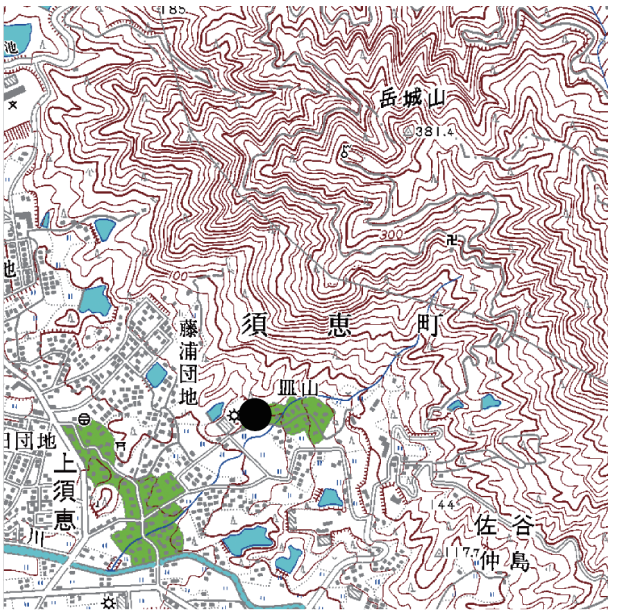
所在地：糟屋郡須恵町大字上須恵字東原（皿山）
経　営：藩窯（福岡藩）→民窯
焼物名：須恵焼
年　代：宝暦年間（1751～64）～明治 35 年（1902）
現　況：3 基現地保存
備　考：町 290154 として周知化

福岡藩寺社司の下吏、新藤安平が須恵村金山間堀で白土を発見し、焼き物に詳しいものを肥前南川原山で陶法の指導を受けさせて始まったとされる。福岡藩より皿山奉行所が置かれるが、文政 12 年 (1829) に藩の保護が中断した。安政 7 年 (1860) までは民窯へ移行するが、その後、明治 3 年 (1870) までは再度藩窯となり、皿山奉行が設置された。廃藩後は井上伊作・松永吉蔵・金森嘉助により引き継がれる。明治 20 年（1887）には株式会社が組織され、金錆焼を製作する。明治 30 年 (1897) 頃数年の間、朝倉郡甘木の玉ノ井騰一郎、藩窯を再興し金錆釉の雑器を製造するが、明治 35 年 (1902) には終焉したかとみられる。

窯は若杉山の南西山麓に位置する。幅が広く長大な窯が残り、上層には 7 室からなる明治期の窯が築かれた窯が残る。

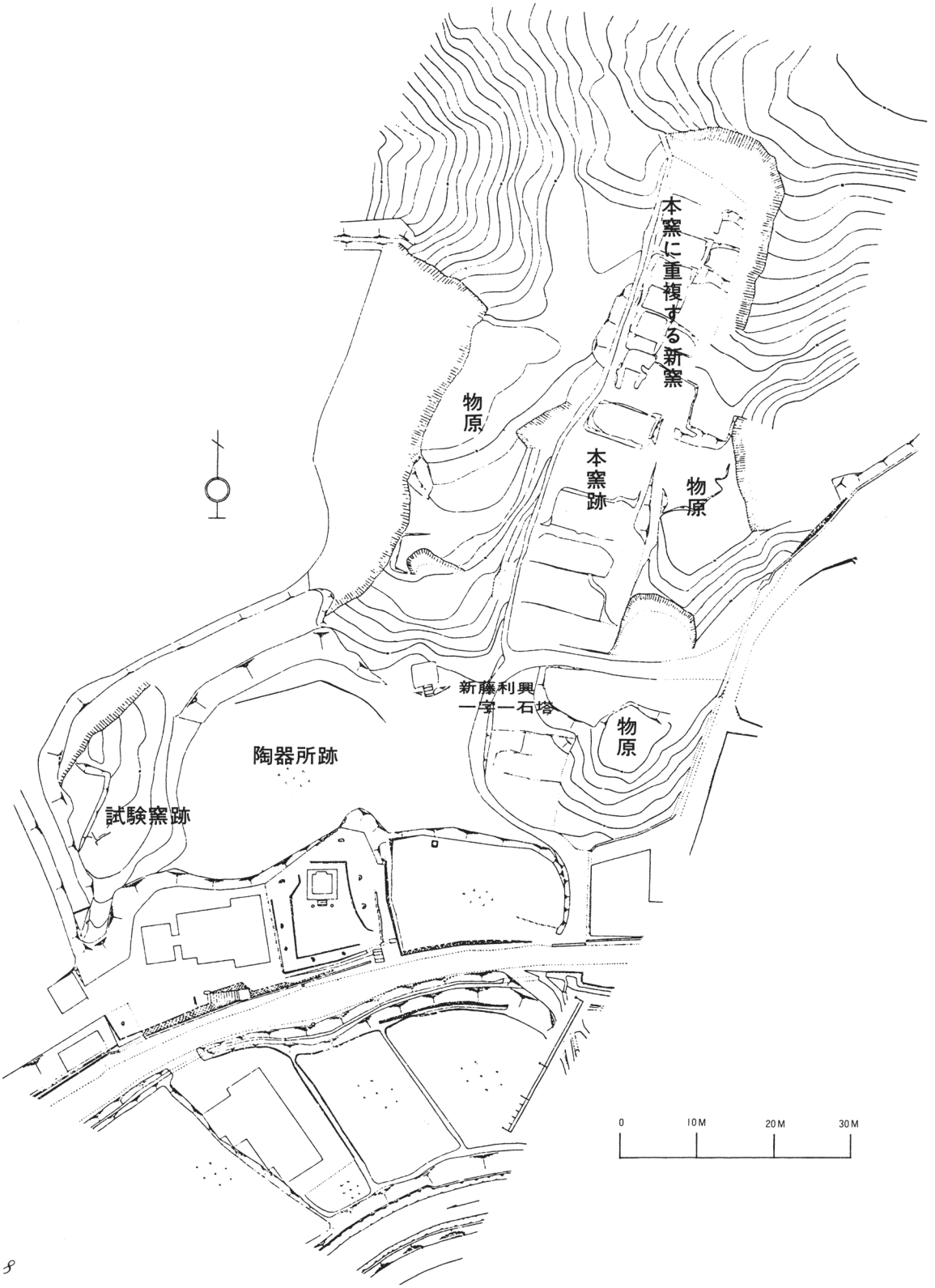
筑前国続風土記附録（平岡本）須恵皿山陶器所の図では、本窯、試験窯、陶器所のほかに薪小屋、水簸施設、瓦葺建物（製品を保管する蔵と想定される）、一宇一石塔（創始者新藤安平の 50 回忌を供養して孫が建立）、その他建物（付属施設や工人の住居）等が描かれる。

本窯跡は、昭和 56 年 (1981) に県指定史跡に、また町指定有形文化財（工芸品）として「釈迦像台座」・「花立（仏花器）(1978 年 4 月 1 日指定）/「染付鉢」・「御酒器徳利」2 点・「御供鉢」(1982 年 4 月 1 日指定）/「金錆染付山水文花生」・「金錆染付酒注」(2005 年 7 月 19 日指定）が指定されている。



窯跡位置図　『篠栗』（1/25,000）

須恵陶器所圖（筑前国続風土記附録 平岡本）



須恵焼窯跡遺構配置図（1/800）

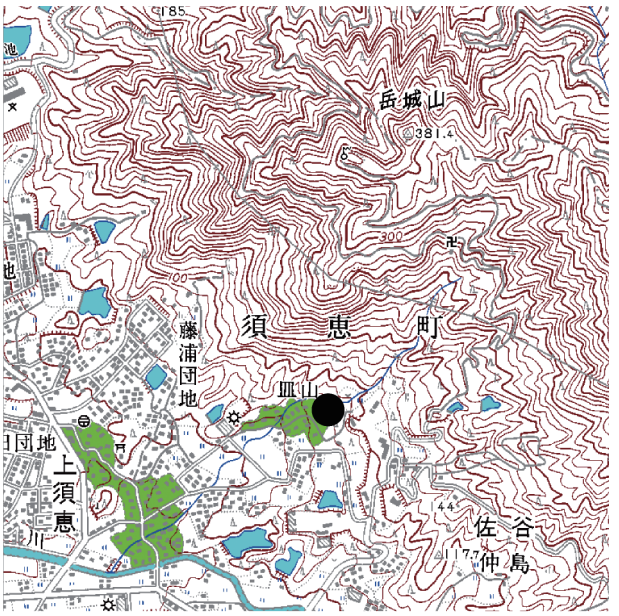
筑前 30　役所畑新窯跡

所在地：糟屋郡須恵町大字上須恵字東原（皿山）
経　営：福岡藩
焼物名：須恵焼
年　代：江戸時代
現　況：山林
備　考：町 290161 として周知化

「役所畑」の地名が残り、隣接する村山家は「新窯」の屋号を持つ。筑前国続風土記附録（平岡本）須恵皿山陶器所の図では「平原陶丘」と記載がある。

若杉山から西に延びる丘陵裾にあり、福岡藩磁器御用窯から皿山川を挟む対岸に位置する。西斜面が幅広い段々に造成されており、福岡藩磁器御用窯と類する構造とみられる。西に隣接地する平坦地には水碓が残る。

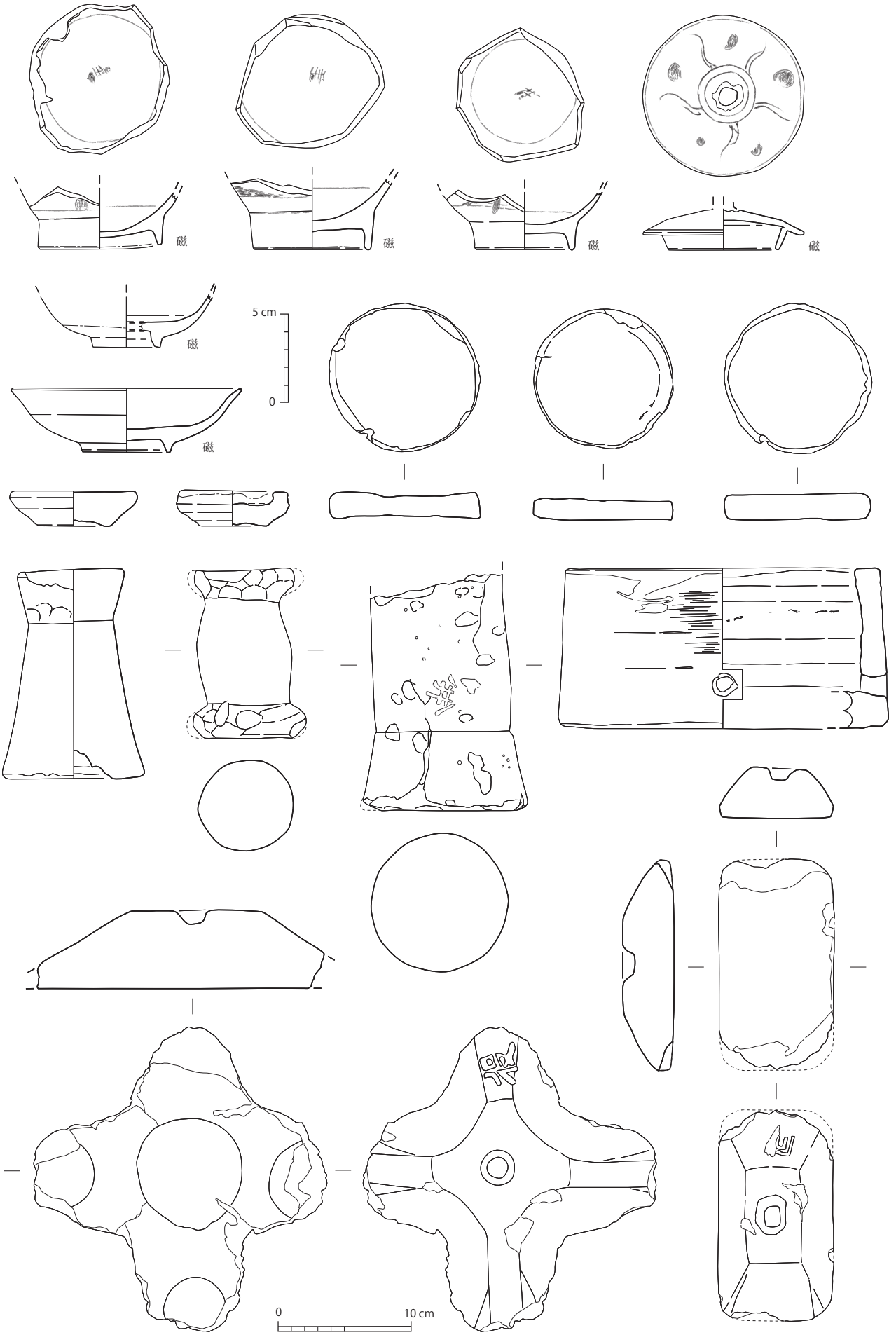
周辺には焼き損じた磁器や窯道具が散布する。採集した窯道具のタコハマやトチンには、「役」「山井」の字が陰刻されていた。



窯跡位置図　『篠栗』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

窯跡現況（近景）



役所畑窯跡遺物実測図（1/3・1/4）　　九州歴史資料館所蔵

筑前 31　宇美障子岳窯跡

所在地：糟屋郡宇美町障子岳
経　営：民窯
焼物名：須恵焼
年　代：明治期
現　況：山林

三郡山系から西に長く延びた丘陵の裾（標高約 80 m）に位置する。昭和 56 年 (1981) の宇美町歴史民俗資料館の踏査により磁器（碗・皿）片や窯道具が表採され、同館に所蔵されている。明治期の須恵焼と共通する特徴をもつ。この地は須恵焼きの登窯に使うための薪山として安永 3 年 (1774) に藩から認められたとされており、須恵焼との関係が深い地域であった。

窯跡位置図　『篠栗』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

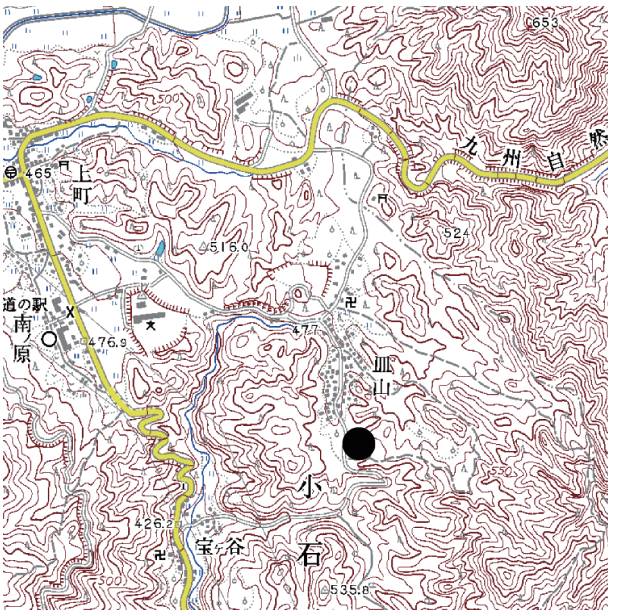
筑前 32　中野上の原窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中野（皿山）
経　営：
焼物名：小石原焼・中野焼
年　代：天和 2 年 (1682) ～享保 7 年 (1722)
現　況：現地保存
備　考：村 80、県 550052 として周知化

『筑前国続風土記』の記述に、天和 2 年 (1682) に伊万里から陶工を小石原中野に呼び磁器を焼成したとある。昭和 62 年 (1987) から平成元年 (1989) に小石原村教育委員会（現．東峰村教育委員会）により行われた中野上の原窯の発掘調査で多量の磁器が出土し、記録を裏付ける形となった。

窯は残存長 38.7m の階段状連房式登窯（推定全長：45 m程）で、焚口のほか燃焼室 10 室が検出された。出土遺物は陶器の他に白磁、染付、色絵がある。陶器は碗・皿・鉢が大部分を占め、他に坏・壺・甕・瓶・水注・香炉・仏飯具・すり鉢・陶管等がある。窯道具にはサヤ鉢、トチン、ハマ、チャツ、シノ（ナンキン）が見られる。特に享保 7 年 (1722) 紀年銘のある陶管が出土しており、閉窯時期を考える資料となっている。

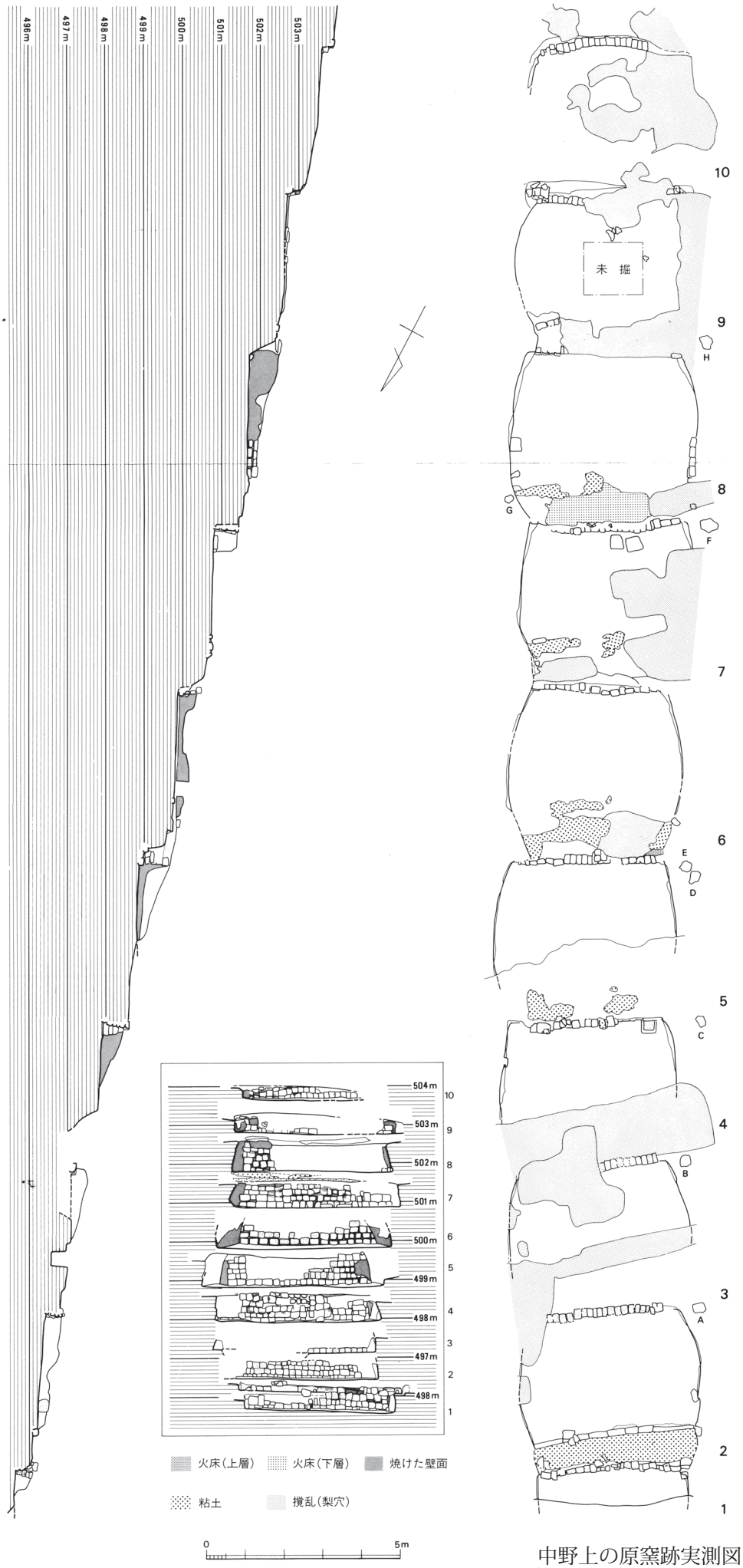
窯跡（調査時）
東峰村教育委員会提供



窯跡位置図　『小石原』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

窯跡現況（近景）



中野上の原窯跡実測図（1/150）

筑前 33　火口谷窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中野（皿山）
経　営：
焼物名：小石原焼
年　代：〔1 号窯〕18 世紀前半～中頃
　　〔2 号窯〕1 号窯より僅かに先行するか。
現　況：山林
備　考：〔1 号窯〕村 77、県 550053 として周知化
　　〔2 号窯〕村 78、県 550054 として周知化

中野上の原窯の西に谷を挟んで位置する。1 号窯と 2 号窯は小さい谷を挟み南北に築かれる。小石原村教育委員会（現．東峰村教育委員会）により、1 号窯は平成 5 年 (1993)、2 号窯は平成 7 年 (1995) に調査が行われた。

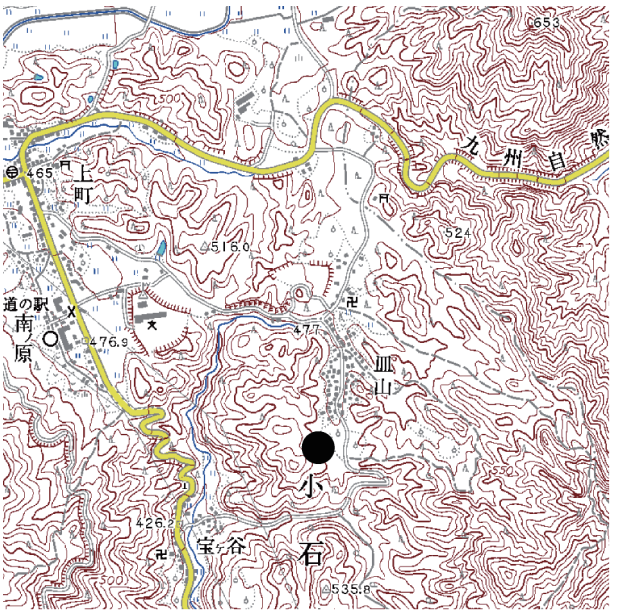
〔1 号窯〕

胴木間と 10 の焼成室からなる全長約 42m の階段状連房式登窯。各室の奥壁には 2 ～ 3 段のトンバイが残る。出土品は皿・碗・鉢・すり鉢・仏飯具等で、中野上の原窯の製品に近似する。しかし磁器が含まれないことから、中野上の原窯で磁器焼成を止めてから操業されたものと想定される。

〔2 号窯〕

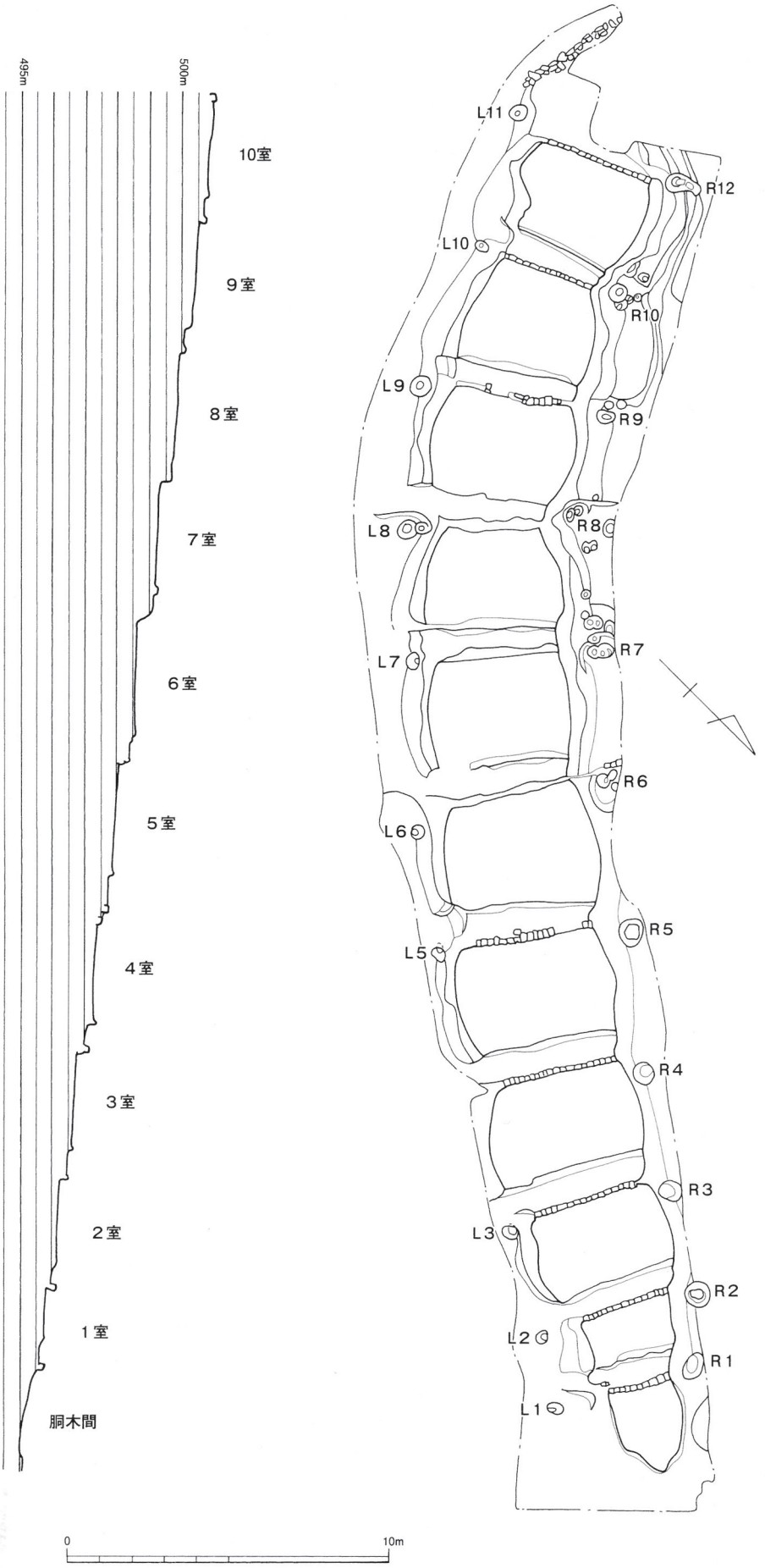
昭和 30 年 (1955) 頃に掘られた目砂採りにより、窯の大半は削平される。京焼風の陶器碗の出土が知られる。

窯跡現況（近景）



窯跡位置図　『小石原』（1/25,000）

窯跡（調査時）
東峰村教育委員会提供

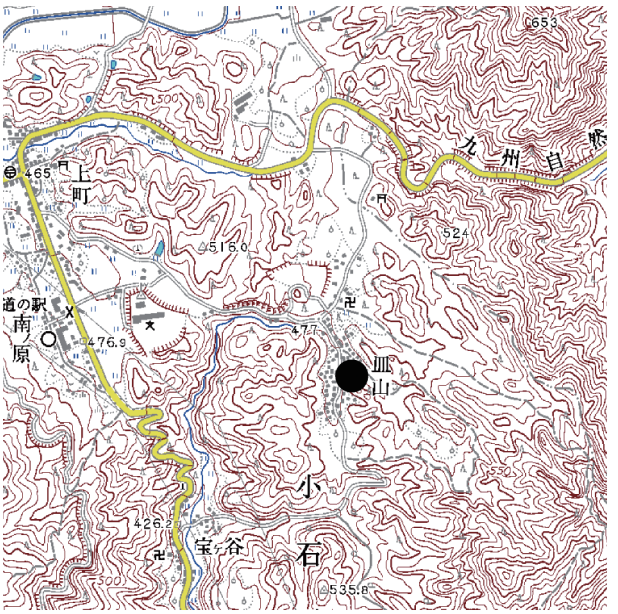


火口谷１号窯跡実測図（１/200）

筑前 34　大明神窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中野（皿山）
経　営：民窯
焼物名：小石原焼
年　代：19 世紀代か
現　況：宅地
備　考：村 68、県 550056 として周知化

旧下組窯に近い丘陵西斜面に位置する。個人宅地内にあり、聞き取りにより窯は横壁・天井にトンバイを使用したとされる。今回の調査では、小石原村誌に記述される位置や大明神が祀られる周辺を踏査したが、窯道具が散布する状況は確認されるものの、窯本体に関する情報は得られなかった。



窯跡位置図　『小石原』（1/25,000）

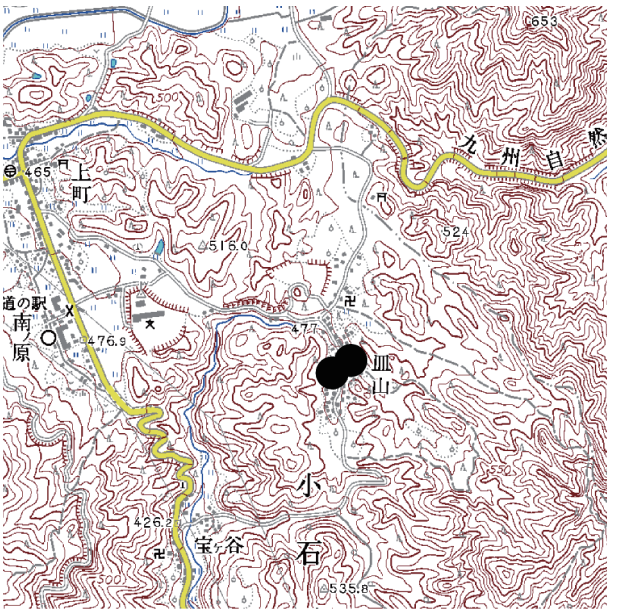
窯跡推定地（近景）

窯跡推定地（近景）

筑前 35　旧下組窯跡

筑前 36　旧上組窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中野（皿山）
経　営：民窯
焼物名：小石原焼
年　代：〔旧下組〕～昭和 36 年 (1961)
　　〔旧上組〕～昭和 32 年 (1957)
現　況：〔旧下組〕倉庫・畑地
　　〔旧上組〕窯
備　考：〔旧下組〕県：550055・村 59
　　〔旧上組〕県：550057・村 73



窯跡位置図　『小石原』（1/25,000）

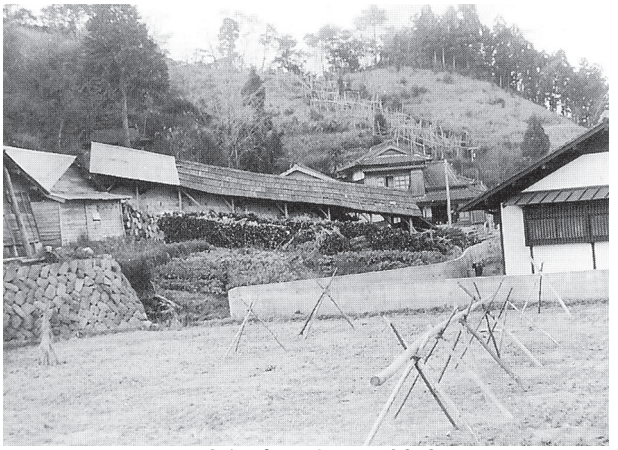
開窯年代は不明だが、かなり古くから操業していたと考えられる。上の原窯等が位置する谷を挟み対峙する位置にある。いずれも焼成室 4 室からなり、それぞれ 4 軒で管理運営された共同窯である。昭和 30 年代まで使用されていた。

〔旧下組〕倉庫や畑地となり、窯跡は確認できない。

〔旧上組〕現在、個人宅に窯があった。

旧下組窯　小石原村誌

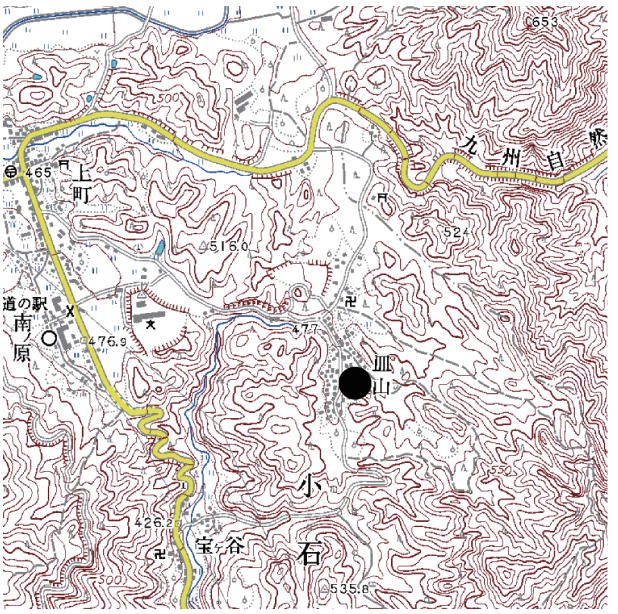
旧下組窯跡現況（近景）


旧上組窯　小石原村誌

筑前 37　池の谷窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中野（皿山）
経　営：民窯
焼物名：小石原焼
年　代：18 世紀前半か
現　況：宅地
備　考：村 72

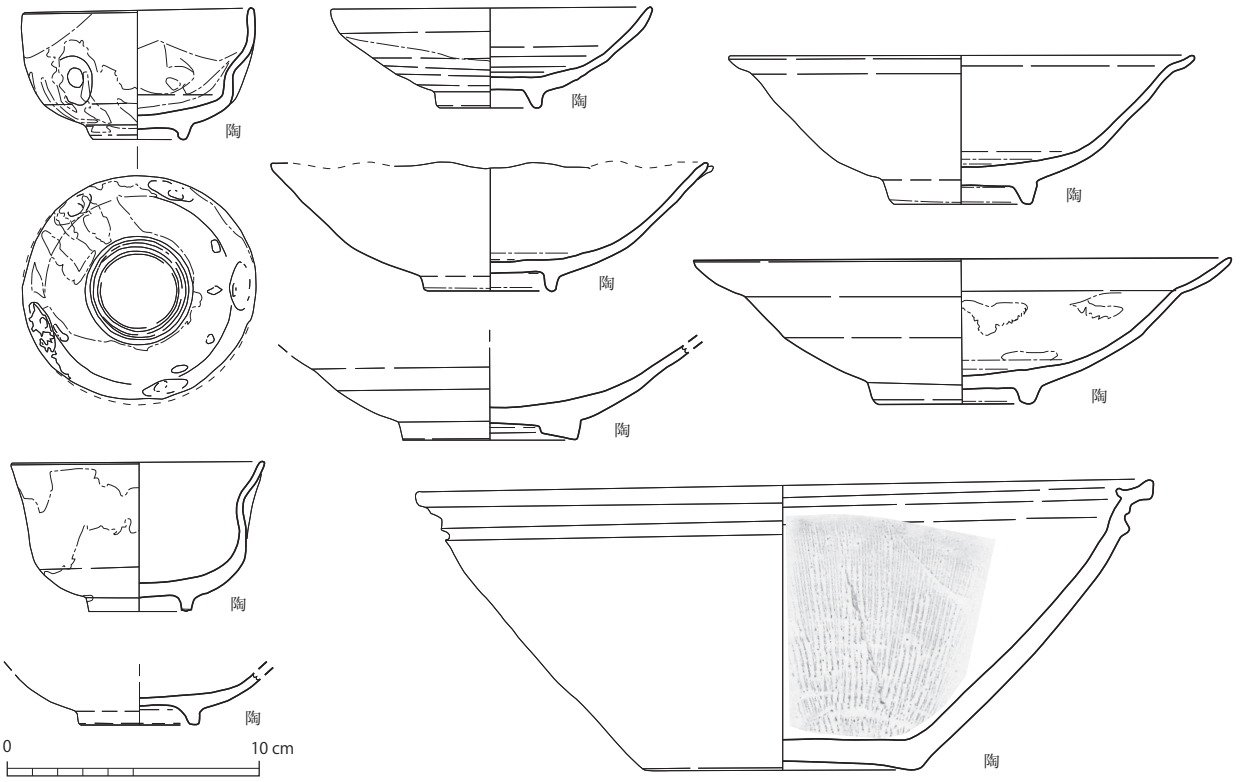
旧下組窯や大明神窯が位置する丘陵に南接する斜面に位置する。平成 6 年 (1994)6 月合併浄化槽建設中に大量の陶片が出土した。現在の宅地部分に窯があったかと考えられ、現状で窯体に関する情報は得られない。出土品は陶器が多く、火口谷窯と同時期に位置づけられる可能性がある。



窯跡位置図　『小石原』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

窯跡現況（近景）



池の谷窯跡出土遺物実測図（1／3）　　東峰村教育委員会所蔵

池の谷窯跡出土遺物

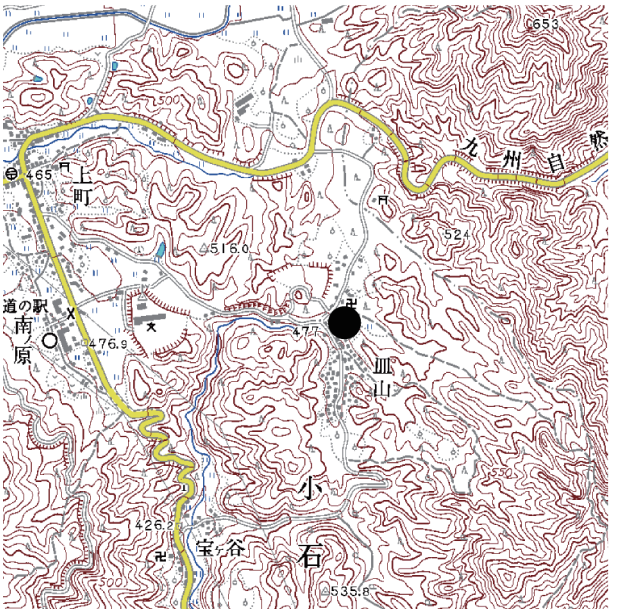
筑前 38　金敷様裏窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中野 (皿山)
経　営：民窯
焼物名：小石原焼
年　代：18 世紀～幕末
現　況：神社・山林
備　考：村 54 ～ 56、県 550058 ～ 550060 として周知化

旧下組窯や大明神窯が位置する丘陵の北側に小さい谷を挟んで位置し、窯跡が集中する皿山地区の北端にあたる。丘陵頂部には火の神を祭神とする金敷大明神が祀られている。

３基の窯が約 50m 間隔で位置するとされ、一番北側の３号窯の確認調査が平成５年 (1993) 度に小石原村教育委員会（現．東峰村教育委員会）により行われている。４室の焼成室をもつ全長約 15m の連房式登窯が検出されている。物原は形成されておらず出土品の量は少ないが、陶器の碗・皿・鉢や窯道具が含まれる。

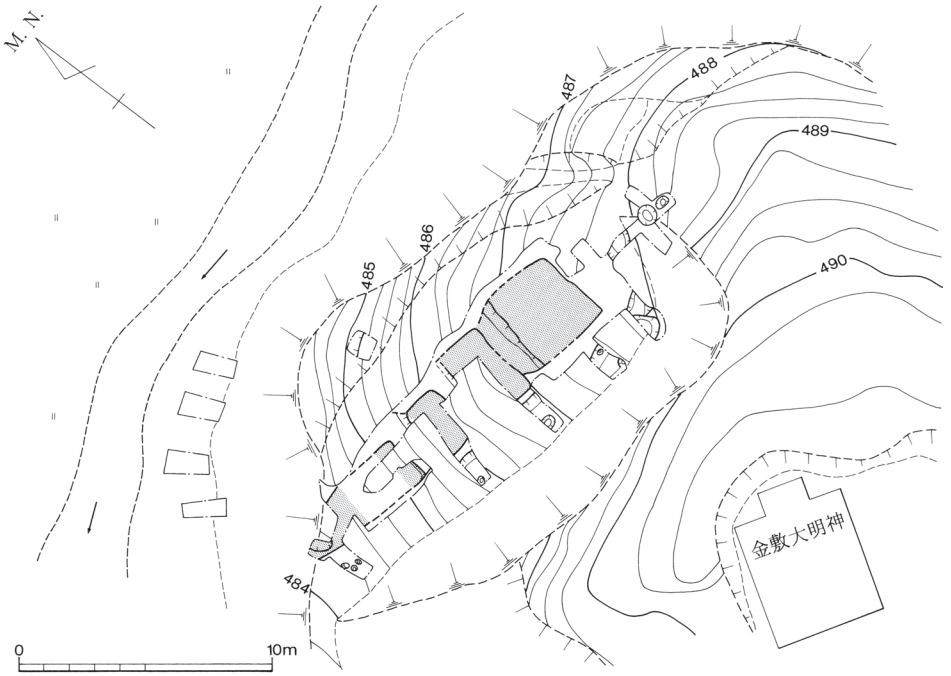
１・２号窯は藪となっており、踏査で陶片の散布は確認できるものの窯跡は特定できなかったが、かつて採集された陶片が東峰村教育委員会に保管されている。



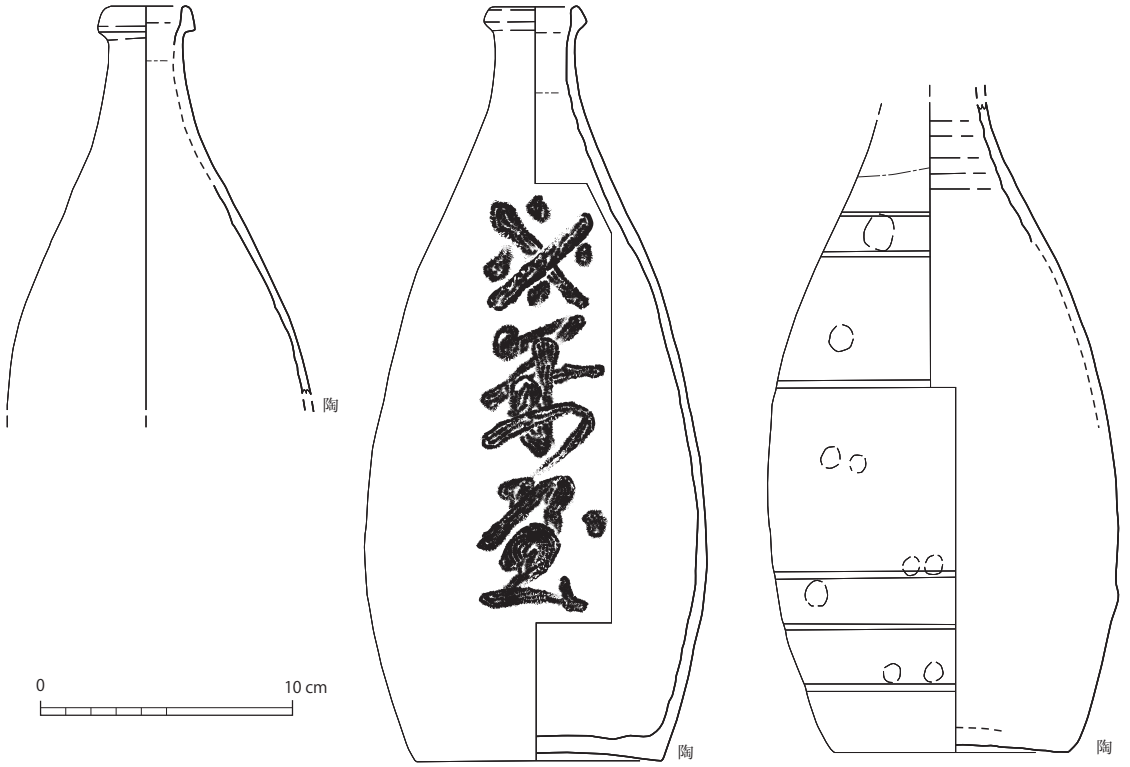
窯跡位置図　『小石原』（1/25,000）

窯跡現況（遠景）

３号窯跡現況（近景）



金敷様裏３号窯跡実測図（1/300）



金敷様裏２号窯跡出土遺物実測図（1/3）　　東峰村教育委員会所蔵